

縄文人の「あの世」と「この世」



国宝・縄文の女神像



能登町・真脇遺跡環状木柱列



長野県金生遺跡より八ヶ岳南麓を望む

2019年（令和元年）8月 お盆

池田 勝宣

はじめに

日本文化の古層に縄文時代に培われた信仰文化が、現代の日本文化の中に粛々と伝わっている文化がある。また、縄文時代の遺物は、日本列島から出土する縄文土器、装飾土器、文様土器、道具類、丸木舟や漁の道具、驚かされる奇異な人形土偶^{ひとがた}や、写実的な動物像群、身に着ける装飾品等々が多く発見されている。そして、精神文化として発掘された遺構は、祭祀・送りの儀礼の場に使われたと考えられるストーンサークル、ウッドサークル等々の遺構が現れている。想像されることは先祖霊への儀礼と推測されるが、現代の我々は、その遺構について正確な答えを出しきれていない。

縄文時代の農耕開始年代についても、縄文前期・中期・後期に稲作は始まっていたのか、この間に歴然した農耕論に至っていないが、稲作は陸稲説^{りくとう}に続き、大豆、小豆、アワ、ヒエ、イモ、ヒヨウタン、エゴマ等は、農作研究論文がその存在を激しく迫っている。そして、東北地方はクリやクルミの植林生産していた事も分かってきた。

縄文時代は、約1万5000年～前2300年の間に、作物の栽培が始まっていた論説は、今は正論となっている。その作物生産の量に於いては、家庭菜園のような規模から、ある程度の生産量を考慮すれば、海岸地帯から乾燥魚貝類・塩と、山側からの黒曜石や、マメ類・クリ・クルミ等の交換交易は存在していたことは確かである。海側と山側の生産物による広範囲の経済活動は、丸木舟や貝塚の堆積物で、その推測はできる。

ヒスイ玉は日本列島を網羅し、ヒスイは新潟糸魚川産、装飾腕輪のベンケイ貝は、奄美大島周辺の海から北海道礼文島まで届いている。現代人も驚くのは、丸木舟で危険^{かえり}を顧みず、伊豆諸島の神津島まで黒曜石を採石に出掛けていることである。

縄文人たちは、日本列島の広範囲による交易行動は、縄文語（やまとことば）を駆使して、列島の辻浦浦までの交易を展開をしている。それ等の理解することは、土器文様が全国的に伝わり、その仕草^{しぐさ}が拡散していることで判断できるのである。

そして、先祖神への儀礼・祭祀に関連して「縄文酒」が造られていたことが分かりはじめ、現代人の我々が想像する以上に、縄文生活文化が繁栄していたのである。縄文時代の文化を考察すれば、縄文人は何処から来たのか、縄文人のDNAに一番近いのがアイヌ人、次に琉球人、その次に本土人となっていることが判明している。

信仰に於いては、縄文人は先祖霊神を崇拜し、その思想が宗教までに高まり、その先祖神信仰はどの様な世界を創りだしていたのか、先達の考古学者、人類学、民俗学者等々の研究論文を参照しながら考察したく思っている。

そして、時代は下がり、日本列島民は先祖崇拝の信仰を持ちながら、仏教伝来ほどの様なカタチで、仏教を受け入れることができたのか、この辺の処を日本の歴史は曖昧にしている。釈迦仏教の本質は、自己の完成を目指すものであるが、何故か、日本本土に定着した仏教は、大方として葬式仏教となっているのは何故か。インド仏教の教えと異なった日本独特の仏教となり得たのは何故か、それは恐らく「お盆の行事」を探求すれば、縄文の信仰文化が見えて来るのではないかと思っている。

縄文人の生活思想を理解するには、「あの世」と「この世」を辿って行けば、縄文人から現代の我々の生活へ伝わる文化の一旦が見えて来るのではないか、この点を考察したい。縄文文化は琉球文化に繋がりその文化が残っているとされるので、沖縄県久高島のイザイホーから、「神女就任儀式」を考察し、琉球文化とアイヌ文化を対比しながら進めて行きたい。ネットでイザイホーの記録映像を見た時、神女たちの両手合わせて先祖神に祈る姿を見た時、その「しぐさ」は、我々の現代人の生活でごはんをいただく時、「いただきます」、「ごちそうさまでした」と、手を合わせる仕草は、あれは縄文時代からの精神性ではないか、仏教の合掌の形ではなく縄文時代の仕草である。この点をも考慮入れて、できるかぎり、色々な処に立寄って考察をしたく思っている。

2017年（平成29年）5月端午の節句 池田 勝宣

目次

はじめに	P 1～2
第1章 縄文人は何処から来たのか	P 3～12
第2章 古モンゴロイドと云われるアイヌ民族を考察	P 13～35
第3章 日本人の「あの世」観の歴史的な流れ	P 36～46
第4章 琉球弧の古層の神々	P 47～71
第5章 八重山・先島諸島の来訪神による奇祭	P 72～82
第6章 琉球列島の化石人骨	P 83～89
第7章 縄文時代に縄文酒は存在したのか	P 90～99
第8章 現代甦る縄文文化を考える	P 100～119
おわりにかえて	P 120～137
付録 沖縄の針突習俗・アイヌの入れ墨	P 1～11

※A4、40字×35行、計148枚

第1章 縄文人は何処から来たのか

日本人の起原の足跡を追って見よう

我々の祖先モンゴロイド人種は、何処のからやって来たのであろうか。祖先モンゴロイドたちは、日本列島に到着するまでの足跡を追えば、アフリカ大陸に於いて約500万年前に原人が誕生している。やがて、原人たちは約20万年前から進化を繰り返しながら、アフリカ大地に新人類(現生人類)が誕生させた。それは、新人ホモ・サピエンスと呼ばれ、ホモ・サピエンスとは、「知恵のある人」を意味するラテン語で、まさに彼等こそが、地球を網羅している現代人に繋がる共通の祖先となるのである。

その祖先にあたる新人類が、母なる大地アフリカを旅立つのは、今から約10万年前頃に移動が始まったとされている。初期の移動は、死海大地^{こうたい}溝帯(東アフリカ大地から続く地球の割れ目幅35~100km、総延長7000km、死海からアカバ湾)で留まっていたが、やがて、徐々に外の環境に身体を適応させ、ヨーロッパやアジア各地へと拡散、今日の世界各地に居住する現代人の祖先に繋がる人類の長い旅の始まりなのである。その新人類の拡散した進路は大きく2派に分かれ、一つは、ヨーロッパを目指した新人類は「コーカサイド」となっており、もう一つは、東を目指した一派は、我々の祖先に当たる現在の「モンゴロイド」となるのである。人類学では世界の3大人種はネグロイド(黒色人種)、コーカソイド(白色人種)、モンゴロイド(黄色人種)と呼ばれている。共に約10万年前頃、アフリカを出発して、西に進路を取ったコーカサイド、東に進路を取ったモンゴロイドが別れたのは、遺伝学の分析によれば、今から6万年前頃と云われている。

東を目指したモンゴロイドの祖先たちの辿った進路も、大きく二つのルートに分かれて進み、一つはアフリカからの温暖な気候を求めて「南回廊」へと進路をとり、もう一つは極寒のシベリア平原への「北回廊」の進路に進んだのである。「南回廊」は西アジアから南アジア、インドネシア周辺を経由して、台湾から琉球弧を北上して、日本列島へとやって来たモンゴロイド系グループとなる。「北回廊」は極寒シベリア大陸を通過し、やがて、沿海州・樺太島(サハリン)から北海道へ渡ったモンゴロイド人種たちである。その分派のモンゴロイドはユーラシア大陸に広がり、モンゴル平原を直進して、中国北部を経由して朝鮮半島へと向かい、そこで、やっと辿り着いた最終地は日本列島で、南回りと北回りのモンゴロイド人種たちは落ち合ったのである。

その祖先たちの偉大な偉業は、極寒の北回廊を歩んだモンゴロイドたちの「寒冷地

克服」という快挙を成し遂げた。そして、南回廊を進んだ祖先たちは、海を渡る舟の「航海術」を獲得し、「海洋適応」の大偉な成果を成し遂げた。この二つの偉業を成し遂げたモンゴロイド祖先たちは、つまり私たち日本人の祖先となるのである。

北周りのモンゴロイド人種は、氷河期時代の北アジアの寒冷地適応した人々で、一重マブタや蒙古ヒダ(上マブタが目頭を覆う部分の皮膚ヒダ)などの体質的特徴を持っている。このモンゴロイド人種の日本列島到達以前に、一足先に東に移動した古モンゴロイド人種がいたと考えられている。それは、古モンゴロイドと云われるアイヌ人種で、彫が深く、小柄で二重^{まぶた}瞼、厚い唇、湿った耳垢、多毛の特徴を持つアイヌとされる。それ故に、アイヌ人は西洋人風の顔に似ている説が出る由縁となる。筆者の仮説、北回りのモンゴロイド、南回りのモンゴロイドの他に、もう一つの古モンゴロイドの孤立種が存在し、一足先に死海大地^{こうたい}溝帯をすり抜け、寒冷期に入る前に、シベリア大陸もすり抜け、沿海州、樺太、北海道周辺に辿り着いたのではないかと考えている。

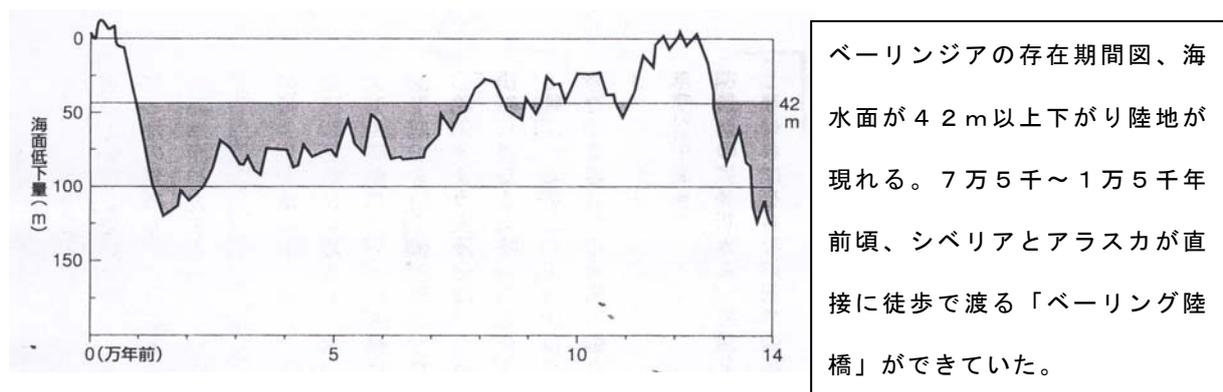


人類適応拡散図 (『印旛の原始・古代』財団法人印旛郡市文化財センター2004年より)

環境に適応した人類の拡散図を見れば、我々の祖先モンゴロイドたちは、気候変動の寒気の周期を掻い^か潜^{くぐり}りながら、移動と拡散を繰り返し、最後の氷河時代(約8万年前に始まり1万年前に終る氷期)にモンゴロイドは、各地の気候環境に適応し、東に進路を進めて食料確保(狩猟と採集)を求めて移動した。モンゴロイド人種は、シベリアの大地で体質改善の耐寒体質を完成させて、大型哺乳動物(マンモス等)を追いながら東へ進んだ。そして、東に進むもう一派は、極東のベーリングシア(ベーリング海峡付5万年~3万

5千年の氷期に陸化、現在より海面が100～120m低くなる)へ進出し、現在のアラスカを超え、北アメリカ大陸に拡散し、更にモンゴロイドは千余年の時間をかけて、南米の最南端フエゴ諸島まで到達し、実に5万kmの旅路を移動したのである。

このモンゴロイド人種たちの拡散は、地球レベルでの人間の棲息地を3分の2の陸地を獲得した。この人類拡散の時代の地球環境は、気候等の自然環境が激しく変動する突入期に入り、3万5千年前頃の気候が、寒冷氷期には北半球を覆ったため、動植物群は温かい南の地方へ移動してした。やがて、今度は温暖な気候の間氷期が始まり、シベリアの大地は森林と草原が覆い始め、動植物群は北へと移動を開始した。モンゴロイドたちは動物を追い、舟や徒歩で東へ東へと移動して、下記のベーリング陸橋図にあるように、サハリンから、朝鮮半島・その周辺から、南西諸島の島伝いに移動して来たモンゴロイドは、北海道・日本の東北地方に居住した。縄文人が列島で、縄文文化を開始したのは、およそ1万5000年前(10万年前説もある)のこととなる。(関心のある方は拙書『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処から来たのか』第7章を参照下さい)



ホモ・モビリタス「移動する人」の説話に民博・民族社会研究部の、印東道子氏の「人類の移動」の話が面白いので要約で紹介します。

《・・・分類学者C・リンネ(18世紀中期のスウェーデンの博物学者)が、「ホモ・サピエンス」は「知恵あるヒト」と命名した人類は、20万年前に誕生した我々の現代人の直接の祖先である新人を指す。これに対して「ホモ・モビリタス」は「移動するヒト」は700万前にアフリカで誕生した猿人以降の人類すべてを含む。地球上の動物のうち、一つの種がこれほど広い分布範囲をもち、異なる生態環境を克服して生息しているのは人類しかいない。アフリカで誕生して以来、森林から草原へ進出することで二足歩行を始め、アフリカからユーラシアへと移動することを繰り返しながら、人類は徐々にその分布範囲を広げてきた。ホモ・サピエンスが誕生してからは、ユーラ

シア大陸ばかりか、南北アメリカ大陸、オーストラリア、そして、海を渡ってオセアニアの島嶼部にまで移動していったのである。

なぜ、人類は移動したのか、その最も重要な原因の一つに、気候変動が考えられる。温暖期に緯度の高い地域にまで移動しても、寒冷期には暖かい地域に後退することを繰り返したのはネアンデルターだった。それに対して、寒冷環境にも適応して、更に先へと移動したのがホモ・サピエンスである。彼らは、気候変動から逃げるのではなく、道具や衣類を工夫することで、寒冷環境へも進出していった。

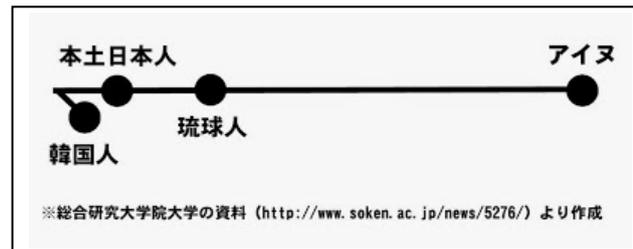
脳容量が大きくなったことも、このような工夫を生み出す背景にあった。人類はユーラシア大陸の大半の哺乳類が越えることのなかった、バリ島の東を通るウォーレス線(バリ島・ロンボク島のロンボクからスラウェシ島西側、マカッサ海峡を通りミンダナオ島の南に至る境界線)を越えて海洋地域へと移動した。島伝いにアジアからオーストラリアへと海を越えたのは今から約4万5千年前のことで、アメリカ大陸に人類が移動した1万数千年前よりも遥かに昔のことだった。動物はウォーレス海峡を越えなかったが、人類は越えていった。その差は人類のもつ好奇心と、道具を工夫する文化的手段を併せ持っていたことが考えられる。・ ・ (略)》

【※ネアンデルター人の、洞窟内で咲くはずのない花の花粉が発見され、遺体に花を捧げていたことが分かった。人類の葬る習慣と、宗教の始まりがここにある。】

日本列島に3人類集団の遺伝的近縁性について 東京大学大学院医学系研究科より
研究グループは、日本列島人のアイヌ人、琉球人、本土人のゲノム解析(人の遺伝子全体)の結果、現代の日本列島人は、縄文人の系統と、弥生系渡来人の系統の混血であることを認める結果が出た。これまでの遺伝学的研究では、アイヌと沖縄人の近縁性の説は出ていたが、決定的なものではなかった。今回、研究グループは、ヒトゲノム中の SNP (単一塩基多型=ゲノム全域に存在する遺伝的多型の一つ) を示す100万塩基サイトを一挙に調べることができるシステムを用いてアイヌ人36個体分、琉球人35個体分を含む日本列島人のDNA分析を行った。その結果、縄文人に一番近いのがアイヌ人、次に琉球人が、その次が本土人で、遺伝的近縁であることが分かった。

一方、本土人の集団として、韓国人と同じクラスター(遺伝子や集団の系統樹で複数の系統が一つにまとまっている状態)に属する事も分かった。更に、他の30人類集団のデータとの比較により、日本列島人の特異性が示されたのである。

この事は現代日本列島には旧石器時代から日本列島に住む縄文人の系統と、弥生系渡来人の系統が共存するという、二重構造説（埴原和郎説、縄文人の集団に弥



生時代以降に北東アジア起源の渡来人の混血を形成)に強く表れている。またアイヌ人は、更に別の第三の系統（ニブフ等のオホーツク沿岸・サハリン住民）との遺伝子の交流がみられ、本土人との混血と、第三の系統との混血が共存していることも分った。

日本列島南北 4000 km 余に亘って、3～4 万年前からモンゴロイド系が居住しており、後に渡来人との混血を含め、北からアイヌ人、本土人、琉球人という 3 人類集団の分布となっていたのである。

日本列島に最初に移住し、縄文人を形成したのは、東南アジアから古モンゴロイド集団(アイヌ系)と、モンゴロイド集団がいた。その後、弥生時代前後に、北東アジアからの多数の渡来人が日本列島に押し寄せて来た。この渡来人は、極寒の寒冷地で世代交代を経てきた集団であり、寒冷地適応を経て、顔などの形態が縄文人とは異なっていた。この新しいタイプの人々（弥生以降の渡来人）は、北部九州から入り、日本海沿岸、近畿地方に移住を重ね、先住民族縄文人と混血を繰り返し、弥生時代を迎える。ところが不思議な事に、北海道にいた縄文人は、この渡来人との混血をほとんど経ずにきた。その歴史結果により、アイヌ人集団のそのままの民族種となり、現在に繋がっていると考える。また、南西諸島(沖縄諸島)に居住していた琉球人も、弥生時代の渡来人との混血はほとんど見られなかったのである。

今回の研究では、祖先集団の遺伝子交流の分析の結果、アイヌ人から見ると、地理的に大きく離れている琉球人が、遺伝的に最も近縁となり、両者の中間に位置するのは本土人は琉球人に次いで近いことが示された。他の 30 人類集団のデータと合わせて比較しても、日本列島人の特異性が示された。これは、現在の東アジア大陸部の集団とは異なる遺伝子構成で、おそらく縄文人の系統を、日本列島が受け継いで来たことを示している。集団を単位とした分析では、アイヌ人と琉球人が系統的に極めて高い精度でクラスター（群れ）を形成しており、それに本土人、韓国人がそれぞれ繋がって行く。以上のことから、現代の日本列島人は、旧石器時代から縄文時代を通じて、先住民の縄文人の系統と、弥生時代前後に日本列島にやって来た人種が、弥生系渡来人の系統の混血がはっきりした。因って本土人は縄文人の遺伝子 12% (10%～12%) 程

度受け継いでいることも判明した。(東京大学大学院医学系研究科・総合研究大学院大学平成24年11月1日の記事より)

【※人種肌色について・ユーマラニン(赤)と、フェオメラニン(茶色から黒)の2つのメラニンが肌色をつくる。メラニンは太陽光に含まれる紫外線を受けると、日焼けにより沈着する。筆者の体験として20年余前、ジンバブエへ旅行の時、黒人のレストランで、白人、東洋人(黄色)は小生一人、その時の印象は、自分の肌の色が、「マッキイロ」に見えた。帰国してみれば、あの「黄色肌」の色は消えていた。】

縄文人のDNAを受け継いでいる琉球人とアイヌを考察

アイヌの人たちは、最近まで焼畑農作は見られるが、米農耕はしていない。「米」のことをアイヌ語で「シサム(和人)のアマム(穀物)」という言い方をし、アイヌの人たちはコメ農作しないことに誇りを持っていた。アイヌ文化は「天津神の文化」(天照大神系)ではなく、「国津神の文化」(大国主・土着神)であることは明瞭である。そして、アイヌ文化と沖縄文化に非常に共通するものがあり、日本の基層文化は弥生以前の縄文文化は、即ち狩猟採集文化で、この文化は、日本列島の中で沖縄と北海道アイヌの文化に多く残されているのである。

日本はこれまで単一国家、単一民族と言われて来たが、実はそうではない。日本人は全てモンゴロイドであるが、よく調べれば日本人には二つのタイプあって、一つは古モンゴロイド型で、典型的にアイヌ人に多く、次に沖縄人に続き、東北、北陸、山陰、四国の太平洋側、南西九州に多くなる。この古モンゴロイドという人種は、顔の彫りが深く、目が大きくて、鼻と口は大きく、そしてヒゲが濃く、胴体に対して手足が長く、どちらかと言えば黄色人種より白人種に近いといわれている。



右の男は縄文人、古モンゴロイドが日本北方(南西説も)からの縄文人となる。左の男は弥生人・モンゴロイドの子孫が氷河期を経て、新モンゴロイドとなり、弥生期に大陸から渡来し、縄文人と混血して、弥生人(新モンゴロイド)となる。出典・multilingirl.comより

それに対して、近畿を中心に瀬戸内から北九州、東海地方の人たちは、新モンゴロイドと云われ、特徴形質は顔の彫りが浅く、ペチャツとした顔、目も鼻も口も小さく

ヒゲが薄く、手足に対して胴体が長い。それでは何故モンゴロイドにはそういう二つのタイプがあって、日本列島に住み分けしたのか。縄文人のモンゴロイド種はみな同じモンゴロイドであったと思われるが、アジア大陸の北に住んでいたモンゴロイドは、その寒冷に耐えるために寒冷地適応を順応し、人種的形成をなし遂げたのである。

その人種的形質の変化をした人たちが新モンゴロイドと云われる人たちで、寒さに耐えるために皮下脂肪を蓄えることで、そのため顔の表面積を小さくして、手足が短くなり、顔は凸凹が少ない形態となっていた。この新モンゴロイドの多く住む地域は、主として農業が古くから発達した地域となり、モンゴロイドの多い地域は、新モンゴロイドやって来る以前から、農業の発達が遅れた地域となっていた。

その地域へ、寒冷地適応を獲得した新モンゴロイドが、大陸から北九州を玄関口として稲作文化・鉄器を持って渡来して来た。農業技術を持った新モンゴロイドは、やがて縄文人を圧迫して小国家をまとめ、大和朝廷を建てて、日本を統一して行く歴史を刻むことになる。自然人類学者に言わせると、近畿地方の人たちは、日本人としては例外的な人間で、その裏付ける説は、人間と共に移動するイヌから、「南のイヌ」と「北のイヌ」が存在し、そのイヌの分布は、「古モンゴロイド」と「新モンゴロイド」の分布地域とほぼ一致している。(参考「沖縄・アイヌを結ぶ視点」梅原 猛著より)

では次にその古代犬を見てみよう。

縄文人はイヌを家畜に飼いならした イヌは本来的に臆病な性質を持った動物で、集団を作りそのボスの後ろ楯があると勇敢に立ち向かう性質を持っていた。人間にとっては、家畜(狩猟・番犬)として好都合で、イヌは人類最古の家畜で、ヒツジで1万2千年前、ヤギが1万年前、ウシが9千年前、ウマが5千年前、ニワトリが5千年前、ネコが4千年前に家畜化されたと推定されている。日本で発掘された最古のイヌの骨は、9千5百年前(神奈川県横須賀市夏目島貝塚)になる。

イヌの骨は縄文期の遺跡から数多く発掘され、縄文初期の遺跡には、関東地方からイヌの骨が多く発掘され、縄文中期になると、東北地方にイヌの骨が移動して行き、縄文後期になると、東海地方の遺跡にはイヌの骨が多く発掘されてくる。

縄文初期・中期・後期の遺跡より発掘されるイヌの骨の状態を見ると、ヒトと同じように埋葬する「棺」(ひつぎ)の中に、ヒトに抱かれるようにして埋葬されたイヌの骨が多く出土している。これらの遺跡から発掘されるイヌは、縄文人が日本国土に渡来

時に、家畜として連れて来たものと推測される。興味あることは約 2300 年前頃、弥生時代に入ると、イヌの骨は球速に減って行き、イヌの数が減ったのではなく、イヌに対するヒトの扱い方が違ってきたのである。事実、弥生のイヌは、頭骨に傷のあるイヌの骨が多くなり、これはイヌを人間によって食用に殺された事を物語っている。イヌが食用になったことは、縄文人と弥生人が、異なった民族であることを暗示している。尚、イヌの骨の DNA 解析では、柴犬と秋田犬は、同じ遺伝子の組み合わせタイプ持っていることが分かった。これらのイヌは日本在来犬であり、犬の先祖は縄文早期に遡っていることも、分かった。(参考『犬から探る古代日本人の謎』田名部雄一著より)

「縄文人の起原、2～4 万年前か 国立科学博物館がゲノム解析する」の記事を、日本経済新聞 2019 年 5 月 14 日(火)記事は次のようにある。

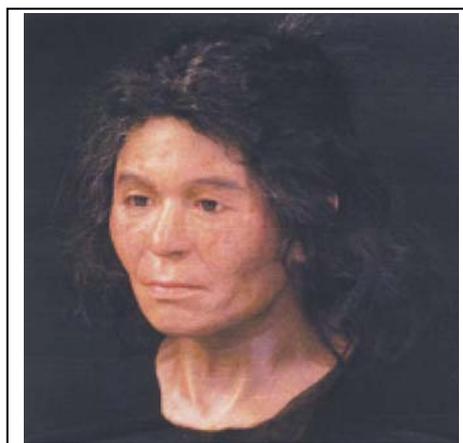
「国立科学博物館の神沢秀明研究員らは 13 日、縄文人の全ゲノム(遺伝情報)を解析し、縄文人が大陸の集団から別れた時期が、今から約 2 万～4 万年前とみられることがわかったと発表した。日本人の祖先がどこから来たのかといった、謎に迫る貴重なデータとなる。詳細を 5 月末にも学術誌で発表する。

国立遺伝学研究所や東京大学などと共同で、礼文島(北海道)の船泊遺跡^{ふなどまり}で発掘された縄文人女性の人骨の歯から、DNA を取り出して解析した。最先端の解析装置を使い、現代人のゲノム解析と同じ精度で DNA 上の配列を特定した。特定した配列を東アジアで現在暮らす人々の配列と比べた結果、縄文人の祖先となる集団が、東アジアの大陸に残った集団から、別れた時期が約 3 万 8000 年前から 1 万 8000 年前であることがわかった。縄文人は日本列島に約 1 万 6000 年前から 3000 年前まで暮らしていたと考えられている。3000 年前以降は大陸から新たに弥生人が渡来し、日本列島に住む人々の多くが、縄文人と弥生人以降のゲノムが交わったことがこれまで知られていた。

今回の解析では、国内の地域ごとに縄文人から現代人に受け継がれたゲノムの割合が大きく異なることも分った。東京でサンプルを取った本州の人々では縄文人のゲノムを約 1 割受け継ぎ、北海道アイヌの人たちでは割合が約 7 割、沖縄県の人たちで約 3 割だった。ゲノム情報からは船泊遺跡で発掘された女性が、アルコールに強い体質であったことや、脂肪を代謝しにくくなる遺伝子の変異を持っていたことなどもわかった。現代人の様々な疾患について、今回の縄文人のゲノムから説明できる可能性があるという。古代の人類のゲノムを解析する試みは、欧米を中心にネアンデルタール

人などで進んできた。縄文人の全ゲノムが読まれたことで、アフリカで生まれた人類集団がどのように東アジアの各地に広がったか研究の進展が期待される。」

【右の画像は北海道礼文島の船泊遺跡で発見された人骨DNAの分析結果から、推測し復元した縄文人女性の画像。「遺伝子の特徴から女性の肌はシミができやすく、耳垢に湿り気があって、髪の毛は細く縮れていたとみられる。船泊の縄文人は脂肪が多いアシカ等を捕食していたとみられ高脂肪食に適応した遺伝子変異も見つかる。」女性40～50歳・身長140cm。】(国立科学博物館提供)



一般的な縄文時代の足跡年表

縄文年表 草創期 約1万3千年前	気候 環境 生活 住居 土器	日本列島が大陸から離れる直前。気候は寒・暖が起り厳環境変化、温暖化が進行、氷河が溶けて海水面が上昇し、「海進」となる。 環境の変化、魚貝類が食料資源となる。狩猟はシカ・イノシシに。 竪穴住居址からサケの顎骨発見。小型骨製U字型釣針。 豆粒文土器・隆起線文系土器・爪形文系土器 ※貝塚不明
早期 約1万年前～6千年前	気候 環境 生活 住居 土器 貝塚	日本列島は大陸から離れ島国に。 気温現在より2度程低い。海面30m低く、奇界カルデラの噴火。 竪穴住居数個で集落構成。ドングリ、クルミ植林栽培始まる。 狩猟道具・弓矢が急速に普及。 煮炊き用土器、縄文尖底土器出現、小型土偶が作られる。 海進、大和シジミ、夏目貝塚等、人口2万1百人、犬と人が埋葬
前期 約6千年～5千年前	環境 住居 石器 土器 遺跡	温暖海面4～5m上昇。内陸部に貝塚。落葉広葉樹林帯の形成。 広場を囲んで竪穴住居作る。湖沼による丸木舟出現、漁撈開始。 木器・土器・櫛・黒曜石等漆塗り始まる。環状列石が作られる。 この時期土器が大量生産、形や機能も多様、平底土器が一般化。 耳飾り・勾玉・管玉等装身具、環状立石列、人口10万5千5百人。

<p>中期</p> <p>約 5 千年～</p> <p>4 千年前</p>	<p>生活</p> <p>住居</p> <p>石器</p> <p>土器</p> <p>遺跡</p>	<p>植林農法が改革、ドングリからクリに変わり大規模化する。</p> <p>集落の規模が大きくなる。</p> <p>海岸線がほぼ現在と同じ、大型貝塚となる。</p> <p>石棒、土偶等呪術物が盛んに。抜歯の風習、大型土器が流行する。</p> <p>貝塚多数、人口 26 万 1300 人。</p>
<p>後期</p> <p>約 4 千年～</p> <p>3 千年前</p>	<p>生活</p> <p>住居</p> <p>石器</p> <p>土器</p> <p>遺跡</p>	<p>大型貝塚、内陸部に貝塚。製塩専門集団や塩媒介集団出現。</p> <p>伸展葬（全身を伸ばして埋葬）、交易目的の漁撈民の移動始まる。</p> <p>大湯環状列石作られ、東北地方に広がる。</p> <p>村の一角に土器塚できる。土器使用の製塩の痕。</p> <p>巨大木柱遺構が作られる。敷石住居址。人口 16 万 300 人。</p>
<p>晩期</p> <p>約 3 千年～</p> <p>2300 年前</p>	<p>環境</p> <p>生活</p> <p>住居</p> <p>石器</p> <p>土器</p> <p>遺跡</p>	<p>気温 2 度前後低下。海面も低下。漁撈活動に壊滅的な打撃となる。</p> <p>木製の太刀。頭部外科手術か、漁撈の網。</p> <p>東北の太平洋側に鮭漁が開花する。</p> <p>北九州・近畿地方に縄文稲作水田始まる。</p> <p>山の寺式土器・柏崎式土器。</p> <p>貝塚。人口 7 万 5800 人。</p>
<p>弥生時代</p>		

縄文土偶のお友だちは魅力がいっぱい

動物形土製品・千歳市美々 4 遺跡
出土・晩期・海獣か鳥か H315cm



コンニチハ、南アルプス^{いもじや} 鋳物師屋遺跡の重
文・ポーズ土偶です・H255cm 中期



富士見町^{さかうえ} 坂上遺跡・中期・井戸尻考古館・重文・ハート形の顔の土偶 H233cm

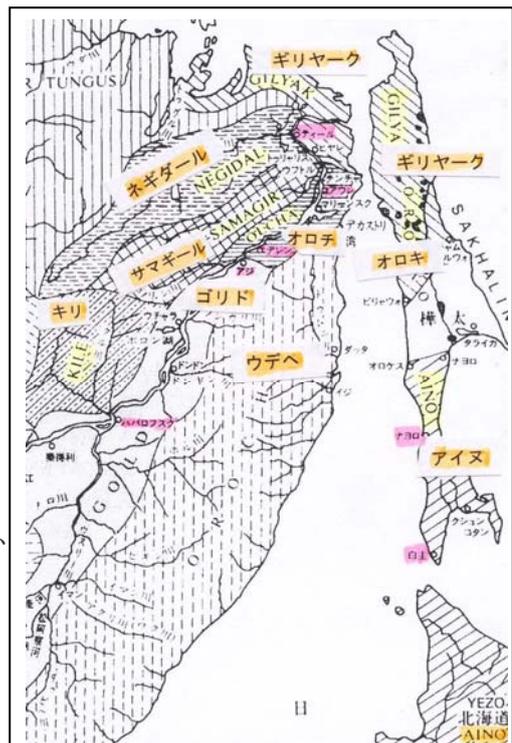
第2章 古モンゴロイドと云われるアイヌ民族を考察

アイヌ民族の信仰 アイヌ民族は、北海道、千島、樺太(サハリン)、カムチャッカ半島南部に住んでいる先住民族となる。現在のアイヌ人口は全体で20万人程、大部分の人々は、現代の文化生活様式を営んでいる。縄文時代早期より、土器や動植物や生活用具、自然現象、病気等の対処する生活儀礼(信仰)は、多数の神々を崇拝する特有の信仰と、文化を今日も継承している。アイヌは北方少数民族同様に、極めて寒い地域に暮らす人々と同様の生活形態を持っている。北海道アイヌをはじめ、オロキ、ギリヤーク、ナナーイ、イヌイト、エスキモー等が先住民族となる。現在の世界全体では38種族の北方民族がおり、現代の人類学では、少数北方民族の研究は進み、形質(外側の性質や姿形)人類学や骨の形、ミトコンドリアDNAの研究から、アイヌ民族の主な祖先は、4万年ほど前に、インド方面から東アジアに移住して来た人たちであると推測されている。

同類のモンゴロイドも、北アメリカ大陸に渡り、南北アメリカ大陸の最古の住民となっている。また同じモンゴロイド種でも、東アジアから日本列島に渡り、やがて日本列島に拡散したと推測、それは後期旧石器時代より縄文時代より約2万5千年前のこととなる。

後、1万年ほど前に中東の肥沃な三日月地帯と呼ばれる地域で、農業革命と呼ばれる変化が最初に取り、狩猟採集によって食料を得ていた生活から、農業耕作革命によって食料調達を得るようになった。この食料確保を成し得た民族たちは更に、食べ物に火を使う事により、色々な植物や魚、動物等を料理法によって、食料改革に多大な変化を遂げたのである。

この農業革命が起こった時期は地域によって異なるが、1万年前～数千年前であり、後期旧石器時代末期となる。この頃の時期、凡そ1万5千年前頃に氷河期も終わり、温暖な気候となり人々の生活も進歩し、道具等の改善も進み、農耕用具や



シュレンク(1850年)沿海州の少数民族分布図(国立民族学博物館研究報告・佐々木史郎著)。色彩は筆者による拙書『アムール下流域ヌルガン都司と寧寧寺と先住民族たち』P37~39参照

狩猟等の、高い技術革新がみられ、従来考えられていた旧石器時代晩期の生活より遙かに豊かな暮らしを獲得していた。この時代の人たちは、食料確保を優先し、子孫が住みやすい場所へと移動を繰り返し、そして、各モンゴロイドのグループ集団は、移動行動の目的は食料確保となっていた。そのため全知能を使い、動物獲物の確保のために、動物の群れが何処にいるか、情報と知恵に明け暮れ、天候の問題、食用植物の変化や観察にその予知能力に全力をついやしていた。

沿海州・樺太・北海道・東北の地域にやって来た古モンゴロイド・アイヌ(南西アジアからやって来たと推測している)は、生きて行くための知恵や情報を全自然界に求め、火の神、天の神、大地の神、森の神、動物の神、泉水の神、山の神、住まいの神等々の、^{やおろず}八百の神々に許しを請う、生活の歴史を積み重ねてきた。

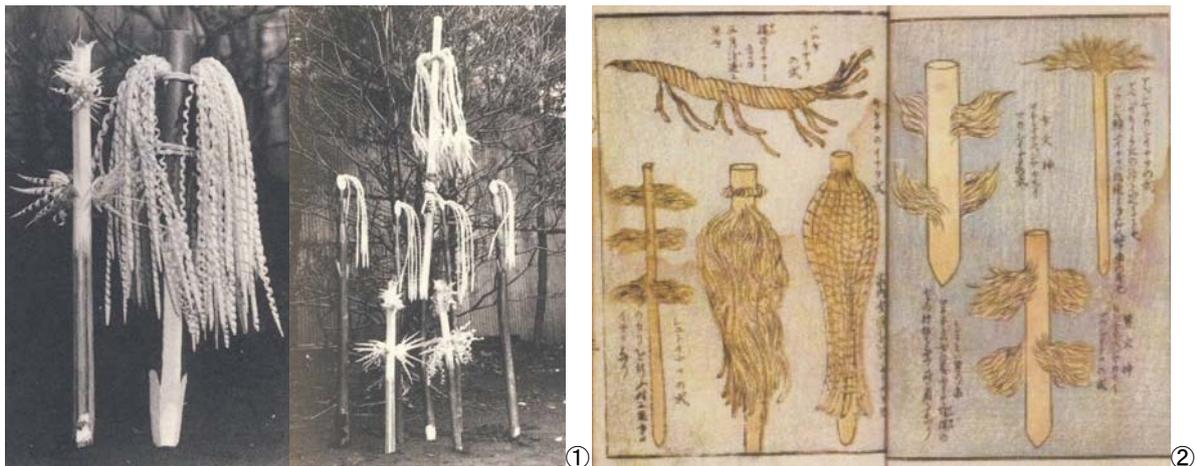
一般的に神をアイヌ語で神を「カムイ」(霊的存在)と呼ばれ、最もランクの高い靈魂となっている。アイヌの人たちの信仰は、沿海州の民族のアニミズムとは少し異なり、アイヌ人たちにとって神々とは、人間には無い能力をもっている存在していることを意味する。たとえば、強い力を持つクマ、オオカミ、シャチ、トド、人を殺すことのできる毒ヘビ、闇を見通すことのできるフクロウなどが、神々とされている。

特に、鹿やクマやシャケは肉体を被っている「神」と考え、この神が肉体を被り、肉や皮や骨などを人間に送り届けてくれているのだと、アイヌの人たちは固く信じている。特に「火」は、「生活の中の最高神」として^{あが}崇め、人間を寒さから護り、煮炊きにより、食べられない物まで食べることができ、人間の心を豊かにしてくれる「火の神」は、生活の中では最高神となっている。家の中に宿る火は、アイヌ人たちの最も身近な神であり、^{いろり}囲炉裏の周りで、日々の生活談では「ありがたさ」を、報告する神でもある。「火の神」は炉の神棚の神であり、因って、家を護る火の神に火を絶やさないう生活を、堅固に守る生活を営んできた。

また、道具に宿る^{たましい}魂(神)は、人の魂より位は低が、人間が狩りを行う時など、クマを射るには弓と矢を使うが、「クマの神」が人間に肉体を提供することを、自ら望まなければ、クマの体に矢が当たる事はない、と考えている。クマという神は、クマの体にいる魂であって、この魂が肉や毛皮や薬となる内臓のさまざまな部分を、人間のために体を呈して人間に与えてくれる存在なのである。人間として立派な生き方をしている人間だけに、狩人を通して弓を射た時、「クマの神」は自ら矢に当たってくれて、その肉体を人間に贈ってくれるのだと、アイヌ人は強く信じる信仰となっている。

クマを狩った時、アイヌたちは肉や内臓や骨と一緒に、皮や頭も大切に持ち帰り、仕留めた人の家の炉端で、最も上座にあたる北東の位置に、毛皮をたたんで置き、その上にクマの頭を置き、並べる事により体から離れたクマの魂は、暫くの間、炉端上で魂は居座っていて、炉にいる「火の神」と懇ろに語り合っているのである。

アイヌの人々の手厚い持て成しを受け、男たちは、カムイノミ（神に祈る）に礼拝を行ない、神が訪れてくれた事に感謝し、そして、サケチッカ（捧酒）と呼ばれる、クマの魂を神々の国に送り届ける、儀礼を行なう。様々なイナウ捧が供えられ、儀礼用のお椀に入れた神聖なお酒を、イクパスイ（捧酒箸）と呼ばれる木ヘラの先につけて、「火の神」と「クマの神」に捧げて、カムイモシリ（神の国）と呼ばれる神々の国に送り返す言葉を口頭で述べる。しかし、魂を送り返す儀式を自分たちの利益だけのために行っているのではなく、クマの魂に感謝して魂を送り、この大自然の中を、魂が巡り巡って回っていく信仰を、心から祈りと、祭祀儀礼を行って、「熊の魂」に間違いなく天に送り、大自然の恵みに於ける人間の重要な役割を果たすと考えている。



①家の守護神幣と粗霊供養『アイヌ民族の宗教と儀礼』 ②ウナウ・北海道大学附属図書館北方資料室より

「アイヌ文化から学ぶもの」 日本神道には欠くことが出来ない神具は「御幣」である。多くは木の枝に白い紙を取り付けたもので、結婚式や七五三等で御幣を捧げて、神にお祈りすることは日本各地で見られる。すでに柳田国男が、御幣はアイヌの①・②「イナウ」から来ているものと指摘している。この「イナウ」（木幣）というのは、アイヌが神祭りの時に用いるもので、柳の枝を削って作る祭祀の用具であるが、この「イナウ」というのは、元々は鳥で、目もあり、耳もあり、足もあり羽もあるので、アイヌは神に祈る捧げる神の数だけイナウを作り、イナウの前で祝詞を唱える。

すると、鳥であるイナウは、人間の願い事を聞いて、その願い事を持って天に飛んで行く。イナウを立て並べてある場所を「ヌサ」(祭壇)と呼び、ヌサ場から一つ一つのイナウが鳥になって人間の願いを天神に伝え届けるのである。アイヌに於いて、マラプト(客人)と云われるものは、何よりもまずクマ(カムイ)なのでクマは天の彼方からミヤングを持って、人間界にやって来たマラプト、即ち客人なのである。

クマは天の異界で人間と同じような生活して、人間と同じ様な社会生活を営んでいると信じられている。



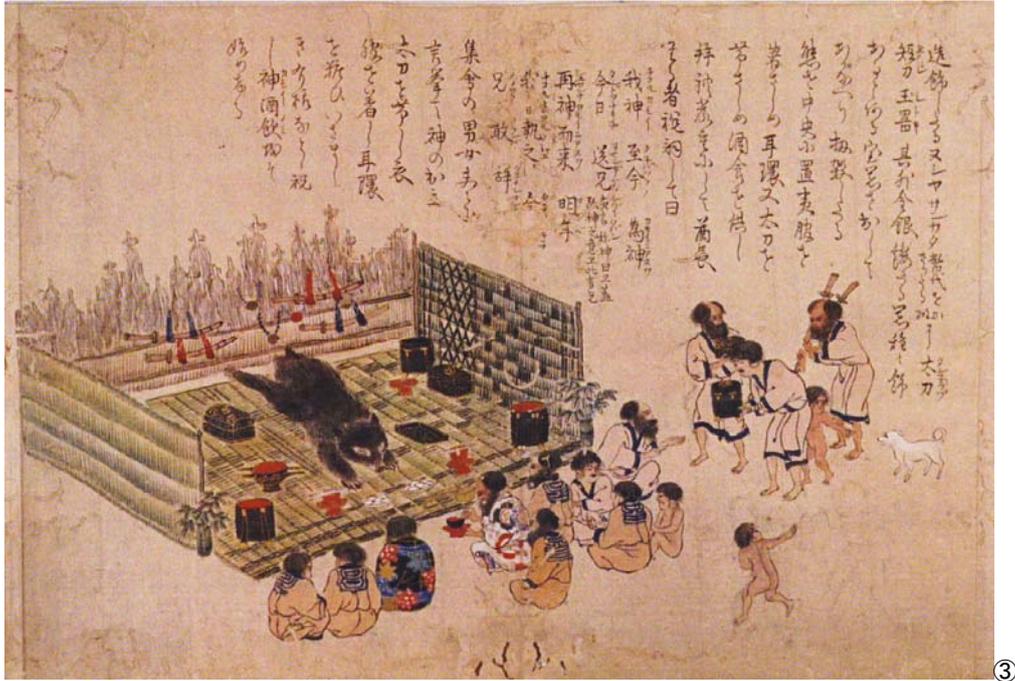
こへい
御幣・神霊の宿る 神道神社より

そして、この地上の人間の世界(この世)に現れた時は、クマという仮装(毛皮)を被ってやって来ているのである。「何のために」それは、自分の美味しい身を、ミヤングとして人間に与えるためである。それ故、そのマラプトの意志に従って、人間はクマの子供を捕獲したら、客人として手厚くもてなし、その子熊を無事成長させねばならない。クマが成長してから肉が最も美味しい時期になった時、人間はそのマラプトの意志に従ってクマを殺し、その身を食べねばならない。かくしてマラプトは殺されるのであるが、それは、マラプト自身の意思によるものなのである。

人間はミヤグを受け取るかわりに、一つの務めを果たさなくてはならない。それは、クマの魂を天に送る事、このクマ祭りの祭事を、③「イオマンテ」といい、即ち「それを送る」という意味で、その祭りの中心は、クマを殺して食べる事にあるのではなく、そのクマの魂を無事に「天に送る」事にあるのである。そのために、前もってイナウを立て並べたヌサが作られ、祭壇に魚や穀物や酒が添えられ、クマの魂はこのイナウに委ね、鳥に乗って魚や穀類や酒等の捧げものを天に持ち帰るのである。このような天に「送る」信仰は古代の日本の狩猟採集時代にあったものであろう。

アイヌ信仰の全ては大いなる生死の循環であって、太陽も朝生まれて、夕方には死に、死んだ太陽はまた翌日に甦る、そして、また死んで行く。一日一日の太陽は死ぬばかりか、一年毎に生死のリズムを繰り返す、夏は太陽の力は強いが、冬は太陽の力は衰えて死となる。月もまた、一カ月の間で満ち欠けをし、生死を繰り返している。イナウは柳の木の枝を削掛けにし、目や口足をつけ、それを囲炉裏そばの側に置き、ヌサといわれる棚に飾って祈る。本州の御幣の原形で、人の霊のシンボルとなっている。

(参考文献「甦る縄文」『日本人の「あの世」観』梅原猛著より)



③イオマンテ「蝦夷島奇観」幕吏・秦檣丸(村上島之丞)絵師平沢屏山・1800年・東京国立博物館より

アイヌについて アイヌの伝統の暮らしの様子を『アイヌの足跡』満岡伸一著・大正13年から参考して進めたい。アイヌの現代社会では、民族の風俗を肌で感じる生活は少なく、書籍やアイヌ資料館等での考察は、過去の出来事のように思える。アイヌの人々の風習を肌で感じられる書籍『アイヌの足跡』より拾い読みをする。この書籍は白老アイヌ民族博物館で復刻されたもので、インターネット国立国会図書館デジタルコレクションでも閲覧できる。

アイヌの足跡と概観 其の1・《・・・概して性(性格)は朴訥(そぼく)で神に対する信仰厚く、日常百般(日々の様子)の事総て神と交渉があり、殆ど各自の自由行動を許さず。丁度日本の昔の「祭政一致時代」(祭祀と政治が一体)を聯想させるものがある。殊に末項(最後に)の迷信などに到っては、其の無智と頑迷(不道理こと)に同情すると共に、宗教が文化に及ぼす影響の大なる事に、驚かざるを得ない。元来アイヌ人は祖先から伝わった風習は、総て神の教えによるものとして、生活様式より風俗習慣の枝葉末端に至る迄、少しも之れを軽視せず、不便極まる原始生活を「アイヌブリ」(生き方)と称して尊重し、内地人の文化生活をむしろ冷笑し、之れを卑しむ程で、内地文化の輸入等は全く念頭に無かったのである。若し強いて犯す者がおれば、神に対する甚だしき冒瀆として神罰を恐れた。然も総ての天災、地変、病気災難は神罰、或

は悪魔の神の跳梁（自由にふるまう）と信じ、常に自肅自戒して神意に背かないように努めた。神罰は其の事柄と場合により一部落、又は全種族の連帯責任として神の咎めを受けるものなので、時によっては犯人と何等関係ない老幼の病気も、出漁船の難破も、皆、悪者が神を冒瀆（汚す）した犠牲と信じ、且つ恐れていた。これの例として、アイヌ婦人の談話を紹介する。

「私がまだ15、6歳頃（明治30年頃）内地人の娘さん達が奇麗な下駄を穿いて歩くのを羨しくて、何とかして下駄を穿いて見たいと思って居ました。何しろ其の頃はまだ私達は跣足（はだし）で歩いていた頃です。漸く苦心して働いた金で赤緒の下駄（赤いハナゴの下駄）を買い、誰にも見られない様に人の居ない所で穿いて、独りで喜んで居りました。所が運悪く、横道の草の中から突然他家のエカシ（老翁）が来たので、急いで下駄を脱ぎ、後ろに隠しましたが既に遅く、其のエカシに見付けられて仕舞ました。エカシは厭な顔して行過ましたから、そこですんだ事と思って居りましたら、其の晩、村の元老達が4、5人連れて私の家に参りまして、父親に対し改まった態度で今日の私の下駄の一件を話し、平素子供の躰が悪いからこんな大変な間違いを起すのだ。祖先から伝わった尊いアイヌの風習を破る不心得な者がある為に、近来村内に色々な凶変が多い。結局尊いアイヌブリ（アイヌ風習）を破って内地人の真似などするから、神の怒りに触れるのである。之れから充分注意して貰いたい。今日の事は皆で神にお詫びをして貰う事にしなければならない、と云う事になった。翌日再び皆に来て貰って式を営み、神に神酒を捧げ、代わる代わる御詫びの祈りをして、漸く許して貰いましたが、後で父親に大変叱られました。」些細な一少女の下駄の問題でさえ村の元老会議となり、謝罪の祈禱式を行う程の騒ぎとなる。・・・」と述べている。

其の2話・《・・・14、5年前の話（大正13年より前の話）、北大（北海道大学）の医学部で純粋アイヌの死体を研究資料として欲しい、との話を受け給わった。そして最も自分を信じ理解ある一老人に頼んで、承諾いただいた。それから3年ばかりして連絡があつて、それは、親戚一同は大問題となり、その話は次の様に、親戚代表として反対の理由を説明した。説明文は端折っている。

「ニシッパ（旦那の意・満岡氏）が力を入れて斡旋して下さることでもあり、本人（死去者）も在世中、快く承諾し家族のものも異存がなければ、自分等親戚と雖も彼是言う理由も必要もない訳であるが、併しアイヌには昔からの仕来りがあつて、それを破るこ

とを非常に嫌う風習がある。それは神の教えに背くと言う訳で、畢竟（究極）神罰を恐れるからである。世の中が開けた今日から見れば、馬鹿気た迷信に過ぎないが、祖先以来信仰として伝えられたこの迷信は、一朝一夕に如何ともすることは出来ない。実は先年ニシッパ（満岡氏）の斡旋で、北大がアイヌ風俗を映画に撮ったことがある。あの時この家の葬式の型（葬儀）を写したが、これが問題の種で、神を偽り、葬式を行うなど冒瀆も甚だしい、と言うので、村内非難轟々たるものがあった。神の怒りに触れ、必ず神罰が来るものとして、老人などは恐れ戦き、不安裡に過して居った。ところが其年の夏、偶然にも、出漁中の鳥賊の舟（小舟）が、時化に逢って顛覆し、十数名の犠牲者が出た。これは問題の偽葬式の神罰であると言う事になり、悲嘆の涙の遣り場がない遺族のものが、この一家を怨むこと甚しく、親戚の我々まで一般から冷眼視され（冷ややかな目）、何程不愉快な思いをしたか、肩身の狭い思いをしたか分からない。勿論我々は、それを信じないし、そんな馬鹿々々しい事があるとは思わないが、部落民大部分の頭が、まだそこ迄進んで居ないから、殊に犠牲者の遺族などにして見れば、堪え難い悲しみの遣り場が無いので、結局この一家の冒瀆の犠牲と決め、此家に対し深い怨みを持って居る。

まだそのほとぼりも冷め切れない今、又、祖先来の習慣を破り、老人の死体を神の元へ返さずに、学校などに遣ったとすれば、その騒ぎは一通りではないと思う。恐らくこの一家及び一門に当る我々親戚のものは部落の仲間外れにされると思う。部落全体の人達の頭が進んで、気につけない時が来たら、学界の為になり、又全道同族のためになる事でもあり、私自身も北大に提供したい位に思うが、現在まだそこまで進んでいない。理屈で押しても、感情は如何ともすることが出来ない。ニシッパ（満岡）の気持ちはよく分かっている。先きの映画と言ひ、今度の死体の提供と言ひ、徒らに不安裡に陥入れ、村の平和を乱す様なことにもなるから、此度の事だけは中止して貰いたい。」という話で、今件の話は終わりとなった。・・》と、述べている。

《この文章を読むと明治初年開拓使庁の設置以来、まだまだアイヌ民たちは、自らの風俗習慣を頑なに守っていたことを知ることとなる。》

本州における蝦夷の末路を鋭く考察 『先住民と差別』喜田貞吉著より、先住民アイヌについて、喜田貞吉のその蝦夷論説の部分を要約で紹介する。

【※古くは「えみし=蝦夷」といい、東北地方では長く不帰属があり、帰順し内地に移され

た蝦夷は「俘囚」、又東国武士も夷と呼ばれた。】

蝦夷と日本人 《・・・津軽外ヶ浜に残っていた蝦夷と、今の北海道アイヌとが、同一系統の民族である。これまで歴史上の蝦夷という名称を表されず、普通に日本人の如く思われていた英雄豪傑の中に、素性を調べて見れば立派に蝦夷の系統であることが、明らかな者が甚だ多い。その関係は、坂上田村麻呂、文室綿麻呂の蝦夷征伐の時代から、極めてなだらかな関係が継続している。しかし、それが一般には、蝦夷として認めていないので、それに気付かずに歴史を経ると、蝦夷と日本民族との間には、何時とはなしに、自然の移り変わりを以て、彼らは日本人に成ってしまったのである。

その事実の中で最も著しいのは、前9年役（1051）の安部氏、後3年役（1062）の清原氏、平泉で繁盛を極めた奥州藤原氏、遥かに時代が下がって、鎌倉・室町時代の頃に、津軽地方に勢力を有した、日之本將軍と呼ばれた安東氏などが挙げられる。安倍貞任や清原武則、藤原清衡、これ等の人々のことを、後世誰も蝦夷だと思ふ人はいない。系図の上から申しても、安倍氏は崇神天皇朝四道將軍（皇族の將軍）の一人なる、大彥命（古代の皇族）の後裔、清原氏は天武天皇（7世紀後半第40代天皇）の皇子舍人親王の後裔で、藤原氏は大織冠鎌足の子孫田原藤太秀郷の後裔、ということになっている。



壺の碑・東北町
令和元年6月写す



④日本中央の碑「つぼのいしづみ」ウィキペディアより ⑤多賀城と外柵と官衛図・多賀城跡公園より

【④碑文（現代文）・京を去ること一千五百里、蝦夷の国の界を去ること一百二十里、常陸の国の界を去ること四百十二里、下野の国の界を去ること二百七十四里、靺鞨（現沿海州）の国を去ること三千里、此の城神龜元年歳は甲子に次る、按察使兼鎮守府將軍・從四位上・勳四等・大野朝臣東人の置く所也。天平寶字六年歳は壬虎に次る、參議東海東山節度使・從四位上・任部省卿（八省）・兼按察使鎮守將軍藤原惠美朝臣、修造する也。 天平寶字六十二月一日】

桓武天皇の延暦年間に、坂上田村麿（公卿・武官・桓武朝は2度に亘る征夷大將軍）は遠征し20数年間に亘る奥州の大乱を治める。遠征は大成功で今の岩手県中部地方に勢力のあった蝦夷は弱体し、田村麿は胆沢城に鎮守府を設け、蝦夷地守備の根拠地とし、更に北の紫波郡の地に紫波城を築いた。

彼らは日本語を使い、日本風の生活をし、当時の日本人の上流に劣らぬ生活で暮らしていたのであろう。更に血の上から言えば、度々日本人の血を交えて、おそらく普通の日本民族と変わらなかったであろう。しかし、当時の人々は、これを俘囚（朝廷に帰属の蝦夷）の長と云い、前九年・後三の役を、征夷の軍と云い、源頼朝が征夷大將軍の官を誇ったのもこの征夷の官職を以て、夷狄（えびす）藤原氏を討伐する征夷軍と理解されている。ことに藤原清衡は、自ら「東夷の遠酋」と云い、「俘囚の上頭」と云い、その配下を称して「蛮陬夷落」（蛮は東の野蛮人、陬は僻地、落は村）などと称し、京都の公家衆は、清衡の子基衡を呼ぶに「匈奴」の称し、その子秀衡を呼ぶに、「奥州の夷狄」の語を使っている。

俘囚は、夷とも云われ、蝦夷の日本風呼び方をし、後世の人々が蝦夷の種だと言われぬように、彼らは既に日本風に称していた。蝦夷民族とは、この日本列島に居た先住の土人であり、後に海外から多数に移住して来た渡来人と混血して、悉く天孫民族（日本神話に於けるヤマト王権）の暖い懐に抱かれ、完全に同化融合し、同一の国語を話して同一の生活をする、同一の思想を有して共に同一の国家を組織する、一つの新しい人種であると喜田貞吉は解釈している。



⑥ 国府多賀城南門より入口階段



⑦ 多賀城南門解説図・多賀城跡公園より

蝦夷と武士道について 《・・・世間の人々は蝦夷と云えば、北海道のアイヌを連想するが、今のアイヌは松前時代の多年の圧迫の為に、世間の文化の進歩に遅れた故に、その差違がある。昔の蝦夷と当時の日本民族との間には、文化の上に於いても、著し

い差違が無かったであろう。蝦夷の長所・美点は日本民族に混じって、日本民族の長所美点の上に加わったのである。国家の懐柔政策は蝦夷を内地の諸国(熊襲・土蜘蛛・八東脛・国栖等)に移し、日本民族に同化融合させたのである。その結果、日本国中至る所に、蝦夷の血は地方に広がった。従って、日本各地の住民は毛深い人が多いのは、この蝦夷の血を交えている一つの証拠となっている。

蝦夷やアイヌの長所と美点の著しいのは、彼らは勇悍にして死を恐れず、至って義理堅いという点で、これは武士道的の性格を持っていたから、国家の干城(干は盾、国を守る武士)たる兵士となり、或いは貴顕紳士(貴族)の従者となって、天皇の御為に、またその主人の為に、最も忠勇なる働きをする民族となって行く。歴史を見ると、いつも蝦夷征伐という言葉が使われ、日本人は常に蝦夷に圧迫を加えているように、歴史は見えるが、蝦夷征伐といっても、決して官軍と蝦夷とが相対して戦ったのではない。彼らの中には、未だ朝廷の導きも知らず、日本民族の仲間になる事を拒み頑強に反抗する集団がいたから、蝦夷征伐の必要もあったのであろう。

しかし、この場合の官軍側に、勇士なる蝦夷の武士が多く帰属していた。正に夷を以て夷を征するもので、かの伊治公紫麻呂(蝦夷の族長・伊治皆麻呂の乱を起す)もその例で、蝦夷を古語では佐伯(蝦夷の別種族)と云い、その佐伯を徴発して宮門護衛の兵士に採用して佐伯部とし、大伴氏一族の佐伯宿祢に率いられて、大伴部の兵士と共に、天皇を護る役を務めた。その大伴佐伯の祖先の家訓に、

「海行かば水漬く屍、山行かば草生す屍、大君の辺にこそ死なめ、のどには死なじ」とある。大君の御為には、屍を海の水に漬し、また山で草が屍に生えようとも、決して辞する(やめる)ことはしない。ただ大君のほとりにのみ生命を捨てるので、むだな犬死はしない。貴紳豪族の従者としてその主人と頼んだ人の為には、甚だ忠実な家来であった。

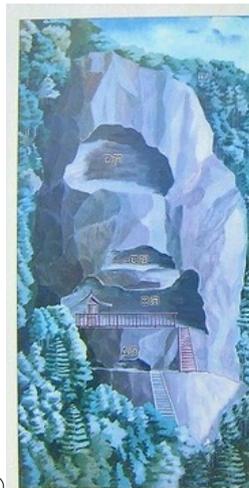
かく天皇に忠義であった佐伯部も、異民族蝦夷として徴発されたのは、極めて古い時代の事であり、時代が下がると段々と彼らは日本民族に同化融合し、その郷里に於いて、異民族として固有の生活は減少して、遠く奥羽地方まで行かねば、蝦夷は居なくなった。それ故に、佐伯部は蝦夷を徴発することは無くなり、その代わりに東国人(静岡から関東甲信)を徴発し、これを東人(あづまびと・東夷)と云う。

東人は佐伯部と同じく忠勇なる兵士で、皇室の護り使役の他、遠く九州の海岸防禦の任務を帯びた防人として送られた。東人は蝦夷ではないが、蝦夷人の国であった東

国の住民であり、蝦夷地へ徴発する位だから、^{えら} 扱ばれた勇者は蝦夷の血も交じり、勇敢な日本民族と見られ、蝦夷の影響を受けた質朴な^{みなかびと} 田舎人でもあった。

時代を経ると、この^{あずまびと} 東人の忠勇は、聖武天皇の中衛府を組織し、宮中を護る義兵で、後の近衛府の起原となる。大君の御護りとして、敵に後ろを見せる様な卑怯な振舞をしない、武士道の鏡の現れであった。中世には武士が各地方に起り、上方武士と東国武士との間に武勇に差があった。源平合戦時に、斎藤別当実盛（平家の武士）が両者を比較して、

「坂東武者のならひとて、父が死せばとて子も引かず、子が討たるればとて、親も退かず、死ぬるが上を乗り超え乗り越え、死生知らずに戦ふ。御方の兵（平家）と申すは、機内近国の武者なれば、親手負はばそれに事づけて、一門引き連れて子は退く。主討たるれば^{ついで} 郎等はよき次でとし、兄弟相具して落ち失せぬ。」と、ある。



町指定史跡 **八束脛洞窟遺跡**
 三峰山麓の石尊山には岩の露頭がそびえ立ち、その南西面には四ヶ所の岩陰が縦に並んでいる。ここには脛の長さが握拳八つ分もある大男が住んでいたという伝説があることから「八束脛洞窟」と呼ばれ、現在、神社を建てて祀られている。岩陰は下からA・B・C・D洞と名付けられ、B・D洞を主体に多量の人骨片等の遺物が出土している。人骨は三十四体以上が確認されていて、すべてのものが焼けている。特に人の歯や指骨に孔をあけたペンダントが注目されている。また、故意に歯を抜く抜歯という儀礼があったことも確認されている。その他、土器片や碧玉の石器、当地では非常に珍しいオオツツノハやサルボウ等の貝で作った腕輪や、牙製の玉、硬玉の管玉などが出土している。弥生時代中期前半の、火葬及び風葬による共同墓地であると考えられている
 月夜野町教育委員会

⑧土蜘蛛は朝廷に不^{きょうじゆん} 恭 順 ・ ウィキペディアより ⑨群馬県みなかみ町後閑字穴切・石尊山の中腹

武士の起原と蝦夷 元々国家の軍隊や警察とは関係なく、貴族の多年の我儘の結果として、国家の統治機関が乱れて、国家の軍隊・警察が用をなさなくなった。地方官は私欲に走り、人民の福利など一向眼中に無く、虐げられた民衆は、郷里に居られず他国に流浪し浮浪民となり、これに対する国家の取締まりは、行き届かなく、賊徒が横行し、良民の生命財産の保護は無く、やむをえず私設の軍人の保護が必要の時代となった。有力な資金の有る者は多数の蝦夷従者を抱え、微力なる者はその保護を受け、ここに私的な主従関係が生じ、私設の軍人が出来たのである。国家の蝦夷に対する政策は、服従した奥羽の蝦夷は続々と内地諸国に移住させ、蝦夷は勇猛にして死を

恐れず、武士的な特質を持っていた。正にはまり役で、貞観11年(869)に、新羅の海賊船が2艘、九州博多海岸を掠めた時、大宰府の軍人は臆して出軍しない。やむをえずその頃附近に移住していた蝦夷人を差し向けた処、彼らは一を以て千に当たるといふ勢いで、容易にこれを撃退した。以後、大宰府は海岸の防禦に、蝦夷人を当たらせた。このように国家の治安は、内地移住の蝦夷によって保たれた場合が少なくなかった。かくして彼らは武士として勢力を得て、遂に多年横暴を極めた貴族に代わって、武家政治を起こすに至る。見方によっては、蝦夷が日本民族の方向を変え、貴族政治を滅して我が国の政権を掌握したと言われても過言で無いかも知れない。・ ・ 》と喜田貞吉は述べる。



対馬金田城跡(667年)東夷達が白村江の戦い後、新羅の来襲に防人として備えた。感心のある方、拙書『絵詞と元寇の考察』P79~80

筆者はこの論説を驚くべき迫力がある民族歴史説話と受け止めた。

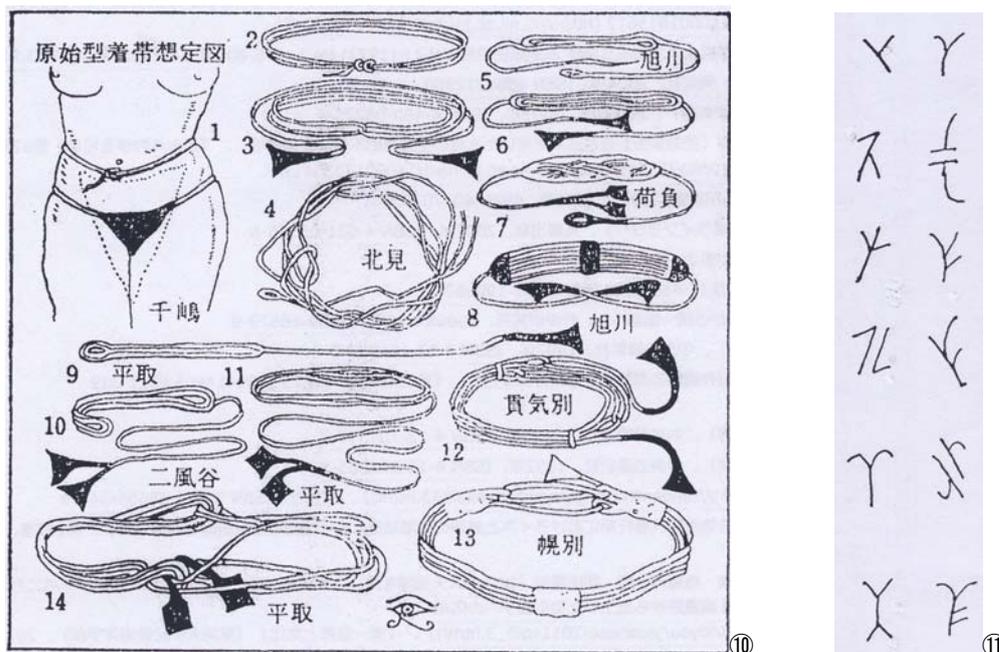
アイヌ民族の葬儀文化を見て行く

アイヌの葬儀 アイヌの葬送儀礼は、ごく近年になるまで火葬は行われていなかった。現在ではアイヌ市民は一般本州人と同じ様な葬儀が行われているが、昭和33年の古式葬儀は、静内町で92歳のお婆さんが死去のその時に特に興味深い報告がある。アイヌの葬送儀礼は、キナ(ガマのゴザ)で作った幅50センチほどの袋中に、新しいヒモ、^{きゃはん}脚絆、着物等を自分で用意してあるもので、天寿を全うしたお婆さんの遺体は、^{いろり}炉の右座に敷いたキナの上に寝かされ、死体浄め(湯に白布を浸し死体を浄める)と、「^{しにしょうぞく}死装束を着せる」(本人が用意した死装束)を家族・親族を中心になって着せる。死体の処理は同じ母系か、父系の人たちにより行われるが、特に、ウプソル(貞操帯)のしめ替えは、同一母系外の人には、手を触れることはできない。だから死期が近くなると、自分でウプソルを同じくする女性を呼んで、新しいウプソルの仕舞ってある場所を知らせておく。古いウプソルは^{あし}脚の間に置くのであるが、たとえ夫であっても手伝うことはできない。(参考文献『アイヌの墓』藤本英夫著・昭和39年より)

⑩貞操帯とは、アイヌの女性には有名な貞操帯(ふところヒモ)で、イラクサで編まれ

た1～2mほどのヒモである。初潮の年頃になると、口や手に入れ墨する時期にウプソルが与えられ、これはタブーの考え方が強く、母方の女性から、母・祖母・あるいは姉妹から同一形式の帯が伝えられる。同一の系統(サピキリ)として母親は娘に自分の系統の証として下帯の作り方を伝授する。男が死んだ時は、父系の男子の外に、その妻だけは死体処理に手を触れることはできる。男のフイドシは妻・母が新しい下帯を取り替えるが、男にはウプソルのようなタブーはない。

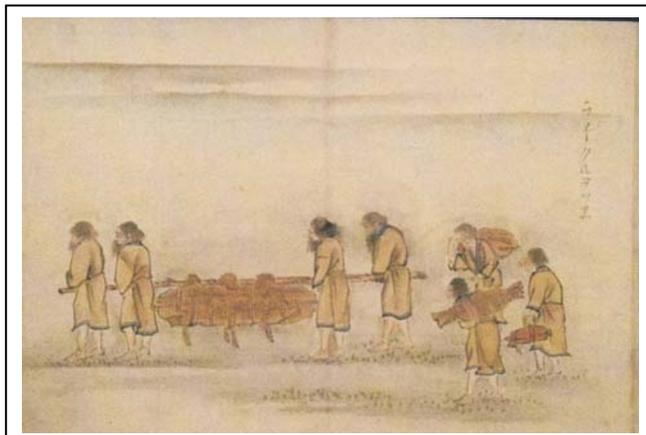
父親から息子に送られる・⑩イトツパ(祖印) 男には父系を示すものはエカシ・シロシ(エカシイキリ)といい、イナウの頭にナイフで切り込み付けた祖印(イトツパ・家紋)の刻み印を、父・祖父から伝えられ、印によって祖先の系統も判り、道具類や、熊穴等の猟場が相続される。死者の死装束の着替えが終ると、外に出て手を洗うシキタリがあって、生活水に使っている水ではなく、あらかじめ桶に用意してある水(聖水)を、親族にかけてもらう。死の「ケガレ」を水の神によって祓い浄められるのである。



⑩アイヌの貞操帯(『アイヌの墓』藤本英夫著より) ⑪イトツパ(家の印)・『アイヌの足跡』より

死者に送る口上 ^{こうじょう} 『アイヌの足跡』から要約で。《・・・彼等は自分の感情を押し殺す事なく、近親・近隣の親交ある婦人たちは、皆死者を囲み、手を死骸に当てて、声を揃えて泣き、死者の名を連呼し、悲しみを訴える者や冥福を祈る者、^{しか}而もその言葉に一定の「^{ふし}節」があって、何か悲痛な歌の様に聞こえる。主人は死者に向かって^{さと}諭すような話し方をする。「これ迄、成長して、今、死んだのは本当に情けない。お前と一

緒に居るのも今日限りであるから、お前の身体に掴まって、名を惜しんで居る。お前は最早、この家の人ではない。エシカ(老翁)が祈りを捧げて、お前の事を、神様に御願いたした。今に何某(最近の死者名)が迎えに来るから、それと一緒に、神の命に従い、後をふり向かず、迷わずに祖先の処へ行け、云々・・・」と述べるのである。之をライチシカラ(女性たちの泣き叫ぶ)と云う。そして、手伝の男は、出棺の準備をし、婦人達は臼で粟を砕いて粉にして団子を作り、死者の枕頭に供え、又、会葬者にも分ける。出棺の時刻が来れば、男子は先ず酒盃を片付け、泣き叫ぶ女子を死人から引離し敷物の「キナ」(ごぎ・⑫風俗画)で以て其の儘死体を包み、縄を掛け、棒に吊し担いで墓地に向かう。埋葬が終了すると近親の婦人連は、盛り上げた土盛に手を合わせ、声を揃えて泣き悲しむ。最後に飯櫃(おはち)に水を入れて用意した「水」を近親者が代る代る水を墓標に注ぎ一同退散する。墓標を「クワ」



⑫アイヌの葬列 『蝦夷古代風俗』上より

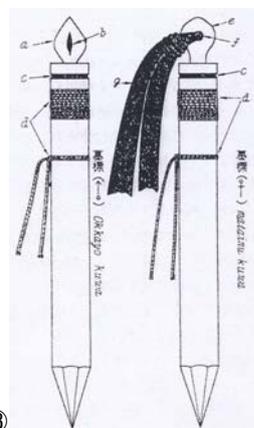
と云い、男の墓標は弓矢の形、白黒の糸で頭首を巻き、黒布を下記の図の様に結ぶ。女子に最も大切な針の形の墓標、糸を巻く黒布を付けるのは男子と同じ、埋葬の後は、墓参と云うことはなく、自然の腐朽荒廢に任せる・・・と、ある。

【※・死体を包む際、男には着物2枚着せ1枚は持たせる。女には3枚着せ、3枚持たせる。墓標に水を注ぐのは、あの世へ到着まで水に不自由しないためである。】

アイヌの墓標について



⑬白老の墓地・右側2基男標、左1基女標



⑭・沙流・二風谷墓標

男標左 (a) 槍の穂先・

やじり
鎌

(b) 彫凹は墨で黒

(c) (b)は同じ (d) 菅=
柱を巻く、女標右 (e)

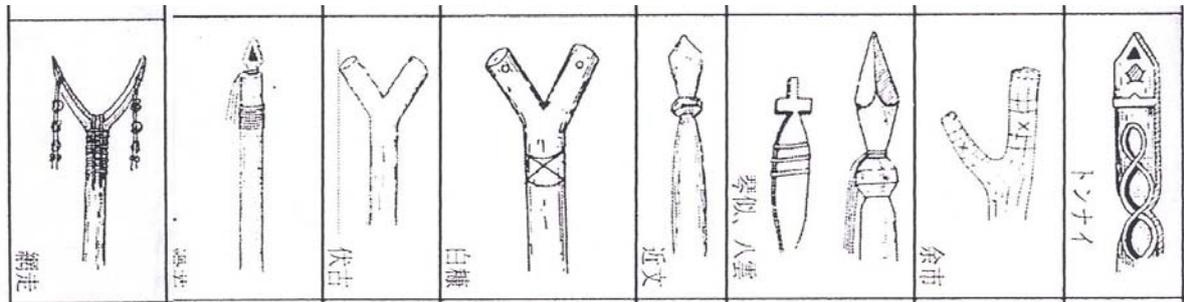
針の頭 (f)、(g) 女標

の針巻(糸)

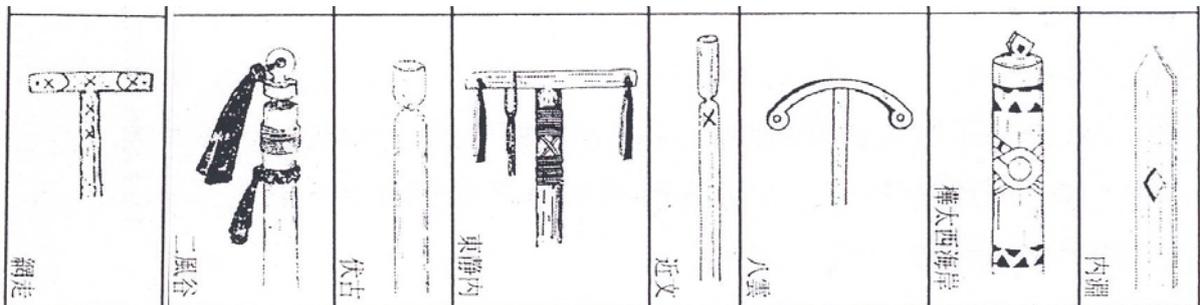
『アイヌ民族の宗教と儀礼』久保寺逸彦著作集1』より

墓標はアイヌ語の「杖」を意味する語 ^{つえ}kuwa があり、日本語の「クワ=鋏」と同音がある。アイヌの墓標の原形は、弓=仕掛け弓説と、死者が杖として握られ、先祖の許へ案内する「杖の神」と信じられている。男子墓標は、頭部が扁平で、^{へんぺい}鑷に似ており、死者の生前に愛用していた弓矢、槍、^{かい}櫓等を飾ったものらしい。女子墓標は、頭部が針の頭のように穴があり縫い針の形になっている。男女標共に、墓標の頭部箇所に黒白の組紐が結んである。明治 44 年の調査に日高・沙流・幌去の墓標は、地上 3 尺(約 90cm)、地下 3 尺 5 寸、計 6 尺 5 寸(180cm 以上)であったという。

アイヌの各地に伝わる墓標 「上段は男標⑮」・「下段は女標⑯」



⑮ ↑ 網走 ↑ 滑若(新冠) ↑ 伏古(札幌) ↑ 白糠町 ↑ 近文(旭川) ↑ 琴似 ↑ 八雲 ↑ 余市 ↑ トンナイ(札文)



⑯ ↑ 網走 ↑ 二風谷(平取) ↑ 伏古 ↑ 東静内(ひだか) ↑ 近文 ↑ 八雲 ↑ 樺太西海岸 ↑ 内淵(樺太)

『久保寺逸彦著作集 1 アイヌ民族の宗教と儀礼』草風館より

葬儀に告げる口上「火の女神」(アペフチ・カムイ)に^{ふしつき}節付けで朗読する

「我々を育てて下さった大神よ！ 国土の主なる老女の神よ！ 二度三度と幾度も、私の様なものが申し上げますのは、実に畏れ多いことですが、また、火の女神様の尊い御心に対して申上げる次第であります。随分、永い間、故人の病氣中は、種々御心配を掛け、誠に勿体なく存じて居りますという事を先ず申し上げます。

次に、^{いにしえ}古より先祖の方々、^{そおう}祖翁たちが、^{あんのん}無事安隠にあれかし(幸あれと)と望まれたのは、何れの村にあっても、その村の中、山海の狩漁生活資源採取の場でありまして、それを皆火の女神をはじめ御一統に期待し、^{すが}お継りして来たのであります。この程は、

病人のことで、あなた様も、随分、永い間、ご苦勞なされたばかりでなく、その上、外庭の幣壇（御幣棚）にあって、御加護下されない筈はなかろうと思って居りました。残念なことには、神様の力も及ばず、こんな事になってしまいました。・・・（略）

始祖神の御手の跡を、私たち人間が真似象^{まねかた}って、先祖以来の墓標を作りました。立木の森の大神、神なる翁の御心を静かに呼び覚ましてお願い申し上げ、御一族中、勇氣と雄弁とに卓^{すぐ}れ、ハシドイ神（ライラック類墓標木）を選定され、私たちが、平素からお祀り申上げている神々同様に、今日からは、この涙子（死者）の傍に付添って、お守り下さり、祖翁があ^{おもむ}の世へ赴かれる折、その路の上を、よくお守り下さって、よろしくお取計らい下さい。どうか万事、手落ちなく、お取運び下さる様、お願い申し上げます。どうか、我が涙子に対し、そのことを、あなた様からよく教えてやってください。」（『アイヌ民族の宗教と儀礼』久保寺逸彦著作集1・「北海道アイヌの葬制」より）

⑰家を燃やす葬儀の火事（チセ・ウフィカ） 家を焼きあの世に送る儀礼とは、
《・・・人は死んで神の国へ行き、あの世にはこの世と同じ部落があって、代々の祖先の人たちが一緒に暮らしている。男が死んであの世に行っても、自分で家を建てられるが、女は独りで家を作ることが出来ない。女性が死んであの世に行っても困らない様に、と住宅を送るのである。家族の者の好意で多年住み慣れた自分の家を、あの世に送られ、安住の生活が営まれると云うことなのである。葬儀の翌日、又は翌々日に、家財道具を他へ運び家を空にし、主人は神に神酒^{みき}を捧げ、亡き母、又は妻の為に、この家をあの世に送る意を神に祈願し、神のお力で死者の手元に届けられる様にと、火をつけて焼くである。・・・》（『アイヌの足跡』より）

アイヌの思想は、あの世はこの世と何にも変わる事なく、ただ上と下、左と右、昼と夜、完全と不完全が「あべこべ」になっているのが

「あの世」なのである。この考え方は、現在の我々に於いても、全く同じ葬儀方法が取られている。たとえば、お通夜は「夜」に執り行うことは、あの世では「朝」になる時間と



⑰「チセ・ウフィカ=家焼き」『蝦夷島奇観』より

なり、「この世」のモノを「あの世」に送るには、あべこべにして送る。その延長線で考えられることは、縄文時代の土偶が壊され、埋められ出土することは、即ち、壊して「あの世」へ送り、あの世で“ちゃんと”した土偶が送り届くためである。だから、家を焼き、「あの世」に送って、住む家に困らないように送ったのである。アイヌ民たちの神に対する信仰は、「あの世」で「この世」と変わらない生活を送れるようにと、「送り」のカタチ(仕草)は、縄文人の祈りの信仰思想と同じである。家焼きの儀礼は、明治20年前後まで随所で行われていたが、防火上から禁止令が出されたが、彼等の民族習俗の家焼儀礼はその後も続き、住宅地から離れた野原に小屋を建て、家焼儀式が昭和7、8年頃までであったのである。

嬰兒の死の葬儀について 《・・・0歳～7歳位までの子供が死んだ時は、成人の葬式とは違った方法を取り、「この子供の魂をあなたの^{すそ}裾に包んで、また生まれ代わって母親のフトコロにもどしてください」と、「火の神」(一番位の高い炉の火の神)に頼み、墓標も作らず、引導^注渡しもやらない。そして、「また同じお母さんの処にもどるように」と、言い聞かせ、墓地に埋葬せず、女便所の脇に浅い穴を掘って埋める。頭のそばに細い棒を1本立てておき、土がかけ終わると、その棒を抜いて穴を開けておき、子供の魂が母親の胎内にいつでも、戻れるよう配慮をしているのである。・・・》と。

【**引導渡**=墓標作りや「火の神」等の神々へ、死者の伝達報告を男が祈願と導きを手配する。】

はらみ女の死(胎児の死) 《・・・産み月近くになってから死んだ女性の葬儀は、死体を墓穴に入れてから、身よりのない老婆が、顔を黒い布で隠して墓穴に入り、母親の腹を鎌で切り割って、胎児を取り出し、布切れで包んで母親に抱かせてやる。その理由は、昔、妊娠した女が死んだ時、そのまま埋葬したところ、そうしたら毎晩のように犬が墓に向かって吠えたので、墓前に行くと、女が子供を抱いて泣いていた。「この子を連れて行ってくれ、これからは、赤子が生まれそうな母親の死体から、必ず子供を腹から出してやってください」と、そう言って姿が見えなくなると、葬儀時に古老が教えてくれた。・・・》と、話をしてくれた。(『アイヌの墓』藤本英夫著より)

アイヌの分娩に関する奇習 上記と同じ様な事例を『アイヌの足跡』からその模様の報告がある。《・・・妊婦が難産の末に、死亡した場合の葬儀は、一般と同一である

が、墓地で埋葬の直前に、一人の老婆だけ残り、一般の会葬者を遠ざけ、死体の包みを解き、鎌を以て腹部を割き体内の胎児を取り出し、母親の屍体に抱かせ、再び遺体を包み直してこれを葬る。此の役に当たる者は部落中のフッチ（おばあさん）の中から大胆で、物慣れた者を^{えら}択ぶとのことで、此の手術（腹を裂く）をする時、着用した老婆の着物は、手術後、其の場で鎌を以て^{ずたずた}寸々に切り裂きその^{まま}儘これを放棄する。》とある。

上記と同様な事例を『日本の深層』梅原猛著の「再生を願う胎児と妊婦の埋葬」についてアイヌの老婆から聞き書きをしている。

《・・私は、タレ婆ちゃんにアイヌの胎児・嬰兒の葬法の話聞いた。アイヌの子どもは家の入口に、逆さ甕^{かめ}に入れられて埋められる。なぜ子どもは、家の入口に埋められるかといえば、それは次のような理由による。そもそも全ての人間の生命は、祖先の霊が帰って来たもので、祖先が遠いあの世から、この世の子どもになって帰って来たのに、この世でよい目も合わず、あの世へ送り返すのは可愛そうで、帰って来たご先祖様にすまない。それで赤子の霊は、大人のようにあの世へ送らず、もう一度母の胎内に返して、生まれて来いという願いを込めて、家の入り口に、逆さ甕に入れて埋められたと、タレ婆ちゃんは語った。

私はこの話を聞いて、まさに電流に打たれる思いであった。それは縄文時代、家の入り口に子どもを^{かめかん}甕棺に逆さにいれられて埋められることは、アイヌ文化は、縄文文化を継承しているのではないか。甕はおそらく子宮のイメージであり、母の子宮に帰って、もう一度生まれ変わって来い、という意味であろう。

家の入り口は人の通る処であり、よく踏んで、即ち、よくセックスをして、生まれて来いと言うのであろう。更に、タレ婆ちゃんは言った。

「子どもの葬儀はたいしたことはないが、いちばん厄介なのは胎児を腹に宿した妊婦の葬儀である」と。ひとまず葬儀は行われ、妊婦は墓に埋められ、翌日、取り上げ婆が墓場に行き、その妊婦の^{しかぼね}屍を掘り出し、妊婦の腹を裂き、胎児を取り出し、それを妊婦に抱かせてから、あらためて葬るというのである。これは和人側からみれば残酷なことであるが、きわめて理由のある事で、アイヌ民は、人間の生命は全て祖先の生まれ変わりであり、胎児は祖先の誰かの霊が還って来て、胎児になったもので、妊婦が死んで、胎児が妊婦の腹の中に閉じ込められれば、胎児は到底あの世へ還れない。もちろん母親は死んだのだから母親の次の子になって生まれて来るわけにもいか

ない。とすれば、妊婦の腹の中の胎児の霊は、行き場を失った霊という事になる。はるばる遠いあの世から帰って来た先祖の霊が、行き場を失ったとすれば、それは祟りをせざるをえない。それで胎児を取り出し母親の腕に抱かせて母親と共にあの世へ送る必要があると、語ってくれた。・・・》

明治22年に死体損壊事件が福島県で起きた。妊婦をそのまま埋葬することは、それは祟り繋がることで、妊婦の腹を切り開いて胎児を取り出し、藁人形わらを抱かせて葬った事が事件となった。これは縄文時代から続いている、死んだ赤子の霊が「あの世」帰れず、「この世」で浮遊する、この世で祟りをする事を最も恐れた理由であろう。

⑩乳幼児の甕棺墓かめかんぼ・樺山遺跡かばやま・岩手県北上市・『縄文人の祈り』北上市立博物館より



⑩乳幼児の埋葬推定図 ⑱甕棺墓かめかんぼ(北上市臥牛坊主峠遺跡ふしうしぼうずとうげ) ⑳逆位底部穿孔埋甕(釈迦堂遺跡博物館)

⑲埋甕うめがめ・埋甕は縄文中期後半の代表的な竪穴住居内に設けられたもので、埋甕は多くの場合、南側の出入口に埋められ、出入口に絶えず踏む必要があったと考える。その意味で注意深く観察すれば、南の出口に埋甕を作っている例は、群馬、長野等東北地方に見られ、埋甕が何の埋葬で、しかも踏みつけられるために埋められた事ははっきりしている。死体を踏むことによって、新しい生命を生む、地母神信仰じぼであることに疑いをいれない。縄文中期中葉から、この埋甕という風習が一般的となる。出入口の部分に埋められた事は、踏まれるために埋められたものとする。(『藤森栄一全集・9』「縄文の呪性・ふみつけられる精霊」より)

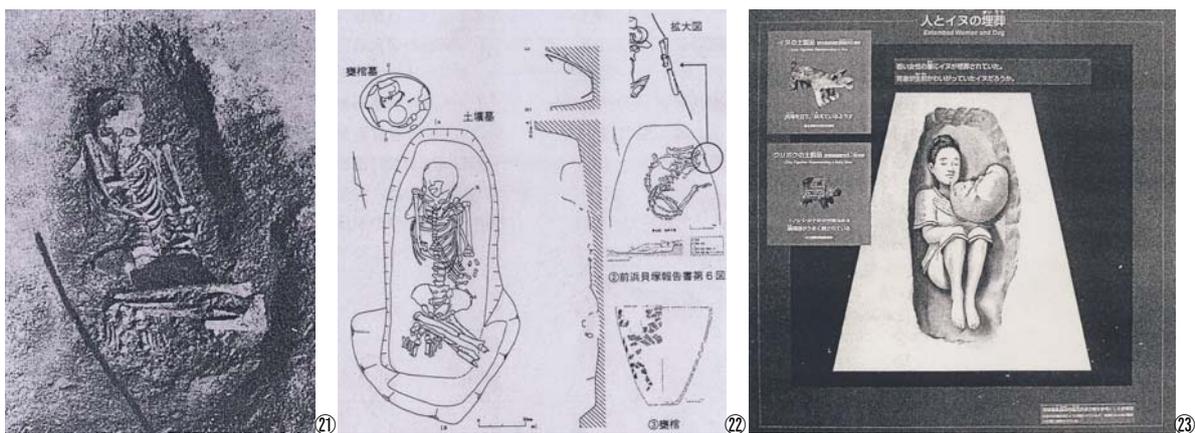
前浜貝塚から奇妙な埋葬について 『縄文人の死生観』山田康弘著より

縄文時代晩期の気仙沼市の前浜貝塚に、1978年に奇妙な葬法そうほうで埋葬された女性が発

掘された。地面に楕円形に掘られた土壌墓（穴に埋葬）の中に四肢（両手両足）をかがめ、仰向けの姿勢で埋葬（^{ぎようがくつそう}仰臥屈葬）であった。奇妙な葬法とは、この女性の顔面の上に一匹のイヌが乗せられていた。この女性の15歳～17歳と推定、^{じようがく}上顎（上あご）の左右の犬歯と下顎の左第一切歯（^{せつし}前歯）に^{ぼっし}抜歯（歯を抜く）が見られた。

縄文期の抜歯は、健康な歯を意図的に除去する縄文時代の風習で、抜く歯の種類は、切歯、^{けんし}犬歯（糸切り歯）、^{しょうきゅうし}小臼歯（犬歯の奥）等である。口を開けたときに抜歯をしていることが一目で判る歯並びで、これではどうやって食べ物を嚙んでいたのか考えさせられる。縄文時代の通過儀礼（イニシエーション）の子供から大人への移行期に、成人式で行われた儀礼の一つだと考えられ、この女性は抜歯が行われていたから、さほど月日が経過しない時期に亡くなったと判断できた。

この女性は、成人後すぐに結婚したと思われ、そして、その結婚からさほど遠くない時期に命を落とした。死去の原因は抜歯と決めるのは難しく、また、この女性の顔面の上にイヌが乗せられていたことが説明できない。ところが発掘作業中に、興味深い発見がこの女性が埋葬された土壌の上に、一つの土器壺が埋められていた。この壺の中から、嬰兒の骨が見つかった。嬰兒の手足の骨は未完で、その長さも50mm～70mmといった小さなもので、これは生まれて間もない赤子の骨である。骨を測定した結果、受精後38週間～39週間位の周産期（出産前後）の胎児であることが判明、この赤ちゃんは女性の頭の上方に、土壌と接する形で埋葬され、発見された位置から見て、この胎児と女性との間には、何等かの深い繋がりがあるように思われた。



①前浜貝塚の女性人骨・『縄文人の死生観』山田康弘著 ②前浜貝塚報告書より ③人とイヌの埋葬パネルには「人とイヌの埋葬」の解説に「若い女性の墓にイヌが埋葬されていた。死者が生前可愛がっていたイヌだろうか」。埋葬から推定される事は「遺構相互の位置関係から見て、女性人骨と胎児の骨は母子であると推測、この女性人骨の顔面に覆い被さる形でイヌが合葬され、人と犬の合葬例として注目され

た。」(『東北歴史博物館研究紀要12』、㉒、㉓は東北歴史博物館より)

【^{まえはま}前浜貝塚・宮城県気仙沼市本吉町に所在し、縄文時代後期～晩期の貝塚で土壙墓から15歳—17歳の女性屈葬人骨1体、人骨頭蓋上位からオス成犬1体、土壙墓に近接した甕棺墓からは月齢10カ月位の胎児骨1体が検出された。土壙墓・^{かめかんぼ}甕棺墓の埋め土や土器片から、縄文晩期中葉推測、東北歴史博物館では2010～2011年基礎調査をを行い、女性人骨・犬骨は縄文後期後葉から晩期初頭に属することが明らかになった。そして、当時の食性分析では、人骨は陸獣動物の食性に近く、犬骨は海生魚類(魚のアラ)に近い結果が得られた。】

㉒・㉓^{どきかんぼ}土器棺墓には再生の思想がある 縄文時代にはこのように生まれて間もない、或いは生後一年以内の赤子の遺体を土器の中に入れて埋葬する、「土器棺墓」の風習が存在した。この土器棺墓の風習は縄文前期頃、東北地方から始まり、中期から晩期にかけて全国的に広まったと考えられる。この風習は弥生時代、古墳時代にも見られることで、このことから類推し、縄文時代の人々は土器壺の中に嬰兒を入れ、埋葬したのは、おそらく墓を作って「あの世」に送り込むためと云うより、もう一度「再生観念」(母親の子宮に見立て再生を願う。竪穴住居入口に埋葬し人足に踏まれ様にした)の信仰が大きかったのではなかろうか。これを^{ぼうしやう}傍証する事例が幾つも発見されている。



㉒・㉓^{とうどのみや}唐渡宮のお産絵画土器(富士見町史上巻より)、縄文中期後半、㉒座産が描かれている土器、日本最古の絵画。㉓絵図を復刻、「曾利文化期の遺跡群発掘報告1988」(井戸尻考古館) ㉔山梨県北杜市津^{ごしょまえ}金御所前遺跡の^{がんめんとつてつき}顔面把手付土器・人面文様は今まさに子供が誕生を表現か。(北杜市考古資料館より)

長野県諏訪郡富士見町^{とうどのみや}唐渡宮遺跡からは、出産時の光景を描いたとされる絵画土器が出土している。又、山梨県北杜市津^{つがねごしょまえ}金御所前遺跡や、長野県伊那市月見松遺跡からは、人面把手土器の胴の部分から嬰兒が顔を覗かせている。これらの事例は、縄文時

代の人々が、土器を新しい生命を生み出す女性の身体、母体を象徴するものと考えていたのであろう。縄文時代の母親と子供の合葬例は、現在までに凡そ30余例が出土、子供を腕に抱き、埋葬されていることは、立ち会った人々は、「あの世へ行ったら、また、この世にかえっておいで」と、願いを込めて祈ったことであろう。

縄文時代のイヌの関係 縄文時代の貝塚からは数百頭の犬骨が出土している。縄文時代に於いて、ヒトと同じように埋葬されているのは犬だけである。縄文人の男性は、狩猟採集を^{なりわい}生業としていたのだろうか、男性と犬と一緒に埋葬事例は多々ある。一方、女性がイヌと埋葬例を考えるには、ただ、可愛がっている関係だけでは説明がつかないが、実は、犬と云うものは、古来より出産や育児と大変に関係が深い動物であった。例えば、妊婦が胎児の出産前に締める^{いわたおび}岩田帯（妊娠5カ月目の戌の日に巻く白布帯）は、^{いぬ}戌の日に全国的に見られ、これは犬のお産が軽いので、それにあやかった風習と思われる。縄文時代からの犬（犬=戌）の関連が想定され、時空を超えて今日まで伝承されている。前浜貝塚のイヌと女性が合葬されていることは、イヌと人が同時に死ぬことは考え^{にく}難いので、これは、呪術的な思想で犬と女性と合葬するために意図的に犬は殺されたと考える。（参考文献として『縄文人の死生観』山田康弘著）

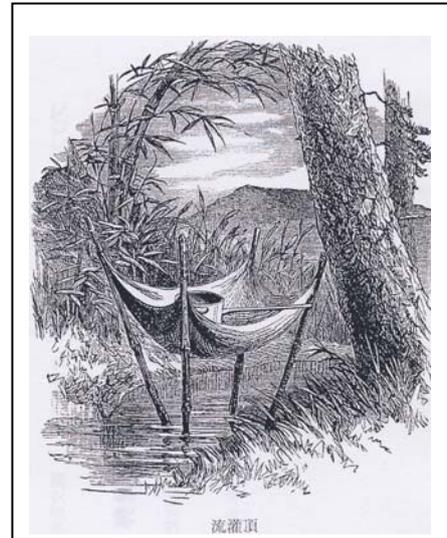
妊産婦の特殊な埋葬 日本の伝統民俗例に、妊娠中、あるいは産後直後に死亡した女性を、特殊な葬法で埋葬することが有る。妊婦が死んだ場合には遺体に水をかけ、川で洗い清める「^{かんじょう}流れ灌頂」というものがある。出産死の霊を弔うために水辺に4本の杭や竹を立て、行き交う人に水をかけてもらう習俗は、東北、関東中部、四国など各都府県に及んでいる。

流れ灌頂 ^{かんじょう}「流れ灌頂」の絵図は、イザベラ・バードが日本奥地紀行で、越後国で見た挿絵となる。（1880年ロンドンで出版・『日本奥地紀行2』「繁栄する地方」より）

《・・越後の国では、4本の筍竹に四隅を張り渡した^ゆ木綿（もめん）の布が、流れの静かな小川の上にあるのを、あちこちで見してきた。その後ろには細長い板（卒塔婆）が立てられ、板に文字が書かれていた。4本の竹筍の上の穴には、束にした花が差してあるのを見た。布にも文字が書いてあり、たわんだ布の上に^{ひしゃく}柄杓が一つ置いてあった。手^てノ子（地名）から道を下った所で、道の傍らに僧侶が布の上に柄杓で水をいっぱい注いで

いた。その僧侶に「^{ながれかんじょう}流灌頂」説明を受け、「板に一人の女性の死後の名前が、つまり^{かいみょう}戒名が記され、それは南無妙法蓮華經という日蓮宗の祈りの言葉である」と説明された。「流灌頂」習俗ほど、これまでに哀れみを感じさせるものは見たことはない。これは初めて母になる喜びの最中に、亡くなった女性には前世の^{ぼち}罰があり、仏教徒の地獄の一つである、血の池(地獄にある血をたたえた池)で苦しむ姿を現しているとされるからである。その苦しみが少しでも短くなるよう道行く人に訴えている。布が完全に破れ、注いだ水がこぼれ落ちるまで、此の女は血の池に留まらねばならない・・・」。と記している。

イザヘラ・バードは新潟、山形、秋田で「よく見かけた」と記しているから、この様な風俗は140年前に東北地方ばかりではなく、全国的に女性の出産の不幸死あったことを、現代の我々に知らせてくれる。



流れ灌頂『日本奥地紀行2』より

伝承話に「妊婦の埋葬後に飴買う女幽霊」

或る晩、夜半に^{あめ}飴屋の戸を叩き、白い着物を着た女が飴を買いに来た。飴を1文だけ売ってくれと、店主人に頼んだ。翌日の夜も1文だけ飴を買いに来た。続いて6日目までもやって来た。とうとう7日目に、「もうお金がございませんので、飴をめぐんで下さい」と言って来た。飴屋の主人は、飴をあげた後、さすがに怪しんで、後をつけると寺の墓地で女は消えた。寺の坊主と辺りを探すと、真新しい卒塔婆の下で赤ん坊が泣いていた。恐らく女は死んだ後で、墓の中で出産したが、乳を与えることが出来ず、代わりに、三途の川の渡し賃の6文銭で、飴を買ったことがわかった。その話を聞いた人々は女を憐れみ、丁重に吊って赤ん坊は寺に預けた。

そしてその後の話として、赤ん坊は寺の高徳(徳の優れて高い人)の僧侶になった話や、他の寺の高僧侶になった伝説も伝えられ、僧侶による親子の情・供養の説教・法話となっているのである。

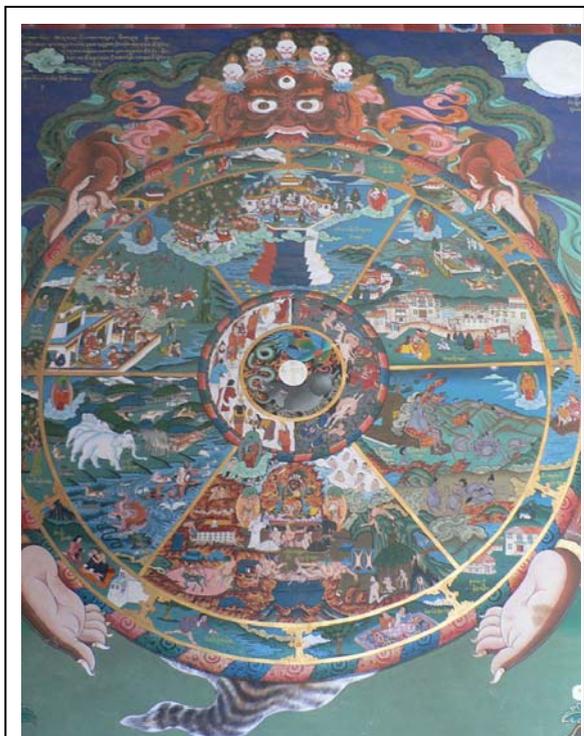
「この話は、寺の盆供養や供養の説話の語りとして、この世に「生」を受けた人々に人生哲学の法話として、檀家の人たちに語り掛ける教本となるのである。」

第3章 日本人の「あの世」観の歴史的な流れ

現今の日本人の宗教信仰について、よく言われることは、「日本人は宗教に対して、全くの無宗教である」との言葉を耳にする。しかし、日本人の生活は、一般的に言えば、元旦には神社や仏閣に初詣に出かけ、夏のお盆には先祖供養し、春秋のお彼岸には先祖の墓参りの風習を欠かさない生活をしている。そして、赤ちゃんが誕生すれば地元の氏神へ初参りに行き、子供が成長すれば、晴れ着を着せて「七五三」の祝いに神社参拝をする。日々の生活の中では、大人たちは先だった両親や先祖の追善法要を行う。又、各地方に於いては地域の産土神社^{うぶすな}で、春秋の豊作祭りを執り行いなど、日本人は祭祀好きである。日本人は日々の生活に於いて、通過儀礼を四季の自然風土の中で、「この世」で自分たちは生かされている事を、無意識のうちに世間の人々と共有している。日本人にとっての四季の節目は、個人の幸せを与えてくれる節目であり、自然に感謝の儀礼となるのである。人間の生活を支えてくれる自然環境は、互いに調和と共生する関係と捉え、キリスト教やイスラム教等から見れば、宗教の無い国民に見えるが、日本人は自然文化儀礼の体感を通して、「思いやり」を身につけ、絶対的な神、偉大な神の力に因って創造される世界から、一線を引いているのである。

日本民族は仏教経典を変えてしまった

インドの釈迦の教えを論じた「仏教」は、日本伝来時より、仏典哲学を求道、自己の完成を目指す仏教哲学を求める方向の宗教観ではなく、日本人が求めていたのは、先祖供養を^{もたら}してくれる宗教、すなわち先祖の霊を「この世」に導いてくれる仏教の経典であり、日々の生活の安寧を与えてくれる先祖供養の宗教を望んでいた。縄文時代から、祖先の霊は人間の頭で考えられる範囲の所に^お居られ、それは近隣の山々の頂に霊は住で居られると考えていた。アイヌ人は山の頂に靈魂は住み、南西諸島民は東海の彼方の桃源郷に先祖の霊は住んでいると



六道輪廻を現すチベット仏教の仏画、「死」が輪廻世界を支配・ウィキペディアより

云う信仰を持っている。南西諸島民は先祖霊を正月や、旧暦のお盆に家族の元に迎え、その霊を供養する年次の祭祀を執り行っている。

仏教の輪廻思想（生命が無限に転生を繰り返す）に基づき、死後の救いを求めていたのである。霊魂は何度も生れ代わり、人間だけではなく動物らを含めて、この世に再生が出来る経典、輪廻転生は、霊と生命が無限に転生を繰り返すことが出来る思想である。仏典の教えでは、輪廻を苦と捉え、輪廻から解脱(迷い・苦しみからぬけ出す)することを目標におき、苦行の末に解脱して自己の完成を目指すのである。その間に日本人は、仏教の目的を達成する自己の完成に宗教思想に弱く、結果として、仏教のその先が難解となったのである。つまり、日本人は自己の完成を目指す仏教哲学を求めていなかったのである。

日本人は縄文時代より、先祖崇拜のシャーマニズム(精霊や冥界の存在を信じる)に身を置いた生活文化を、1万5千年余り過ごして来た。従って人間は死去すると、仏教経典は十万億土(浄土宗等)の天の彼方に極楽浄土があって、その彼方まで道すがら修行を続けて行く仏教教義には、日本人は感心が薄かったのである。

やがて、日本民族に受け入れられる仏教経典が、中国から儒教・道教によって変身した仏教、『盂蘭盆経』(経典、1巻。西晋 265-316年の竺法護訳。釈迦十大弟子の目連が餓鬼道に堕ちた母を救うために、釈尊に救いを求めた経典・偽教)の教えの中に、“先祖崇拜”の教えが入る事によって、日本人は経典を理解することが出来たのである。

日本民族は日本文化の風土に似合う、先祖の霊から教え諭す仏典を、日本人は理解されたのである。日本民衆に合う「仏教」となることにより、仏教は受け入れられ発展したのである。つまり、日本仏教は死者の為の宗教であり、先祖崇拜の為の仏教となっていたのである。釈迦の説いた苦行による解脱と、自己完成をめざす仏教哲学ではなく、180度転回した死者の為の教義、先祖供養を中心とした仏教に変えてしまったのである。因って、日本仏教は人々の「死」の救済と、「先祖供養」を教え諭してくれる導師と寺院はその役目を果たしたのである。日本仏教は庶民の日々の安寧と、死者の霊魂の行方を先達してくれる仏教を求めていたのである。そして、「穢れと祓い」は、日本神道に受けもってもらい、神社は現世の人々の幸福を、神々に祈願する役目を担ったのである。

補足・仏教伝来の経緯 インド仏教は中国へ紀元前後に伝来している。その時代

の中国では、儒教（古代中国の孔子の思想に基づく教え）が国の公認学問として確立されていて、インド仏教は儒教に取って代わることは出来なかった。儒教は祖先霊崇拝・儀式を中心とする宗教として、中国民衆の心を掴んでいた。その儒教が仏教と儒教論戦の末、仏教側も譲歩をみせ、仏教は自ら祖先霊崇拝を教義に入れることになった。このことにより祖先霊の崇拝の影響を受けた「中国仏教」が日本に伝来した。日本への仏教伝来は、『日本書紀』では 552 年説となり、百済の聖明王が使いを遣わし仏像、経論、幡蓋（仏堂に飾る幡）を伝え、『元興寺縁起』の 538 年説は、欽明天皇の戊午年に百済の聖明王から仏教が伝来とあるが、現在は 538 年説が有力とされている。

日本に伝来した仏教は、中国の宗教哲学によって解釈され直した仏教となっており、日本民衆にとっては、受け入れる事ができる宗教観をもっていた。インド仏教は、お釈迦様が経典を完成させたものではなく、インド大陸民族による様々の神様（ヒンズー教等）を整理して編集したものとなっているのである。

釈尊の弟子たちは「如是我聞」は「私は釈尊より、このように聞きました」と「経典」を作り上げた経緯となっている。そして、中国に於いて様々に経典は解釈され、多種多様に広がった仏教経典は、日本に元々あった祖先供養の根本思想と相まって、日本国の民衆信仰・風俗と融合できたからこそ、仏教は受け入れられたと考える。

日本の神教は生活習俗から生まれた信仰であったので、「経典」は存在しない。正直な心で神に接すれば、神の御加護により、災害を避けられ、無事に幸福に暮らすことができる宗教観なのである。

仏教の『経典』はお釈迦様が全部作ったものではないが、釈尊の『経典』の究極の悟りは、輪廻転生（あの世に還った魂がこの世に再生するヒンドゥー教・インド哲学にもある）から解脱を最終の目的としている。しかし、現実の日本社会の人々は、仏陀の教えを忠実に実践し、悟りを得て、解脱する事を考えている人は少なく、大多数の日本人は「祖先供養」と「死後の世界」（死後は子孫から祀られる対象）を仏教に期待していたのである。（注・1～3章は「祖先」、これから先は「先祖」を使う。※仏教に関心のある方は、拙書電子書籍『仏教伝来り道物語』をご覧ください。）

八百万の神々（やおよろずのかみがみ） 「八」は多いという意になり、数多くの神、総ての神、森羅万象（宇宙に存在する現象）に、神の存在を考察した古代日本人は、神の観念を八百万の数で表している。キリスト教・イスラム教は絶対的な唯一の神は、

砂漠に生まれた宗教であり、日本風土に生まれた八百万の多神教は、自然界の森や林・農耕社会から生まれた多神教となるのである。日本人はこれまで述べてきたように、日本は自然豊かな四季から多くの恩恵を授かり、また時には天災に遭いながら、生きてきた我々の先祖は、自然界から神の発現を肌で感じ、それを崇敬し森羅万象を確認することによって、「神」は生み出された。自然・家・ムラ・ハラ・モリ・川・湖・道・山々等に精霊が宿っている日本特有の信仰思想が生まれた。そして、精霊が「八百万神」の数となって今日まで継承されているのである。

日本の神々 自然の中に隠れて私たちを見守っていてくれる神々、何か変化起これば、自然現象の中で、何かの形で宿り、何かの時に現れる神、神社に鎮座している神々とは異なり、縄文時代の世から、1万5千年余りの歴史を経て、自然界から人間界に出る八百万の神々は信仰され、日本民族の八百万の神々となっているのである。そして『記紀』神話を得て、天照大御神(高天原の主宰神)を中心に、日本の国造りに関わりをもつ神々と、大國の命(国津神・地域の神々)が融合した神々は「八百万の神々」となり、日本には凡そ8万社の神社があるということである。

自然は、恵みと共に人間たちに災いを齎し、地震・風水害・旱・冷害等が暴れまくり、人災の疫病・火災・盗難・ムラの災いを齎す神も存在する。人々はこの災害を齎す神から、逃れるために八百万の神々に祈願し、悪神を含めた神から防禦してくれる神に祈願する歴史を辿るのである。我々の先祖はムラの五穀豊穰祭り、氏族の繁栄、子孫繁栄、家内安全等の祭祀は、日本全国どこでも行われる神事・祭事・儀礼・儀式の後に必ず催される直会(祭祀の終りに神酒と神饌を食する)で、神霊が召し上がった残り物を頂く事により、神霊と結びつき、絆を強くする霊力は神酒によるところが大きかったであろう。恐らく縄文時代から「縄文酒」(第7章縄文酒参照)の飲酒の直会行事が行われていたであろう。今日でも日本の神事儀礼後に酒を伴う直会を模様される事は、世界でも珍しい神事となるらしい。

「いただきます」の由来は、神様にお供えした食べ物を頭の上に「かかげるしぐさ」から、「食べるものを戴く」謙讓語からきている。海のもの、山のもの、田畑の命を戴き、氏子(氏神が守護)たちは、命を繋いで今日まで繁栄してきたことに感謝を捧げる。直会の終了に、「ごちそうさま」は、宴会用の食物集めに奔走した「ご馳走集めに走り回る人」への労いの気持ちを表した言葉とされる。日本人一般に、観衆の席や、大事

な食事会の時には、必ず誰でも「いただきます」・「ごちそうさま」と手を合わせ感謝のしるし、手を合わせる「仕草^{しぐさ}」をするのである。沖縄県久高島のイザイホー（神女就任儀礼）の動画を見た時、あれは「縄文の仕草」であると思った次第であります。

やおよろずのかみ 八百万神の一般的な神の名前 神々をおおざっぱに上げて見れば、次の様な神さまが上げられる。（ブリタニカ国際大百科事典・世界大百科事典より）

氏神・「氏神」と「氏子」血縁を基に生まれた先祖神・守護神、地縁による信仰に基づく神「産土神^{うぶすながみ}」と融合し、ムラ人全員が「氏子」となる。

土地の神・ムラ、居住の土地を守護する神「地主神」、「地の神」、新たに開墾する時、地の神に祈願する。家等を建てる際の「地鎮祭」も同じ神への儀礼となる。

山の神・山の民に獲物、山仕事、ムラの生活を守ってくれ神。山の神は女性とされ、猟師たちは下半身を山の神に見せ、喜ばして獲物を獲るといふ。また山の神は醜く、自分より醜いオコゼを捧げると、喜ばれる話は有名な話である。

田の神・農民にとって大事な神は、春に山の神が麓^{ふもと}に降りて来て、田の神になり、「田の神」を迎える。秋には、田の神を屋敷に迎え入れて食事を持って成し、豊作に感謝し、酒と魚で饗応^{きょうおう}してから、山にお送りする。農神、百姓神等々と呼ばれる。

水の神・水田の水源に関わる神、用水や水田の傍らに祀られる。田の神と融合も見られ、水は山から流れ来るので、山の神とも結びついている。水汲み場、ため池、湖等に祀られる。水神は「蛇」「龍」とも結びつき「龍神」となる。

海の神・海の安全、漁業の神、航海の神。四国「金毘羅宮^{こんびら}」（ガンジス川の鱒^{わに}のクンビーラ。拙書電子書籍『仏教伝来物語』第1章を参照）は古来より海の神様で、大漁祈願、五穀豊穰、商売繁盛では全国津々浦々に信仰を集めている。

家の神・一家の守護する神。屋敷神、厠神^{かわや}、納戸神^{なんど}等が、有名なのは岩手県に伝えられている「ざしきわらし」は、座敷や蔵に住む神とされ、家人に悪ふざけも働く。また、家に富を齎し、見た者には幸運があると『遠野物語』にみえる。

かまどの神（荒神）・一般の家々では、旧暦10月には日本中の神々が出雲大社へ集合すると云う伝承がある。その為、一家の火の守護神として留守番役を果たす神はオカマ様、荒神様、大黒様は家の守護神となる。オカマ様の火は、人間の生活の根源を守り、火災から家人を守護する神となり、古くから火の神として家々に祀られる。かまどは=食事=生活の中心で、「かまどの火神」は家人の中心となる。東北地方では「竈^{かまど}

をおこす」とは、一家を建てる意となり、分家に火と灰を分ける習慣もある。また「火男」は「ひよつとこ」の語源で、^{かまど}竈の竹筒で吹く火男は、女性の「おかめ」共に祭礼に演じられる。アイヌも「火の神」を最高神としている。

井戸神・・・「いどがみさま」井戸の神として祀られる水神となる。

日本人の仏教の捉え方 「甦る縄文」『日本人の「あの世」観』梅原猛著に、
《・・・柳田国男は、昭和21年に『先祖の話』という書物を書いて、日本人の宗教の根底は先祖崇拝にあるということを明らかにした。戦後の伝統否定の精神の中で、先祖崇拝の意識も徐々に薄れようとしている。この風潮に柳田は大きな不安を覚え、先祖崇拝こそ、日本人の根本的な宗教であり、この先祖崇拝という行事が失われたら、日本民族は滅びるのではないかと柳田は憂いた。柳田は、お盆という行事も本来の仏教の行事では無く、寧ろ仏教以前に日本に存在した習俗が、仏教の中に入ったものと考えている。柳田の言う通りであろう。

日本での仏教の行事としてのお盆の行事が始まったのは、推古14年(606)のことであるが、丁度その年に聖徳太子は、父、^{ようめい}用明天皇(第31代天皇)の供養のために、經典の購読をするために法隆寺を建造している。つまり、死者供養の行事と結びつける事によって、聖徳太子は仏教を日本に定着をせしめたのである。

そして、^{かんむ}桓武天皇(第50代天皇)は死の床で、彼が自ら殺した弟の^{さわら}早良親王の^{おんりょう}怨霊(桓武天皇の寵臣藤原種継が殺された。その主犯として早良親王に罪を迫った。濡れ衣を着せられ淡路へ流罪、その船の中で憤死。祟り説)に苦しめられ、その怨霊の^{ちんこん}鎮魂(死者の靈魂を鎮める)のためにお彼岸の行事が始まった訳であるが、これまた本来の仏教の行事ではない。

正月も元々死者の霊が帰ってくる行事で、門松はその^{よりしろ}依代(神霊が依りつく松竹)物である。年3回あるいは4回、死者供養の行事を仏教が受持つ事によって、仏教が日本に定着したと思われる。そして、現在の仏教も、殆どが死者送りと、死者供養をその主な仏事となっている。ただ、葬式をして無事その霊をあの世に送り、そして、年に3～4回帰って来る死者の霊を慰めて、また天に送り返す仏教なら、それで日本人は十分なのである。

この柳田の指摘は大変重要で、死んで天に行き、また帰って来るという信仰は、最も純粹にアイヌに見られる。アイヌ信仰では、人間は死ねば必ず天に行き、元々人間の魂は天からやって来たものである。死ねば、人間の魂は肉体から離れて天に帰って

行き、葬儀は人間の魂を、無事天に送り届ける儀式で、それ故に、それは厳粛を極める訳は、葬儀の手続きを誤ると、人間の魂は、無事天に帰れないかもしれないからである。・・・》と、梅原は柳田説を述べる。では次に柳田の『先祖の話』をみる。

自然の体験を 柳田國夫の「自然の体験」要約で語る。

《・・・御先祖は毎年1回戻って来て、子孫後裔の誰彼と会われるのが御先祖である。死後に何等の存在も無い御先祖様に、我々の同胞国民は何時の世からとも無く、これを信じているのである。この信仰の強みは、誰からも説かれたものでなく、教えられたものでも無く、小さい頃からの自然の体験を通して、父母や祖父母と共にそれを感じてきた。年を取ってこの事について考えるに、大抵の人は自分が小さい頃に、見たり聴いたりした事が、この^{まいとし}毎年の盆行事になっている。この信仰は日本人の生涯を通じて家の中に於いて養われて来たのである。誰でも自分の郷里だけの珍しい行事だと思っていた言い伝えが、北は秋田県の八郎湖畔（八郎瀉）から、南は鹿児島県の離れ島まで、分布していることを知ると、我々は驚くのである。

昔、よく稼ぐ若い夫婦者が、盆に休まず^{かせ}畠に出て働いていると、路を通る話声が聴こえてくるが、話をする人の姿は見えない。「せつかく戻って来たのに、何の支度もしていない。あんまり腹が立から突き落として来た」と言っている。若夫婦は胸騒ぎがして家に飛んで帰ってみると、我が子が炉に落ちて怪我をしていた話が伝承されている。又、主人が召使を叱り飛ばすこと聞いて、祖霊は「ああいやだ」と言って帰ってしまった話。是だけの話を聞くと、「はっと思い当たる人」が世間には沢山のいるのが、我々の国土なのである。家を平和に、清浄に保ち、^{みたま}御霊を迎え祭る大切な条件である事を、古人たちは、そういう具体的な形によって永く銘記して来たのである。ただ珍しいと思って聴くことが、実は安らかな教養の道でもあったのである。》と語る。



盂蘭盆会の精霊棚・新盆の一般的な盆棚・精霊棚の祭壇の飾り。盆棚に敷く「^{まこもむしろ}真菰筵」(イネ科のハナガツミ)は、釈尊が病人を寝かせて治療されたことから、病氣平癒、邪氣払いのために棚の下に敷かれる。^{へいば}ナスは牛、キュウリは馬、精霊様の乗り物。(かまどの窓から情報局より)

お盆の花を飾るのは、先祖霊が花を依代にして家に還って来るのである

先祖霊は毎年少なくとも春秋に戻って来て、子孫後裔たちと共に楽しい一時を過ごされるのが盆供養である。仏教の影響とみられる「盆の祭り」等は、実は縄文時代からの民族固有の祖霊祭祀の一つで、最も古い形の時代の精神文化を伴っている。

魂の帰る山・同じく柳田國夫著より要約で。

《・・無難に一生を経過した人々の行き処は、静かで清らかで、この世のざわめきから遠ざかり、具体的に、あのあたりにいると、大よそ見られるような場所でなければならない。祖霊は村の周囲の或る秀でた峰の頂からやって来るので、盆には盆路の草を刈り、山川の流れの岸に魂を迎え、山から盆花を採って来るなどの風習は、広く各地の山村にあって、今も行われている。霊山の崇拜は日本では仏教の伝来よりも古い。仏教は寧ろこの固有の信仰を、宣伝の上に利用したかと思われる。現在でも、奥州南部の宇曾利山(恐山)、越中の立山、熊野の妙法山の奥の院、檜山の最乗峰など(那智三峰一つ妙法山阿弥陀寺)、死んで亡者の先ず行くという山々は、何れも土地ごとに管轄のようなものがあって、靈魂は間違えても他所の御山に登ったとは聞かない。



①越中立山開山縁起大曼陀羅 江戸時代 絹本 140×210cm 富山県立図書館より

①・5月田植えの日、早乙女が一齐に振り仰いで山の姿を礼拝する歌を歌うような峰々は、何れも農作の豊穰の為に、無限の関心を寄せる田ノ神の宿る山であった。春は降り、冬には昇り賜うという、お百姓の守護者が遠い大昔の共同の先祖であって、家督の効果が、末永く収められることを強く感じていただろう。卯月(卯の花咲く季節)8日の山登りという風習が、是等と関係を持つことは疑い。一方には、釈尊の誕生会

から導かれて来たが手掛かりは無い。阿波の剣山の麓では山勇みと称して、高山に登って海を見る習らわしはある。是は高山の上に登るにつれて、段々と穢^{けがれ}や悲しみから超越^{ちようえつ}して、清い和やかな神になって、行かれるという思想からも説明できる。富士山や御嶽山の行者等にも、死後の年数と供養によって、麓から頂上に登り、遂には神になるという信仰が今でも行われている。・・・》(越中立山開山縁起大曼陀羅^{だいまんだら}解説より)

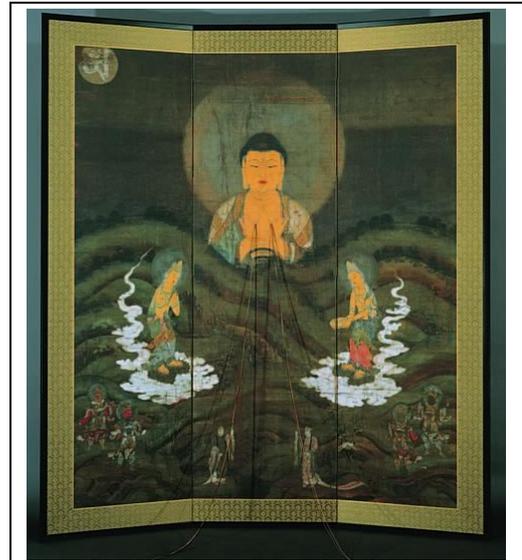
《日本民間の祖霊信仰は、仏教などの説くように十万億土の幽遠^{ゆうえん}な彼方へ、去ってしまつて、現世とは何の交渉を持たない他界へ消え去ってしまう存在ではなかった。それは人々の住む近くの高い山か、この国土に鎮めて留どまらういて、盆や正月、春秋の彼岸などの祭事儀礼に、遺族のいる家へ帰って来るといふ、祖霊祭祀の座に連なる親近性の強いものとなつてゐる。春秋彼岸に山から花を採つて来て、霊前に供えるのも、旧盆の7月の盆花を山から迎えて先祖棚(祖霊棚)に飾るのも、全てこれらの飾り花は依代^{よりしろ}(祖霊が依りつく)にして、祖霊が家に還つてくるためのものである。》

死の儀式と再生の儀式の構造 日本に土着(縄文時代より)している「あの世」観が、仏教の浄土教に影響を与え、インドにも中国にも無いような浄土教を生み出したのではないか。一つの国が新しい文化を受け入れる時、その土着文化を基にして受け入れるのである。移入された文化というものは、何時の間にか、元のものとは別のものになつてしまふことが起きる。日本では、インド・中国では決して主流になり得ない浄土教が主流となり、親鸞の哲学思想が、「あの世」と「この世」の往還を考える浄土教が生まれ、そして浄土教以外の仏教も、死の儀式を通じて、日本民俗風習と結びついている。浄土教は比叡山や高野山の山で起こつた信仰であるが、山は元々縄文時代より死者の住处^{すみか}であつた処、その最も解りやすく描いてゐる絵図は②「山越阿弥陀図」(次の頁)である。この絵図は日本人に解りやすい死者と山の崇拝が結びついている。浄土教義が日本仏教の主流となることによつて、我々の先祖はあの世へ送る儀式、葬儀は年忌供養など仏教が司ることになつてゐる。(『日本人の「あの世」観』より)

②**国宝・山越阿弥陀図** ^{やまこしあみだず} ^{げんしん} 源信(平安時代中期の天台宗僧)が描いたと云われる山越しの「阿弥陀図の屏風仕立て」は、なだらかな稜線の続く山々の向こうから、^{てんほうりんいん} 転法輪印を結んだ阿弥陀如来が、正面を向いて上半身を現している。阿弥陀如来の背後に穏や

かな海が果てしなく広がっている。観音菩薩と勢至菩薩は、踏割蓮台(蓮華座)に立ち、白い雲に乗って山を越え往生人(極楽往生を願う者)に向かって、今、まさに来迎せんとする様子が描かれている。観音は往生人の乗る蓮台(仏の台座)を両手で差出し、勢至菩薩は合唱し、両菩薩の前方には、四天王が左右に立ち臨終を迎える人が、極楽往生できる様に力強く見守っている。あわせて二人の持幡童子が幡を掲げて往生人を阿弥陀如来の方向に導こうとしている。

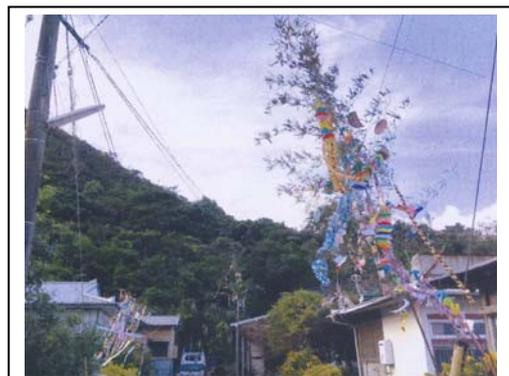
この絵図は高野山で行われていた真言浄土教の念仏の本尊とされる。真言宗の僧でありながら法然(浄土宗)の没後、法然に帰依し承久3年(1221)、禅林寺に入った静遍僧都(永観堂11代目・1165-1223)が、高野山で尊重されている阿字月輪観(密教の瞑想法)を通して感得した来迎図(臨終の信者を迎える極楽浄土から世に現れる図)に伝えられている。死を前にした人間の苦しみや孤独を救済し、求めているのは死を越えた心の絆である。屏風仕立てにした山越阿弥陀図の前に佇むと、山や月、自然や桜を観る者を包み込んで、自然との一体感が生まれる。そして阿弥陀如来や菩薩たちと観る者とが、命の絆で結ばれていることを実感させ、このように死に行く人は、仏に救われていることに気づかされる。(鍋島直樹/副センター長・龍谷大学法学部教授より)



② 国宝・山越阿弥陀図・縦 138cm・横 118cm・龍谷大学、人間・科学・宗教オープン・リサーチセンターより

初盆供養「庭入り」 (BS 新日本風土記『あの世この世』2018・08より)

江戸時代から続く初盆供養「庭入り」(家の庭で踊る)に、大分県分後高田市では江戸時代から続く「庭入り」という初盆供養の盆踊りが行われる。初盆の家は、先祖の霊が宿ると言われる「竹の葉」(七夕飾り似る)を飾る。色とりどりの竹飾りは、先祖の霊が迷わず戻れるようにと竹飾りを作り、先祖が戻る為の道標となる。この地区の人たちは老いも若きも一つになって、初盆を迎える全ての家を巡り朝まで踊り明かす。年に一度「あの世」から父母



や先祖の霊が「この世」に帰って来て一緒に過ごすのがお盆である。お盆の風習は日本列島の北から南まで実に様々にあって、お盆の儀礼は迎え火、送り火、盆踊り、灯笼流し等々から、「あの世」と「この世」を繋ぐ風習は、「あの世」の霊に思いやる人々には、お盆は「この世」で幸せに生きていることを報告儀礼ともいえる。

※上記写真は七夕飾り・奄美市「冥界に一番近い島の美しく温かい3日間」・「あまみつけ」より

「遠野のお盆」の新聞記事に 『遠野物語』で知られる岩手県遠野市遠野では、お盆になると各地で白く細長い布が風にたなびくのを目にする。近づき見上げると、白い布に戒名らしき文字が書かれている。これは「^{とよろぎ}灯笼木」と呼ばれ、3年以内に身内を亡くした家が、軒先に掲げるお盆の風習である。「新しい仏さんがこれを目当てにお盆に遊びに来てくれる。迷わないための目印、他の家の所へ行ったら困るから」と地元の人には説明する。柳田國男が著した『遠野物語』に「^{うらぼん}盂蘭盆に新しき仏ある家は、紅白の旗を高く揚げて魂を招く風あり」と記し、さらに「常に故郷の山々の上から、次の代の幸福を見守って居る。即ち、霊はいつ迄も、この愛する郷土を離れてしまうことが出来なかったのである」、あの山々に留まり家族を見守ってくださると。

中国大陸から「^{うらぼんきょう}盂蘭盆経」(竺法護が翻訳した経典)が入ってきて、仏教行事のお盆が成立した。ところでお盆の月日は、7月15日と、8月15日があるのは、それは明治5年に政府が西洋暦(太陽暦)を導入した事が原因で、お盆は旧暦の7月15日であったが、新暦の7月15日では稲の花穂が咲く頃で、農作が一番大事な時期あたる。改暦後にも、8月15日なら農家も一段落できるので、8月の15日のお盆が行われるようになったという。



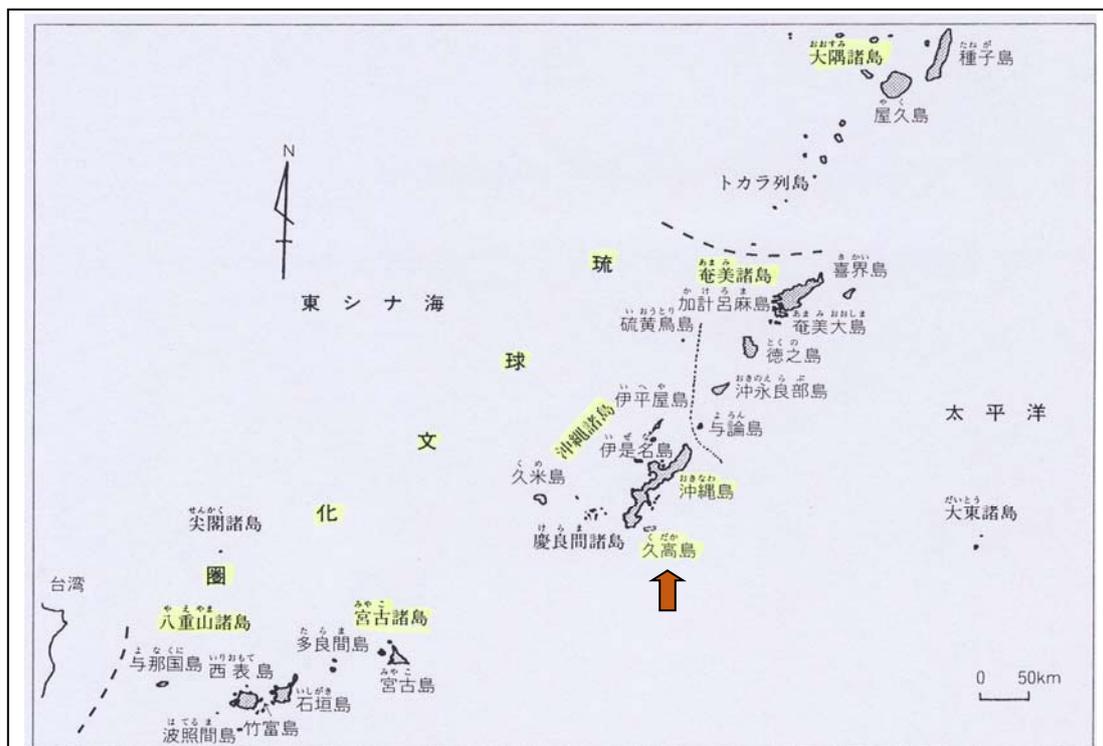
風になびく^{とよろぎ}灯笼木(遠野市附馬牛町)、新しい仏さんが迷わないように目印 (東北復興新聞より)

第4章 琉球弧の古層の神々

琉球弧の風土を観る 鹿児島県から台湾国までの間、約 1200 km の南西諸島が連なり、奄美群島・沖縄群島・宮古群島・八重山群島が続き、この西南諸島を琉球弧ともいう。これら島々の祭祀は、村々の豊饒や個々の魂を鎮める祭祀の儀礼は、古代のムラの成り立ちから、その祭祀の司るのは女性(母)たちであり、島々の守護神を「神女・カミンチュ」が仕切っていたのである。琉球弧の祭祀の歴史を遡れば、古代人の想いを継続して、今日まで祭祀の祖型を現代に伝えていると思われる。日本本土の神事の祭祀は、多くが男性神職者によって担われているが、琉球弧は女性主役の祭祀のカタチが残されていた。

15世紀後半、琉球王朝は国の統治を安定政策の柱として、女性の神職者による祭祀制度によって王朝政治を維持していた。琉球の古代からの歴史を経た結果として、琉球諸島に母性による「神女=カミンチュ」を、今日まで残すことに繋がっていた。

久高島(沖縄本島東側赤矢印)はごく最近の、1980年代まで、母親たちによる守護神となる「イザイホー=神女就任式」が残されていた島でもある。琉球弧には我が国の縄文時代人の信仰の祖型を残していた久高島を中心に、奄美・沖縄・宮古・石垣諸島から、写真・絵図で紹介して、縄文文化の「あの世観」を考察して行きたい。



琉球文化圏の地図・赤印が久高島 『琉球民俗の底流』吉成直樹著 古今書院より

琉球弧の信仰 『神と村』仲松弥秀著（1990年）を参照しながら進めて行く。

琉球の島々は、太古の時代より日本民俗文化の多くが、保存されて来ている島々と云われている。琉球弧の島々は、古代より神に対する尊崇と、畏れはただことではなかった。琉球弧の島々には、神祭者としての「ノロ」（女性祭司・久高島に外間ノロ、久高ノロがいる）の女性の祭司いて、「根神」（草分けの家の根屋から出た最高神女）なる者がいる。これらの祭礼関係者は家系と固く結ばれていて、他系の者が取って替わることができないようになっている。ノロはノロの姪（近代になってからは娘）が引き継ぎ、根人（草分けの政治的支配者）は、「村の宗家」の宗家出自の女子が、引き継がれてきたのが一般的制度となっている。都合により、その家に引き継ぎ者がいない場合は、その親族から選定される。このように古代から、「ノロ」ほとんど変わることなく存続してきた拝所・御嶽、神事は、女性司祭者がその村の歴史的過程や地理的過程を司った経緯となる。琉球の信仰はアニミズムと祖霊信仰を基本としている。

神のとらえ方 沖縄には「セヂ」（方言スジ・シジ）という語があって、セヂとは「霊力」を意味し、神霊・守護霊とも表す語となる。セヂは剣につけば霊剣となり、石につけば霊石となる。門・港・船・杜（森）・城にも憑き、人に憑けば超人となる信仰なのである。人間の能力では成し得ないことは際限なく存在し、豊作や豊漁を維持することは容易なことではないが、台風の時期には暴風雨を抑える霊力、病気や悪魔を退散させる霊力は、古代に遡れば遡るほど、人力では不可能な事々が多々あった。

人力の及ばないことを、可能にすることが「セヂ」の霊力であり、大型台風の上陸や、マラリヤ病など神の力を以てしても、無力だった場合は、諦める以外に方法はない。大自然の摂理には神でも太刀打ちできない場合もあって、村人は神に対して何一つ不平不満の心を持たない。セヂの顕現者（神の形が現れる）として最高に尊崇され、信頼されているのが村落の「祖霊神」である。そして豊饒と文化を齎す、海の彼方から来訪するニライカナイ神（東海の彼方の理想郷、久高島ではニラーハラー）なのである。

カマドを司る神「火の神」、命の水の神「水のセヂ」等があり、その中で村民が信頼、尊崇している守護神が「祖霊神」となっている。それは村民の遠い先祖たちが33年回忌を過ぎると、霊魂は海や山に昇天して神となるのである。即ち「祖霊神」とは、血の繋がった親族であり、神であり、琉球に於ける神とは、「肉親に善を齎すセヂの顕現者=先祖神」という観念にほかならない。

「火の神」と「水の神」セヂについて 沖縄県の歴史・民俗の研究「むぎ社」より。
《・・・神に近づき触れ合い、その声を聞いたり、感じたりする能力、神の不可思議な力を引き出すエネルギーを、沖縄では「セヂ」（霊力）という。古くから沖縄では、その不思議な力の「セヂ」を、男性より、女性の方が強く持っていると言われてきた。女性は生まれながらにして、神の力を引き出す能力を強く持ち、神に仕える役割を担うのは女性と言うことになっている。村々の祭事や行事に際して女性の神役は、司祭者として役割を担い、男性の役割は女性を補佐する側に回るのが普通となっている。また、女の神役は、人と神の仲立ちをして神の意志を取りつぐ役を司るが、男にはこの役割はない。神との対話を大切にし、火の神の御願^{うがん}や、神々への祈願をセヂ力の高い女性の役割とするのも、これまた理に叶っているといえよう。・・・》

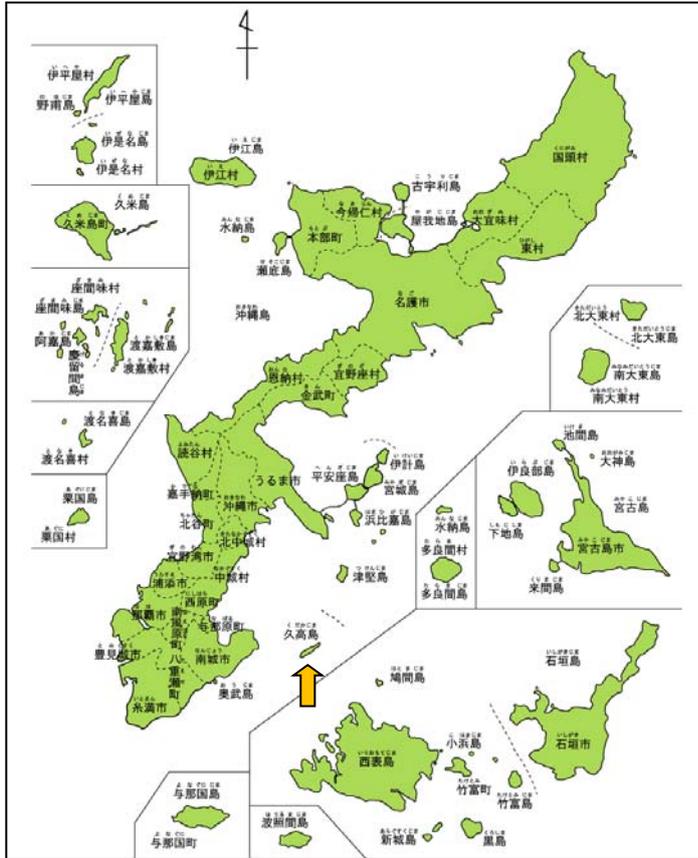
《この記事を検討すれば、縄文土偶に女神像が圧倒的に多いことは、女性神の方が、霊力=セヂの力を取り込むことができる事を、古代人知っていたのかも知れない。》

神の久高島を歩く 沖縄県南城市知念岬^{ちねん}より安座真港^{あざま}フェリーで20分の島
南西諸島と呼ばれるこの地域は、孤状列島となり大隅諸島、トカラ列島、奄美諸島、沖縄諸島、宮古列島、八重山列島が連なっている。

琉球王朝は沖縄本島中心に按司^{あじ}(豪族)をもって統一し、王朝を築いたのは15世紀頃となる。16世紀初頭、本土の薩摩藩(島津氏)の侵略(1609年)を受けるまで王朝を維持していたが、薩摩藩は琉球と中国貿易の利益を確保するために、中国に対し、琉球独立王朝を装^{よそお}わせたのである。薩摩は琉球王朝を容認しながら内政に深く干渉したことにより、主体性を失っていた琉球王朝となっていた。

明治時代に入り、1879年、明治政府による廃藩置県より琉球王朝は終焉となった。この時、奄美の与論島以北は、鹿児島県に組み込まれ、沖縄、宮古、八重島は沖縄県となった。

そして歴史は下り、沖縄諸島は先の太平洋戦争に巻き込まれ、辛苦を負ったのである。久高島も米軍の上陸や艦砲射撃によって集落住居は殆ど壊され、その後、奄美は1953年に、沖縄県は1972年に本土復帰を果たした。現在米軍基地建設に於いて、本土人による南西諸島の政治的な歴史統治による経緯によって、沖縄人の心情に、本土人^{わだかま}に苦しめられた経緯が、まだ心に癒されない蟠りがあることは確かである。



② 14世紀～16世紀・琉球の交易路
 「沖縄の旧石器人と南島文化」主催・大阪府立弥生文化博物館×沖縄県立博物館・夏季特別展平成29年より

① 沖縄県の地図・矢印が久高島（沖縄修学旅行おうらいデジタル・アーカイブより）

それい
 祖霊神は一族の先祖の靈魂である 祖霊神は村落の鎮守神であり、「おそいする神」（靈力が村を守護・愛護する）となっている。村人からすれば「腰当神」（幼児が親の膝に座って甘える姿態、村民たちは祖霊神に抱かれ御嶽森に座する）となり、祖霊神が鎮座している「御嶽」（祖霊神の聖地）を「腰当森」と称し、祖霊神=腰当神は、村人と先祖の繋がりとして歴史的に繋がっている先祖霊なのである。



③世界遺産・齋場御嶽は有名な三角岩の三庫理④齋場寄満御嶽・寄満とは王府用語で台所・2018年撮影

村人を愛しんできた先祖霊が鎮座している聖域を御嶽といい、「クサテ」にしてきた

所は拝所でもあり、クサテ森は村人の血の繋がった、遠い先祖たちの霊魂が居られる所なのである。「ウタキ」も「グスク」も「クサテ」も、古よりのムラ人たちの埋葬所(風葬)で場所でもあった。そうした場所が「御嶽森」^{うたき}「クサテ森」となっている。祖霊神と村人の関係は、血の繋がっている先祖に他ならない。

死人観について 沖縄では人が死んだら「神となる」「神仏になる」などと言う。死んだ当座は肉がついており、肉が付いている間は、魂は未だ肉に縛られ、神にはなれない。肉が完全に腐れ去った後に、初めて完全な神となるという、思考をもっている。肉体から去った霊魂は、東海の彼方(あの世)や、山の頂に昇天して霊が神化し、後に残った^{なきがら}亡骸は、単なる蟬の抜け殻に過ぎず、この葬儀はまさしく風葬である。

村落の外れに、一定の場所に^{はふ}放った後は、何ら振り返ることはしない。次々と死人を^{のぎら}野晒しに放って置き、その場所に散乱している骨は、月日が経つと、何人のものであるか判からなくなる。死体の^{はふ}放る葬り方は、これは本土人にとっては理解不能であるが、風葬についてはP 60～61 で述べる。

神となっている先祖の魂を拝する場所には、そこに人骨崇拜や墓所崇拜が起こったことは自然の成り行きであろう。骨に魂が憑いている思想から、沖縄では先祖の骨を「^{ふにしん}骨神」、または「^{しーじん}精神」とも称されている。

沖縄県うるま市^{つけんじま}津堅島(久高島の上)は古風を残している島に、そこでは死人を後生山(グソー山)に連れて行き、6日間は墓参に通う。その後は墓参すること無く過ごし、49日目に、家に於いて祝いの祭礼を行い、翌年の^{たなばた}七夕の日に村中が一斉に洗骨行事が行われるのである。それ以後は墓参することもなく祭祀も行われない。

宮古島市の^{いけまじま}池間島では、沖縄戦以前までは、「死んだら神となる」との思想があって、葬儀が済んだら翌日からは誰も墓参する者はいない。9日目に親類縁者が家で祭りをするのみで、以後葬儀の^{まつ}祀り事を行わない。池間島では、死ぬと直ぐに神に成るのではなく、最初は「^{かむすと}神人」になり、90日目に「ミツツガカンナイビューイ」(3カ月が神成日)といって、真の神にこの日から成り、家で祝いの祭礼が行われる。沖縄本島では、33年の回忌までがホトケで、その年忌が済めば「神」と成ると信じている。これらは恐らく仏教の影響と考えられ、宮古市の^{くりまじま}来間島、池間島での野辺の送り以後は、墓参もなく洗骨風習も無かったことは、古代より一般的なことで有った様である。

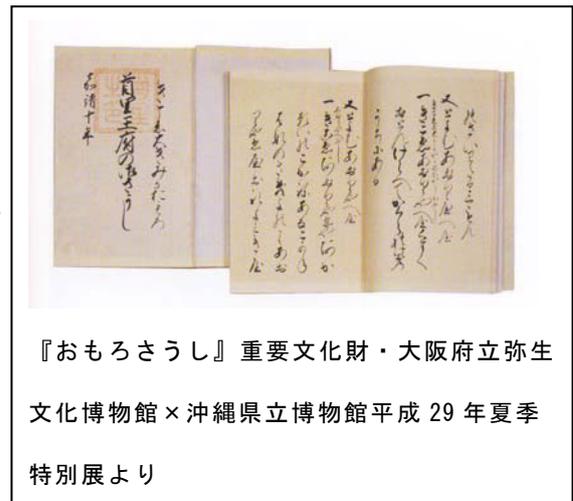
『おもろさうし』^{いはふゆう}伊波普猷著(民俗・言語学者 1876—1947年) 沖縄・奄美群島に

伝わる古代歌謡を収録研究し「南島(沖縄)古代の葬制」に次のように記している。

《・・「20余年前、沖縄島の中部の東海岸を少し沖に離れた津堅島(久高島の上)で、暫く教員をしていた人が、私に話したことがある。そこでは人が死ぬと帯で包んで後生山と称する藪の中に放つたが、その家族や親戚明友たちが、屍が腐爛して臭気が出るまでは、毎日のように、後生山を訪れて、死人の顔を覗いて帰るのである。死人がもし若い者である場合には、生前の遊び仲間の青年男女が、毎晩のように酒肴や楽器を携へて之を訪れ、一人一人死人の顔を覗いた後で、思う存分に踊り狂って、その霊を慰めたものである」・・》と、ある。

死人の甦りを考えて密閉もせず、一週間も墓参をして、蓋もしないということは死人を覗き見に行った風習の現れではないだろうか。

『記紀』に出て来るように、伊邪那岐が黄泉国の伊邪那美を訪れたという習俗は大和(本土)では1300年前頃には失われていたであろうが、風葬は沖縄の離島に於いては、1966年代まで葬風が残っていたのである。



『おもろさうし』重要文化財・大阪府立弥生文化博物館×沖縄県立博物館平成29年夏季特別展より

シマのムラとの成り立ち 沖縄諸島の古村落に御嶽=グスクがある。そのムラの成り立ちの御嶽の歴史を追って見れば、①御嶽と同じ聖域説、②御嶽を中心に発達した集落説、③豪族が居城として城構築された城館説がある。

因って、御嶽は村の宗家(草分け)と隣り合わせになっている。御嶽=グスクは、古村落の先祖の葬所(風葬場所)が有ったようで、歴史過程を経た後、拝所(ウタキ・グスク)に成ったものと考えられる。宗家=草分けとなり、総本家は村落の中央の最上部に位置した所に住居は残る。沖縄の集落は、凡そ小高い丘「腰当の森」(子が親の膝上で安らぐ様子)を背に、その南側の中腹や、麓斜面に集落を造っている。その中央(又は左右)の最上部に村落の本家(宗家)が位置し、そこから一段下がった左右に、次の代の宗家系親族が並び、更にその下方の前面に分家が末広がった配置のムラとなっている。また本家の背後には、村落の守護神を祀る神聖な場所「御嶽」があつて、本家からその御嶽に通じる神道が設けられていることで、その歴史経過を理解することができる。

東海の彼方から人々に幸福と平和を齎す神、「ニライカナイの神」(東海の彼方のあの

世=竜宮城)を招請する所は、遠く海に見える小高い所か丘の上にある。このように神とムラ人の繋がり、沖縄の人々の海と森に囲まれ、集落を形成してきた歴史経緯がある。「村」(ムラ=シマ=クニ)という語の使用は、島津藩の琉球入りの頃からで、集落の場所は血縁共同体としての「マキョ」(琉球建国神話)と呼ばれている。小高い丘の「腰当の森」は、神が鎮座する場所、即ち「御嶽」と呼ばれ、神の鎮座する聖なる場所を「イビ」(神霊の憑代)といい、その前を「イビヌメー」(憑代の香炉)と称し露天に石の香炉や台石が置かれている。(国営沖縄海洋博公園の説明より)

おそらく古代の沖縄に於いて、死んだ家族を屋敷の周りや軒下に埋葬した事、屋敷のすぐ隣に御嶽やグスクがあることは、父祖の守護神を守り神とし、これを腰当とする信仰になったと考える。

琉球王国は太陽神(ティダ)を最高神として、東方の彼方に信仰を根幹に置き、東には太陽が昇る穴があり、その彼方を守護神の域と捉えている。即ち、東方は太陽の昇る聖域と捉え、反対に西方は死の領域と捉えた。因って風葬は島の西方の崖や洞窟で葬られ、東方(那覇から見て)の海に浮かぶ久高島は、琉球王国最高の聖地になっている。久高島のフボー御嶽(沖縄七御嶽の一つ)は、太陽の穴そのものとされていた。

【※シマとは一般にみる「島」ではなく、一つの小国に想定、ムラも本土の「村」でなく、大きな地域の村落を指すのがムラであり、シマ・ムラも南西諸島側から見たシマの実証となる。】

⑤・⑥久高島のフボー御嶽を拝観・フボー御嶽の信仰は生命が自然界と循環している思想に基づき、御嶽の拝礼所内に生えている植物等は切ってはならないタブーある。



⑤



⑥

⑤久高島「フボー御嶽」神女祭祀聖域、男子禁制(2018年撮る) ⑥写真はフボー御嶽の中で祝詞(のり)を唱える。左側座る女子が外間ノロ、右側女子が久高ノロ。『神々の古層①』より

フボー^{うたき}御嶽周辺は御嶽林となり、久高島の第一の聖地クバ^{びんろう}(檳榔・ヤシ科)の葉が茂る草木に覆われた聖域となっている。神女(カミンチュ)たちはクバの葉を地面に敷き、その広場の正面に手のヒラ大の、自然石が数個置かれ、この石に神霊が憑依^{ひょうい}(神霊が憑く)して、これをイビ(憑代香炉)という。外間^{ふかま}ノロがイビに向かい正座合唱して祝詞^{むチメー}(のり)を唱え、全員がこれに合わせ唱えて儀式が始まるのである。ここ迄一般の御嶽信仰に付いて述べてきたが、次に民俗学者の研究論文を覗いてみる。

「御嶽信仰の解説として」タケ信仰を考察する 『琉球民俗の底流』吉成直樹著
古今書院 「御嶽信仰をめぐる問題群」の「タケ信仰」を要約で転載する。

《・・御嶽^{うたき}信仰(本土では御岳^{おんたけ}信仰。沖縄では御嶽^{うたき}信仰)を考える上で、ヤマト(本土)に見られるタケ信仰(山岳信仰)は抜きがたい重要性を持っている。「御嶽」という名称自体が、このタケ信仰に由来すると考えられるからである。小島^{よしゆき}瓊禮(民俗学者)は、「岳」(ガク・たけ)のつく山岳の分布図から、青海(長江)、対馬、壱岐、五島、平戸、肥後の半島部、天草、甑^{こしきしま}島(東シナ海)、薩摩半島、屋久島にかけての地域に、その分布が集中している地域がある。それが更に琉球列島の御嶽に連なっていることに注目する。そして、琉球列島の御嶽は、山岳を土地の鎮護神^{ちんじゅがみ}として祀る山岳信仰の一形態であるとみなし、そうした信仰は、西海(九州地方)の「岳」領域の古層に繋がるものと推定している。

小島^{よしゆき}瓊禮は、琉球列島の御嶽を、朝鮮半島から琉球列島の先島^{さきしま}地域に及び、海の大動脈を通して、南へ少しずつ進む文化、流れの中に位置づけて把握している。また、大和の産土神^{うぶすな}、鎮守神など、里に近い山に村を鎮護^{ちんご}する神を祀る習慣も、琉球列島の御嶽の神と同一の起原を持つものと見なしている。では、タケ信仰とは具体的にはどのようなものか、桜井徳太郎(民俗学者・シャーマニズム)の報告に従って伊勢・志摩の境にある朝熊山^{あさまやま}(高553m)の「タケ参り」についてあらましを紹介しよう。

朝熊山を、南勢、志摩では、タケ、オタケなどと呼び、朝熊山周辺の住民は死ぬと、そのオミタマ(魂)は、タケに登ると考えられており、人が死ぬことを「あの人もとうとうタケさんに登った」などと言う。ここには、死者の魂が山中に行くという、所謂^{いわゆる}山中他界観が極めて鮮明に表現されている。朝熊山信仰を端的に表現するのは、「タケ参り」である。例えば、死者儀礼に際して、死者を埋葬した翌日に、女衆(オナゴシュウ)は、口寄せ^{くちよ}(死者霊を憑依させ言葉を伝える)の巫女を喪家に招いて、死者の口寄せを行

う。男衆は朝熊山にタケ参りををする。新亡供養^{しんもうくよう}のために、49日忌にタケ参りに行き、命日の春秋の彼岸、年忌毎にタケ参りを行うこともある。また男女とも13歳になると、「13参り」と呼び、タケ参りをするがこれは成年式、成女式のイニシエーションとしての意味を持つ。本来、死者の霊魂は山中に昇り、そこに留まると考えられている。死霊そのものは極めて恐ろしいものと見なされ、死霊を尋ねて、山中に入ることは許されず、人々は、山麓^{やうはいじよ}の遥拝所^{えこう}で死者の回向^{えこう}（死者を追善）と供養をおこなった。厳禁されていた霊山の登拝^{とうはい}を、タブーを撤去したのは仏教、ことに密教に支えられた山伏修験者^{しゅげん}たちであった。

さて、ここで久高島に見られる「タキマーイ」^{うたき}（御嶽通い）と「タケ参り」を比較してみると、久高島の「タケ参り」は、旧暦3月、6月の麦・粟の収穫祭となり、それに1年で最も重要な祭りとされる、8月の行事群の一つの儀礼として行われる。ここでは1984年の9月に行われた「ヨーカビー」（悪霊祓い）に際して行われた「タケ祭り」を簡単に記してみる。^{うたき}（御嶽は男性立入禁止の為、御嶽の中の記述は同行した女性による）

ヨーカビーは、8月行事の3日目にあたる旧暦8月11日（この年は9月6日）の午前に行われ、ノロ（女性最高祭司）を中心とする神女たちによって「タケ参り」が行われたが、本来は14～15歳までの女性も参加したものだという。そして、神女たちは紺地^{こんぢ}の着物を着て（祭事の白装束は神衣裳ではない）、集落の村境から北に向かって歩き、フボー御嶽（53頁参照）へ行く。フボー御嶽では、鬱蒼^{うっそう}とした森の中に開けた広い空間があり、その空間の一番奥まった所にイビと呼ばれる石（自然石と香炉に神が憑依）がある。ここで神女たちは円陣を作って、日の丸の扇を手に持ち、神歌を謡いながら踊り、その後、神酒を全員で飲む。この時、ノロがイビ石に神酒をかけるのは、神女たちと御嶽の神が共食することを表現している。

ここでの儀礼が終わると、次に中の嶽^{たき}に参る（4カ所）。この御嶽はニライカナイ（東海の彼方の理想郷）へ遥拝^{ようはい}する御嶽で、ここで東方に向かって遥拝する。この御嶽を出ると、神女たちは手拭^{てぬぐい}を頭に巻くが、久高島の神女組織で年齢階梯^{かいてい}の最も下位に位置するナンチュ（イザイホー新就任参加神女）と呼ばれる女性（30～41歳）だけは、サツマイモの蔓^{つる}を頭に巻く。これは、ニライカナイから豊饒^{もたら}を齎されたことを意味する。こうして神女たちは集落に戻り、村境では村人総出で迎える。このとき、女性たちも村人たちも喜びに満ち溢れ、男たちの三線^{さんしん}に合わせて女性たちは陽気にカチャーシー（沖縄踊り）を踊る。

ちなみに、このヨーカビー（悪霊祓い）が行われる日は、村境より北（島の北は農地と森、墓場となる）は死霊がさまよっていると考えられ、そのため前日の夕刻には、死霊が家に近づいて来ない様に、魔除けのために、各家では茅と桑の葉を束ねたものを屋根の隅など各所に置く。この久高島の事例と、タケ信仰における「タケ参り」とを比較すると多くの類似点を見出すことができる。

第1に、「タキマーイ」（御嶽通い）とは「タケ参り」であり、名称が一致すること。第2に、調査時点では、「ノロ」を中心とする^{カミンチュ}神女組織が「タケ参り」をするが、本来は、14～15歳までの女性が参加しており、「13参り」に見るような成女式としての性格を持っていたと考えられること。第3には、集落の外れの境界より北には墓（グソー）があり、そこに差し掛かると、死霊が^{ぼっこ}跋扈（うろつく）すると考えられており、女性たちがその様な世界に入り、儀礼を行うことは、死者供養の意味合いが強い。

こうした類似を考えれば、久高島の「タケ参り」は山岳信仰であり、タケ信仰の何らかの影響を受けていると考えてもよいだろう。

集落に帰ってくる女性たちを、集落の外れで村人総出で迎え、男が弾く三線に合わせてカチャーシーを踊る。これは集落に死霊が入って来ないためだと説明されるが、一面では無事に「タケ参り」から帰って来たことへの喜びを表現するという意味もあるのではないだろうか。久高島の最高海拔高度は17m程だが、その想いは山岳信仰、「タケ信仰」の山に見立てられていると思う。



タキマーイから戻る神女を迎える村人「久高島の年中行事ハティグワティ」

園田学園女子大学論文集第51号より

こうして見ると、琉球列島における御嶽とは、幾つもの要素が、互いに絡み合い複合をなして成立していると言ってもよい。その中で、第二尚王朝三代の尚真王の時に、御嶽とオボツ信仰（天にいる神・天神）の結びつきを軸に、ノロをはじめとする神女群を結びつけて、神女組織を整備したことは、特に重視されなければならない。しかし、琉球列島に存在する多くの種類の神山を、「タケ信仰」に関わると考えられる「^{うたき}御嶽」という名称で一括して表現したということにも「タケ信仰」が、琉球王府にとって重い意味を持っていたことを、改めて考えるべきであるように思う。

御嶽の原初形態である始祖、ノロ、開拓祖先などの墓としての性格は、琉球王府にとってはさほど重要な意味を持つものではないが、それは『おもろさうし』の中にそ

のような性格の御嶽が謡われておらず、あくまで高所をイメージさせる場所として謡われている事からも理解することができる。ただ、神の出入り口の「穴」（アーチ型の門）に、神話的時代の存在が、地下から出現したという名残を留めている。琉球列島の御嶽の成立を考える際には、それを単一の起原を持つものと考えずに、その歴史的形成過程に於いて、様々な要素が複合して形成されたという「複合論」的視点に立たなければ、どうも理解することはできない。・ ・ 》と、解説されている。

琉球の神々 琉球王国時代に琉球開關神話^{かいびやく}が史書として残されている、『中山世鑑』^{かん}（薩摩藩支配下時に記録された琉球王国正史）や、『琉球神道記』^{しんとうき}（琉球王国に渡った倭の浄土僧の袋中良定^{たいちゅうりょうじょう}が著した薩摩藩の侵攻以前の仏教の本地垂迹^{ほんじすいじゃく}=神仏習合記）等に大和（本州）の開關神話と酷似した神話が記録されている。琉球は天帝（琉球王）によって琉球の創造神である「アマミキヨ」と「シネリキヨ」の2柱神によって島が造られた。そして、琉球開關七御嶽^{うたき}（礼拝所）を造り、島に人間を放たれたという。歌謡集『おもろさうし』には「アマミキヨ」と「シネリキヨ」の2神が、「日の神=日神」に命じられて、島々と人間を造った建国神話が歌われている。

【※沖縄の建国神話の『琉球神道記』（1608年）は「アマミキヨ」と「シネリキヨ」の2神、『中山世鑑』（1650年）ではアマミヤ（女神）とシラミキヨ（男神）の2神の伝承となっている。】

人間創世神話 《・ ・ 「昔、久高島の対岸にある百名^{ひゃくな}からシラタル（兄）、ファガナシー（妹）が舟で久高島に渡って来た。最初は島の南端（現徳仁港）で、寝る場所を7回変えながら魚介類を採って暮らしていた。その後、島の東海岸沿いのアグルラキ（御嶽の一つ）に移り住み、最後は始祖家の一つ、タルガナー家に落ち着いた。2人は鳥の交尾を見て夫婦になり、子供を産んだ。この子供達が久高人の始祖である。」・ ・ 》とある。

【※久高島の土地は国有地や村有地、電力用地を除き、全てが島人共有地とされ、住民はそれぞれの土地の利用権はあるが、所有権は認められていない。これは、島外者等への流失を防ぎ、島の地域共同体管理を維持する為の手段として、歴史の中で認識されてきた経緯となる。】

穀物の伝来神話 《・ ・ 昔、大里家^{ウブラトウ}（うぶらとう家は久高島の始祖家に五穀の神が祀られている）にシマリバー（女）とアカツミー（男）が住んでいた。ある日、アカツミーがイシキ浜（久高島東側）で漁をしていたところ、沖の方から白い壺が流れてきた。アカツ

ミーは壺を拾おうとするが沖に戻されてなかなか拾えない。そこでアカツミーは自宅に戻り、その事をシマリバーに話した。シマリバーは、まずヤグルガー(井泉)で身^{きよ}潔め、白い着物を着て眺めれば、取れると教えてくれた。アカツミーはその教え通りにして、再びイシキ浜に行った。先程までどうしても取れなかった白い壺が、不思議なことに、難なくアカツミーの白衣の袖に入った。その白い壺には麦、粟、アラカ(アカネ科ナガミボチョウジ)、小豆の種が入っていた。麦と粟はハタスという所に植え、壺はそこに埋めた。麦、粟は此処からシマ中、クニ中に広められた。この神話を持つ大里家は、^{グウクウウユウプラトゥ}「五穀世大里」^{サニユウプラトゥ}「種世大里」と呼ばれ、旧暦2月と12月に行われる「ウプヌシガナシー」(健康祈願祭)という祭祀の時に、アカツミーとシマリバーの神霊を引き受ける神職者に憑依して神話が再現される。・・・》と、五穀漂着神話は伝えている。



五穀漂着神話のイシキ浜に壺が漂着 沖縄観光・沖縄情報 IMA より

出生観と死後観 琉球弧の島々の遠い祖先を尋ねれば、遙か東海の彼方に万物の根源の国、幸福が充ち溢れている国の存在を想念し、東の彼方の海に、「ニライカナイ」(理想郷=あの世=龍宮殿)から、祖先はやって来たと考えたていた。

「ニライ」の「ニ」は「土」を意味し、伊波普猷^{いなみふゆ}は、「ラ」は「入る」、「ニライ」の「ニ」は「根の国」(日本神話の黄泉の国の入口と同じ)と捉えた。16～17世紀、琉球王府に編纂された『おもろさうし』には、「ニライ」から「セジ=霊力」^{いただ}を戴く琉球王は太陽と同格であり、王を「テダ=太陽」とする思想がこのあたりから生まれたようである。

沖縄本島南部の^{たまグスク}玉城村(南城市)の海辺に祀られている「ヤハラヅカサ」(琉球開闢^{かいびやく}の神アマミキヨが上陸場所)は現在でも東方の彼方に向かって、子授けの祈願をしている。村によって旧暦3月3日の「浜下り」行事に子を欲する人が村の神女に請い、海に向

って祈り子授けを願っている。奄美群島内の加計^{かけ}呂麻島^{るまじま}の村人から子供は海の彼方のニライカナイから、子供が送られて来ると信じられている。生まれてくる子供は「ニライカナイ」の彼方のあの世からやって来る、そして死んだらニライカナイの故郷へ帰って行く。その魂はあの世で友人や親類たちと楽しく暮らしていると信じられている信仰なのである。



ヤハラヅカサ・祖神アマミキヨが舞い降りた海岸・城南市観光文化振興課より

ニライカナイとは 琉球人の「あの世」の概念として、水平表象と垂直表象で考察し、ニライカナイを水平神、即ち「東海の神・竜宮神」であり、これは遙か彼方の海を渡って来る「ニライカナイ」という理想郷=あの世を指し、この神を忠実に伝承しているのは八重山群島の人々である。これに対し垂直神「オボツカグラ」(天上神)という天より降臨する神は、聖地神山の天より下ると信じられる神の概念となっている。

『中山世鑑』^{ちゅうざんせいかん}(編纂琉球国正史)に、「オボツカグラの神と申すは、天神也」^{てんじん}とあり、『混効験集』^{こんこうけんしゅう}(琉球古語辞典)には「天上のこと」とある。「ニライカナイ」は「海の彼方、海の底の異界、豊穰や生命の源郷となっており、ニライカナイから来訪した神は豊穰を齎す。この世の魂もニライカナイから来訪し、死者の魂もニライカナイ帰って行く。」となっている。

琉球諸島では死後、33年回忌を経過すると、霊魂は神となって親族の守護神となり、「後生」^{グソー}(あの世)国のニライカナイで、先祖霊が守護神へと変身となっている。因って、旧暦の2月イシキ浜で健康祈願と農作豊穰祈願が行われる。琉球人のあの世の概念を、水平表象で論じた折口信夫(民俗学者)は、ニライカナイを「水平の異界」し、「オボツカグラ」を「縦の異界」と解釈したのである。

久高島北東の最先端にあるカペール岬は、琉球の祖神がアマミキヨの降臨した神聖な岬なる。尚、島々によりニルヤ・カナヤ(沖縄)、ネリヤ・ユルヤ(奄美大島)、ニラ(与論、沖永良部島、与那国島)、等となっている。 ※下記はカペール岬(沖縄観光情報より)

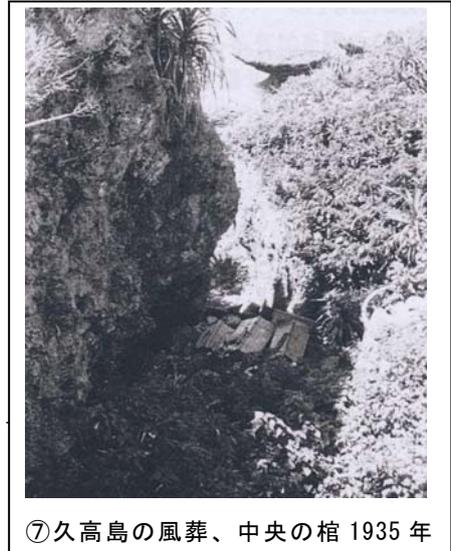


風葬の写真 「神の島とも云われる久高島(南城市)の海岸の岩場に置かれた木棺(⑦写真中央の棺)である。

遺族は亡骸を「後生」(あの世)に無事に帰る事が出来ますようにと祈り、更に旧盆には家に帰ることが出来ますようにと祈る。1960年頃まで行われていた風葬棺は12年に一度、旧暦10月20日に一斉に棺は開けられ遺族は洗骨して陶器や石の厨子甕に収められる。

(※沖縄タイムス 2017年6月11日記事より)

【※風葬は遺体を屈葬(身体を折り曲げる)にする。その理由は、再生説=胎児と同じ体勢にさせて復活を願う。魂の浮遊説=死者霊が浮遊しないように石を抱かせる。屈葬の想いを縄文期におけば、理解できるのである。】



風葬と洗骨について 『死・墓・霊の信仰民俗史』新谷尚紀著・歴博ブックレットより。

伊是名島(今帰仁村運天港よりフェリー)での洗骨(昭和53年)模様を概要で紹介。

《・・・⑧洗骨は5年～7年に行う例が多い。盆の月の七夕の日が多く、死者が「あの世」から来たがっているので、洗骨をしてあげるとよいという。時間は干潮の時刻に合わせて始め、墓前にテントが張られ直射日光に当てないようにする。

遺体は殆ど白骨化しており、近親の女性たちが遺骨を持参した清水で丁寧に洗う。頭蓋骨は故人の正家の井戸水を使い、故人が産湯に使った井戸水で洗う。作業が終わると骨甕に納骨し、墓室内には3段の棚があって、正面中央上段には墓を造った大先祖



⑧洗骨(シンクチ)の様子図・沖縄県立博物館・琉球弧の葬墓制より

の骨甕が安置されている。遺骨を墓室に納め終わると、線香・供え物を上げて拝み、紙銭を燃し(中国風)、門中(親族)達は墓前で飲食して楽しい宴で過ごす・・・》とある。

風葬の写真事件が起きる 『日本人の魂の原郷』比嘉康雄氏の次の様な記事がある。

《・・・久高島の葬所(風葬場所)は、サンゴ礁石の連なる西海岸沿いに4カ所あって、その葬所を通称「グソー」(グッソー)と言っている。久高島では1966年頃まで、死体を木棺に入れて岩陰などに置き、自然の風化にゆだねる弔い方、つまり風葬が行われ

ていた。久高島が太古から連綿と続けてきた風葬が途絶えたのは、1966年に、心ない外来者(本土人)が、風葬途中の木棺を開けて写真を撮ってしまった。シマ人たちには、死者の判別可能な状態の写真撮影などを写す人などを想定外にいたのである。しかも、この写真を雑誌に発表(1967年)するという、シマの人にとっては予想もしない事件が起きた。シマの人には大きな衝撃であったと思われる。この出来事以降、風葬は行われていない。現在は死者を沖縄諸島も本土同様に、同じように墓に納められている。ここで注意してほしいのは、久高島の死生観は葬送歌にもあるように、長い歴史と風葬を通して、自然的な死生観であることである。決して、近世以降中国等から為政者が導入した、庶民レベルまで普及させた^{きっこうぼか}亀甲墓に代表される、石で固めた沖縄の墓からは、発想することはできない、死生観であるということである。・・》と述べている。

風葬現場を見た本土人に、野蛮な風葬にしか写らなかった無神経さを指摘している。

※付録1頁に沖縄の針突習俗に、本土人に耳の痛い文面があるので読んでほしい。

また、上記と似た話が映画、『イザイホー 神の島・久高島の祭事』にも起きていた。当時、この記録映画は1カ月余かけて「イザイホー」と島民の生活記録映画を撮影したもの。野村岳也監督は言う、「撮影の翌年、久高島で初号の試写会を開いたのであるが、その時、イザイホーを^{つかさど}司った神女の女性陣から、この作品はあまり世に広めたくない、という話が痛く伝わって来た。結果としてこの映画を40年間“封印”してしまった事を告白した。」そして、40年後に見た人達は「イザイホーは沖縄の宝」と、賛美の声が上がったのである。^{もろもろ}諸々のムラ時間が過ぎ去ると、イザイホーの記録映画を見た琉球弧人も、本土人も、この記録映画に感動が沸き上がったのである。(「沖縄久高島のイザイホー第1部」東京シネマ新社1979年制作・you tube 動画配信している)

グスクとは何か 沖縄の各地には「グスク」「スク」と呼ばれる遺跡が300余カ所程あって、石垣や城跡を指して「^{グスク}城」の字が当てられている。巨大なグスクは12～16世紀、琉球王朝時代に石積み建造されたものであるが、石垣があっても城跡には見えない所や、岩丘、島崖、洞穴をも「グスク」と呼ばれている。グスクの説については、城館跡説・集落防御跡・祭祀跡・葬所跡等があるが、それらを総合的に考えれば、その霊力を内包する拝所を「グスク」と呼ぶ。村落の人達は「グスク」のことを「^{うたき}御嶽の神」「われわれの村の御嶽」と云い、村から見れば、古代からの祖先達の共同^{そうしよ}葬所(風

葬)の所がグスク・御嶽・テラ(ティラ=洞穴内墓)と称せられていたのである。ムラ人達は、屋敷内の祠が御嶽であり、ティラ(洞窟)なる。近代になり、ティラが「テラ=寺」(同名異質)と呼ばれ、城跡等にあるグスクを保護していた按司(豪族)が居館を建て、自己のグスクも同じ石積の囲いした事によって、外見上は、城石積みのように見えるので、グスクを「城」=「グスク」に字を当てたことが原因とされている。



⑨首里城内のグスク=御嶽=拝所 2018年撮る ⑩今帰仁城内テンチジアマチジ御嶽=拝所 同2018年

祖霊神が来臨する小屋・神アシャギ 沖縄本島北部地方・中南部にある、ムラの祭祀小屋で、4本柱、又は6本柱の吹き抜け構造、床張りもなく、軒が低く腰をかかめて中に入る、茅葺屋根の寄棟造り様式である。神女たちが御嶽へ参り、御願や神歌を歌ったり、神酒のふるまいの小屋となっている。この小屋は神を招請して祭祀を執り行う拝所で、沖縄本島では「神アサギ」と呼び、奄美大島では「神アシャゲ」と呼ぶ。久高島では神アシャギを殿といい、ノロが神アシャギに入ることを「殿ヌブイ」(登り)と称する村もある。客を歓待し、神が天から降りて来る小屋をアシャギと言いい、神へ「アシー」(飲食物)を捧げ、歓待する小屋なので、その名称と思われる。



⑪沖縄県島尻郡伊是名村(島)の神アサギ・2018年 ⑫大湯環状列石の掘立柱建物は神アサギに酷似

⑪の写真は伊是名島（運天港よりフェリー）のアサギ拝所の写真、⑫の写真は秋田県鹿角市の大湯環状列石遺跡にある「掘建柱建物」（埋葬や葬送儀礼・祭祀建物）となっているようで、実に双方の建物がよく酷似しているのに驚くのである。

【神アサギについて「伊是名村の神アサギは伊是名島伊是名集落にあって、麦大祭(3月15日)、ウンザミ(海神祭・旧暦7月)、シヌグ(7月18日悪魔祓い、本島諸島では豊年祈願祭)の祭りがある。集落の主な祭祀に使用される建物で、構造は6本の石柱、四方壁のない茅葺きの小屋、軒の高さは約60cm、内部は約5坪の土間で、祭祀の時に蕙を敷いて座り、東側には神石（憑代の石）が置かれ、アサギ小屋へ神が来臨する小屋となる。」(おきなわ物語 WEB サイトより)】

古代の祭祀が残る久高島 古来より久高島は「男は海人、女は神人」と呼ばれている。琉球弧の伝統祭祀は、ムラ人の息災や自然災害から、ムラを守る祭祀、魂を鎮める祭祀の主役は女性たちが司り、古式の祭事が残っている最も典型的な久高島となる。祭祀を担うのは女性(30~41歳)たちで、ムラの男たちの守護神となって男を守るのは、女性たち「カミンチュ」なのである。この女性の神人が沖縄諸島の祭祀の原形となっていたと考えられ、琉球王朝以前の古代信仰から発した祭祀・祭事は、その祖型を伝えるものではないか。本土の祭祀は、多くが男性神職者に依って担われている事に比べ、何故、女性主体の祭祀が、琉球弧に残っていたのであろうか。太平洋に広がる島々は、外国の武力侵攻も受けず、他国からの宗教的影響を受けない地理的条件が保たれていたと思われ、つい最近までこの祭祀儀礼が残っていたのである。次は、その女性が「神人」になる神女就任式を見て行こう。

神女就任儀礼・イザイホー イザイホーは沖縄県南城市久高島で、12年に1度の儀礼が行われる。旧暦11月15~18日の4日間に亘って開催され、久高島生まれで育った30歳~41歳の既婚女性が神女になる就任儀礼となる。神女になるナンチュ(新任女)の加盟儀式に参列し、15日夕刻から始まり、⑬祭場の御殿庭(64~65頁)に集まり、髪を洗い、黒髪をなびかせて、白鉢巻きに白大依(ウフジン)を身にまとい、神女たちは神アシャギと呼ばれる中央の小屋へ、(女達は幸せを齎してくれる神の為に化粧する)登り「エーファイ、エーファイ」(畏れ多い)と掛け声を連呼し、7回庭を巡回、神歌(のりと)を歌い、神アシャギ小屋入口の橋(階段)の「7つ橋」を渡って森に入る。

この7つ橋にはタブーがあり、日頃の素行が悪い女性や、浮気とか、身もちの良くない女性は、この橋から落ちるといふ話もあり、神女に成れないとされる。「神女」になる儀礼の要件を満たし、全ての女性がこの儀礼を通過して、儀礼の最終日には東海の彼方からニライカナイ神を迎え、「神女」の資格とセジも得る儀礼なのである。



バインカンヤー

神アシャギ

シラタル宮

⑬



⑭

⑬久高殿は収穫祭・大漁祭・健康祈願等年間30余祭事殿。中央神アシャギに神が来臨小屋、シラタル宮（始祖神）バインカンヤー（海蛇燻製小屋）2018年撮る ⑭写真は七つ屋作り（女性の籠り小屋）

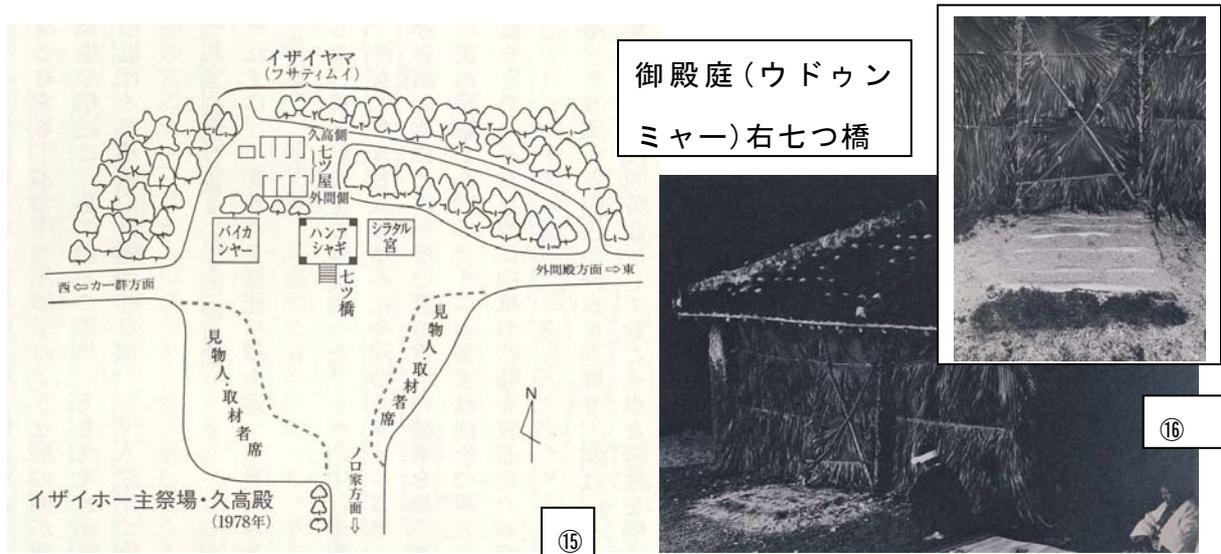
イザイホーに就任式儀礼の女性 全ての久高島で育った30～70歳の女性神女から就任式となる。初参加の女性ナンチュは30～41歳、ヤジク42～53歳、ウンサク54～60歳、タムト61～70歳（引退年齢）、年齢別に4階層で組織され、島の儀礼を司る4階層の神女たちが司る。久高島には「^{ふかま}外間ノロ」「^{くだか}久高ノロ」（ノロ=祝女）の以下に8人の^{くにかみ}国神と称される最高層のノロが、「イザイホー」の儀礼を仕切る。

「イザイホー」は（12年に1度）の直近の就任式は、1966年に戦後2回目の就任式が行われ、マスコミに大々的に報道されて全国に知れ渡った。1978年の「イザイホー」では、神職者の欠員で開催が危ぶまれ、最後の「イザイホー」になるだろうとの予測されていた。そのため、日本中の其の筋の関係者各位が千人余の来島し、シマ人たちの語る如く、1978年の「イザイホー」を最後にこの儀礼は遂に終わってしまったのである。では、次に1978年の儀礼を追って見る。

神女就任儀礼の儀礼日程 旧暦の11月15日初日は、夕神遊び（ゆくねがみあそび=先輩格のノロや神職者が初めて参加するナンチュを率いて御嶽を巡拝）、ナンチュ（新就任神女）の加盟儀式、夕刻、祭場の^{うどんみや}御殿庭に集結する。就任女性の掛け声、⑬「エーファイ、エーファイ」（畏れ多い）連呼しながら^{ウドウンミヤ}御殿庭を7回巡回し、白大衣（ウフジン）を纏^{まと}

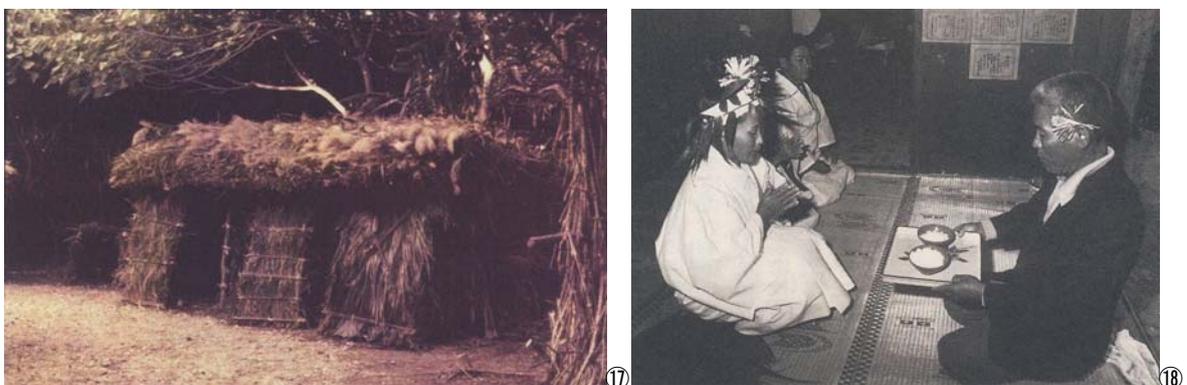
い、白ハチマキを締め、神アシャギ前にある「7つ橋」を7回^{みそぎ}禊ぎ渡る儀式を行い、^{つまづ}躓いてはならぬタブーを厳守して渡る。「橋」は「あの世」と「この世」を結ぶ架け橋となっているのである。

16日は、15日の夕より、⑭「七つ屋」(籠^{おこもり}は3晩)という異界空間に籠り、その小屋の中で、それぞれナンチュの祖母霊と一夜を過ごし、カシラタレ遊び(黒髪を垂らして祀る)をする。ナンチュ(新成女)たちは、昨日の夕夜の儘^{まま}の洗い髪に、イザイ花飾り(クバの造花)を付けて、テイルル(神歌)唱えながら、三重の円陣で旋回して踊る。



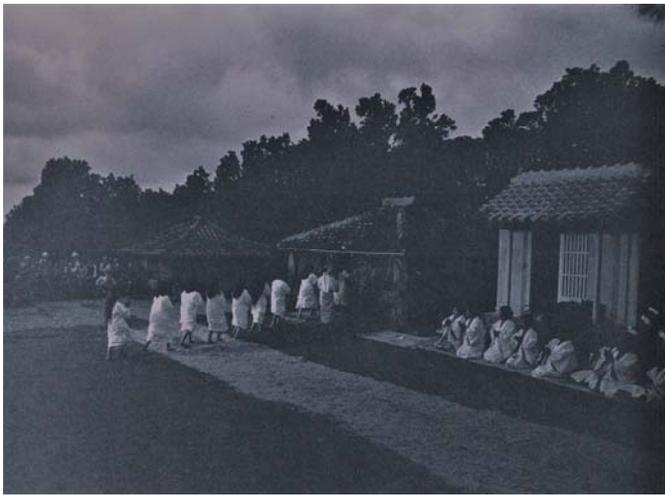
⑮久高殿御殿庭主祭場図、⑯七つ橋を渡り神アシャギに入る、入口に白砂で7段の七つ橋が架けてある

17日、午前には祖母霊と合体したイザイニガヤ(就任神女新人)が、守護力(セジ)を得て^{ナンチュ}成女となってこの世に登場して一人前の神女として^{タマガエ}認証を受ける儀式(朱付^{シユリイキ}=^{ほかまニীগ}外間根人ノロが^{ひたい}ナンチュの額と^{りょうほお}両頬に朱印をつける)となる。花差し遊びは、先輩ノロに率いられたナンチュは巻き髪、ハチマキ、ウフジン(白大衣)姿に扮装、イザイ花を付け^{テイルル}神歌を唱えながら旋回、ここで、ナンチュは先輩ノロと同等になるのである。



⑰神女の籠り屋(沖縄祭祀資料より) ⑱「ラナリ神」の妹に兄はサルマユ(粥の椀)捧げる『神々の古層⑤』

18日、早朝、ニラーハラー^{ようはい}遥拝後、祖母霊と合体し、霊力(セジ)を得た^{ナンチュ}神女は我が家に戻り、守護される者の象徴であるイシキヤー(兄)を上座に座らせ、頭にクバの葉の冠を被り、兄を守護する神女に変身したのである。妹は、兄から酒盃を受ける儀式(家まわり=アサンマーイ)を受ける。これで無事に守護霊を得た妹は、⑱「ヲナリ神」(写真 65 頁)となる。午後、イザイホー終了の儀礼「^{おけまー}桶回い」(ウケマーイ=桶神酒を振舞う)となる。桶回いの進行でイザイホー儀礼は、孫娘が亡祖母の霊威(セジ)を引き継いで、一人前の^{カミンチュ}久高島の^{おけまー}神女となった。桶回いは、樽に入った神酒を頂き、神を賛美する神歌を歌い、優雅な踊り奉納し、東方に扇を掲げてニライの神に拝礼して神酒を全員で飲む。ナンチュはクバの冠にクバの葉扇、先輩の巫女は太陽と鳳凰扇、月と牡丹を描いた扇を持って晴れやかに踊る。



⑱夕刻エーファイの掛声で七つ橋を渡る神アシャギへ ⑳神女は太陽と鳳凰の扇で踊る『神々の古層⑤』

【※久高島には「七」が神聖数となり、「七つ橋」「七御嶽」ナンチュが籠る「七つ屋」は神聖な信仰思想となる。イチャティオージ(絵描き扇・上の写真)の表に太陽と鳳凰、裏に月と牡丹が描かれ、中国伝来の図柄となる。久高島の祭具には唐風の影響が認められる。(『沖縄県久高島の祭り』古典と民俗学叢書V・桜井満編より)】

ヲナリ^{かみ}神信仰 「ヲナリ神」の成立は、イザイホーの儀礼によって執り行われる。沖縄地方に特徴として、兄弟を守護するは姉妹の霊威によって守る事をいう(宮古島を除く)。沖縄の神話・民話の伝承によれば、シマ(琉球開闢神話アマミキヨとシネリキヨが降臨)を創造した「神」は、一对の男女(姉妹)となっており、その関係は兄妹で、妹(ヲナリ)が、兄(エケリ)を霊的に守護神となるのである。妹のセヂ=霊の力で兄を守る信仰

が琉球信仰となる。兄の守護神となるのは妹(男性の血縁娘)で、神格化してそのよう呼ぶ。伝承話としては、妹が白鳥となって兄の命を救う説話や、ヲナリ神が海鳥・蝶・トンボ等に憑依し、旅先・出兵に際に兄の身を守護するのが「オナリ神」である。

この信仰は奄美諸島から先島諸島まで広くあり、唯一宮古島が希薄という。これ等の琉球民俗説話の研究者、伊波普猷が『おもろさうし』(首里王府編纂歌謡集、おもろ=思い、さうし=草紙)発表している。

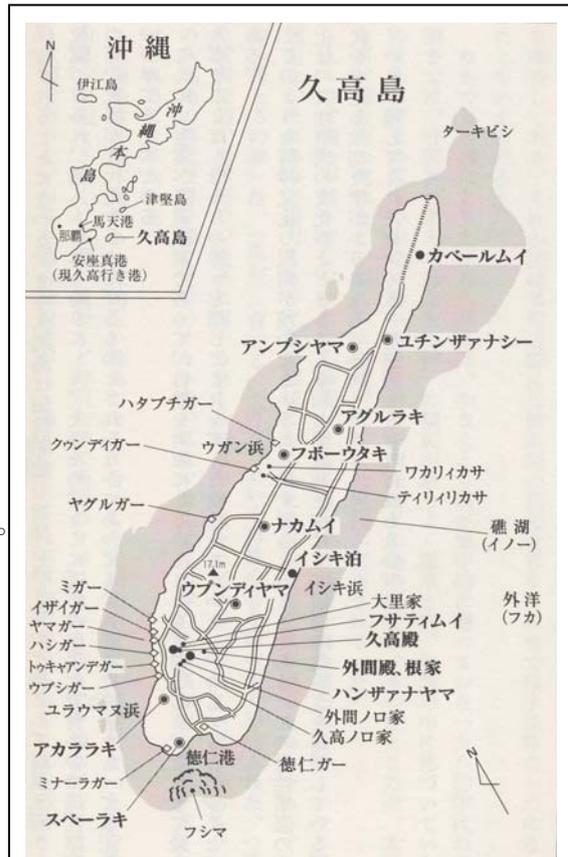
これを基に柳田国男、折口信夫等の民俗学の展開して行くのである。南島は女性の霊力が強く、妹のセジ=霊力で兄を守る信仰を「をなり神信仰」と呼び、因って、兄=男が社会を支配し、妹=女は男を守護して神に仕えるカタチとなる。先の大戦時に戦地に向かう沖縄の兵士は、血縁の妹から頭髪を貰い、出征した兵士は8割に及んだ話は有名となる。

兄妹の霊的な絆は、父娘よりも強いとされている。「をなり」はムラに於いてノロとして神の言葉を伝え、御嶽やグスクの御願所でムラの祭祀・司祭を仕切り、現人神の役を司るのである。

女性の古代霊力信仰・神話は、大和(本土)

を含め東南アジアに散見される。『日本書紀』垂仁天皇5年の冬10月の条、狭穂彦王の謀判事件の「狭穂彦王の反乱」(妹の狭穂姫命に天皇暗殺を試みるが失敗し、追い詰められ兄妹は稲城で自殺)は、兄妹の在り方が古代日本にも「ヲナリ神信仰」は、大和と琉球に共通した古代信仰を考察することができる。

嘗て、琉球王国の統治策として、国王の姉妹である聞得大君(第2尚氏代の最高神女ノロ)の宗教的庇護によって、国事が進められて来た。国事を治める地方領主の按司(豪族)に対し、最高位の女祭司祝女に権威を与え各村には草分けの宗家当主の根人(草分け宗家)に、妹はその権威を支える女性の根神(宗家の神職者)と成っていた。根神とは、沖縄本島・周辺離島の村落の草分けの家(根屋)、一門から選出された女祭司で、ニガミとも云い、一村落に1~2名いて、その下に居神・脇神など名称を持つノロ祭司がいて、

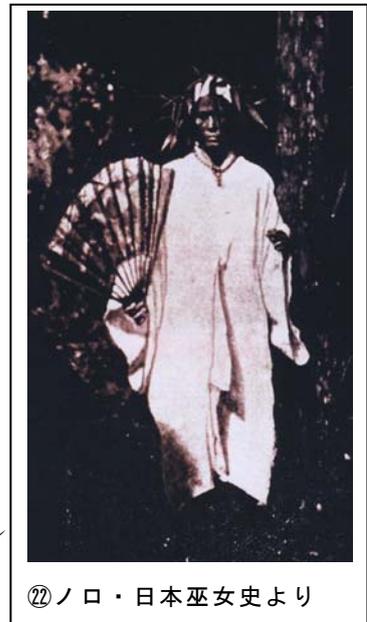


②久高島地図『日本人の魂の原郷5』より

村落の草分けの家の女子が代々御嶽の神事を司り、その兄弟がムラの創始者の後裔として村落の指導統治。後、薩摩藩の侵入により、「をなり信仰」は弱体化した。

日本古代信仰・祖霊の力と女の力 記紀、『古事記』『日本書紀』の活躍した人物の中で、第12代景行天皇の皇子、倭建命やまとたけるのみことのように魅力ある英雄はいない。しかしこの物語の背後には、古代日本を動かしていた2つの信仰が潜められている。即ち男に対して持つ女の力である。倭建命が難事に赴く際には、必ず道を枉げて伊勢に姨おばの倭姫命やまとひめのみことを訪ね、悩みを訴え、何彼と贈物を受けている。第1回の勅命ちよくめいには西国征討の際の衣装を贈られ、第2回目の東国遠征には、草薙剣くさなぎのつるぎと火打石の入った袋を贈られている。倭建命は倭姫から贈られた衣装を着て、女に化って熊襲を撃ち、相模野では焼き殺されそうになった時、剣で草を切り払い火打石で、向火むかいびを燃やし、敵を滅ぼす。姨おばと甥の両者の関係は、オナリ、エケリエケリの関係ではなかろうか。古代日本には同腹の女姉妹は、その男の兄弟に対して「オナリ神」という守護神になる信仰があった。男の兄弟は女の姉妹に対して、「エケリ神」となるが、その霊力は、「オナリ神」より遥かに劣るのであった。沖縄ではこの信仰は今も残り、本土でもその痕跡は見られる。（『山の神』吉野裕子著・序説、「倭建命伝承と日本古代信仰・祖霊の力と女の力」より）

ユタ (⑳・民間霊媒師・シャーマン) 「ユタ」は一般人には成し得ない霊界の姿や、動きを見通す事のできる霊能力者、と云われている。琉球巫女については、本土の神社の巫女みことは異なり、個々の家や家族に関する私的な呪術的な祈禱を行う、「シャーマン」の様子がみられる。家々のタタリや悪霊の祓いの祈禱等が強く、病気・死・事故等の混沌こんとん霊(悪霊・浮遊霊)を取り除く役目を果たしているという。目に見えない悪霊を感知し、混沌霊を憑依させる能力を持ち、年末年始・健康願・海難事故死の魂を鎮めて超能力を発揮して御祓いをするのが「ユタ」の身分となっている。



⑳ノロ・日本巫女史より

祖霊信仰とお墓 沖縄での大きな亀甲墓を見ると、墓地は「あの世」と「この世」の境界が墓であることが分かる。シマの人たちの想いは、あの世に居る先祖神は、こ

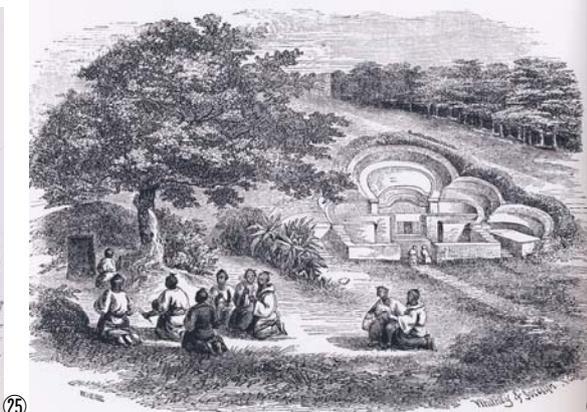
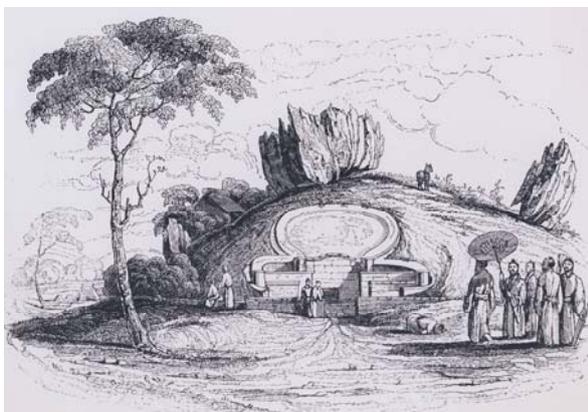
の世と同じ生活をしていると考えている。墓は現世と同じ住かの形態を備えていることが必要とされ、その思いが強く伝わって来る。この思想はアイヌ民と同じである。

鳥越憲三郎(民俗学者)は、「沖縄人の墓造りに関し、死後のあの世で快適な生活する観念から、大きな亀甲墓造を作ることに悦びの感情を抱いている」と推察し、死者があの世で安寧の生活が送れるよう、墓所に私財を惜しげなく投じていると述べている。沖縄諸島では旧暦4月5日頃、先祖祭の「清明祭・シーミー」^{せいめい}を伝統行事行い各家々の一番大きな祭りとなる。旧8月15日お盆は家族一同が揃い飲食を楽しんでいる。



②③伊是名島の亀甲墓 2018年写す ②④シーミーは墓前で先祖霊との重箱宴会・(恩納村ブログより)。「清明祭」は親戚一同が集まり、サンシン音に合わせ「あの世」と「この世」が魂で繋がる風景となる。

ペリー提督遠征記に亀甲墓が記録されている 19世紀紀行作家ベイヤード・テラーは語る「・・・この島では先祖の霊は大切に祀られる。丹念に仕上げられた豪華な墓が先祖を敬う心を示している。その墓は周りの風景の中で一際目立ち、実際、島に近づくと、沖から眺めた時は、白い墓はヨーロッパの街並かと思った。・・・(略)」とある。ペリーは、琉球民が墓前で先祖霊と飲食の宴を見て、この風景を記録させている。

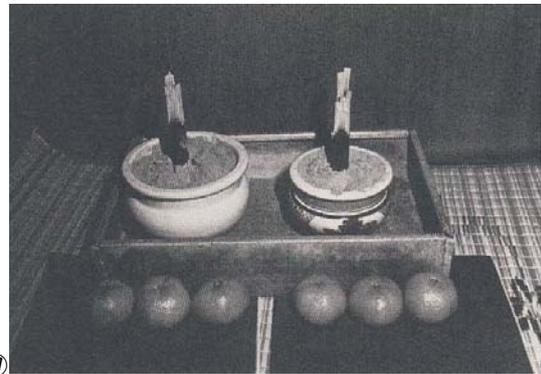


②⑤ビーチー航海記(1831年)木版画ウィリアム・スミス ②⑥ペリー提督遠征記「琉球墓のある風景」
(『青い目が見た大琉球』ニライ社より) 【※清明は二十四節気の第5目となる】

主婦が大事にする「火の神」(ヒヌカン) 祖霊神以外に人々の生活で大きく重んじられているのが、「火の神」である。長男が家系の位牌を継ぐ時は、ヒヌカンも一緒に引き継ぐのが慣わしとなっている。㉗「火の神・火ぬ神」は家の「かまどの火」を司る神様で、家全体を厄災やくさいから守り、日々の生活・家族の健康を守ってくれる神様である。ヒヌカン=カマド神は、南西諸島の民間信仰として脈々と受け継がれ、火種を嫁が実家から貰い受けてくる話や、婿の実家より受け継ぐ村もある。家内の祭祀は主婦が行い、家族の誕生・入学・結婚・離婚・死亡などの重要な項目は全て報告し、各月の1日と15日(ヒヌカンと仏壇位牌に手を合わせる)には飯、酒、花、水、線香を供える。また、離婚と火の神との関係は、嫁に来る時は、里方の灰を夫方のカマドに入れて、離縁の時は、夫方から灰を持ち出して、里のカマドに戻す。(『神と村』仲松弥秀著より)



㉗



㉘

㉗食煮炊き用の石3つ式のカマドが火ヌ神=守護神 ㉘ムトウ(血族始祖家)神の香炉=床ヌ神・「主婦の香炉」に主婦の亡祖母霊ウラテイジンが依り憑き、霊が選擇ようばいの機能を果たす。『日本人の魂の原郷・沖縄久高島』より

麦・粟の収穫儀礼には 久高島の麦・粟の収穫儀礼を見ると、縄文時代を彷彿する風景が見られる。正月は麦、5日は粟の豊作祈願に併せて、男子の健康を祈願し、3月の麦の収穫感謝し、6月は粟の収穫感謝に併せて女子の健康を祈願し、麦と粟を中心とした農耕生活の歴史を現代に伝えている。久高島にはアマキヨ(久高島創世神話)、シラター(口碑伝説集)神の名によって、穀類が齋された。その穀種は麦・粟・菽まめ(大豆・小豆)黍きび等であり、稲は含まれていない。1月中旬「麦の穂祭り」には碾割ひきわりにした麦を粥にしたマブッチ(麦粥)が供えられ、3月中旬マッティ(麦の収穫祭)には、麦のチチメー(つきまぜ飯)、6月マッティには粟のチチメーを供える。久高島は五穀発祥神話に、稲作儀礼は伝えられていない。創世神アマキヨ(阿摩美久)が久高島に五穀を蒔いた島と伝え、男は海人ウミンチュ、女は神人カミンチュとして島を守る生活の歴史が続いていた。(『沖縄県久高島

の祭り』桜井満より)久高島の⑳収穫祭ンバイのご膳写真と、秋田大湯環状列石・群馬県安中市東源ヶ原遺跡の土器を観察すると、久高島の収穫祭ンバイと同じ祭りが想像される。「ンバイの酒」は麦・米を持ち寄り神酒当番家はタルマミキ(麦米を炊き醗酵させた酒)を作る。



⑳



大湯環状列石



㉑

⑳収穫祭ンバイ・久高島の麦粟の収穫儀礼の麦米御膳、㉑大湯環状列石の土器と新掘東源ヶ遺跡土器を見ると「収穫祭ンバイ」の御膳と酷似。(写真右は大湯ストーンサークル館と安中市学習の森より)

南北に由来する沖縄の文化 琉球列島は大小2百の島々からなり中国や南洋諸島との関係も相対的に深く独特の文化を育んできた。稲作農耕が始まった弥生時代でも、沖縄では稲作を行わず、古墳時代に古墳を築かず琉球王国時代と独特な歴史を経ている。沖縄諸島よりも、南に位置する先島諸島から台湾やフィリピンの南方地域から文化を受けた歴史となる。(右図・沖縄国際大学・宮城弘樹著・平成29年大阪・沖縄「沖縄の旧石器人と南島文化」より)



南北に由来する沖縄の先史文化図

交易の貝の装飾品に使用された貝器



オオツタノハ貝輪は関東まで、イモガイペンダントは礼文島で発見

第5章 八重山・先島諸島の来訪神による奇祭

やえやま
八重山諸島・石垣島の奇祭

さきしま
先島諸島は宮古諸島と八重山諸島の総称であるが、

八重山諸島は石垣島を中心として、竹富島、西表島、小浜島、黒島、^{あらグスクしま}新城島、^{ほとま}鳩間島、^{ゆぶ}由布島、波照間島、^{かやま}嘉弥真島、与那国島など、12の島々からなっている。



① ^{みろく}弥勒の行列（八重山蔵元に置かれた蔵元絵師・^{みやらあんせん}宮良安宣1862-1931、叔父喜友名安信 1831-1892 らの画稿 114 点）。「ミロク信仰」とは「ミロク」が「ミルク」沖縄方言に変化したもの。八重山博物館より

【本画稿は、重要無形文化財「^{かたえそめ}型絵染」保持者の鎌倉芳太郎(名誉市民)が、大正 12 年に美術工芸調査で訪れた際、蔵元最後の絵師を勤めた宮良安宣から譲り受けたもの。蔵元絵師は、王府から送られてくる貢納布用の織物図案を写し描き、各村毎に割り振る下絵の製作等や、外国船や、漂着した乗組員・船型の記録を残した。本画稿は、近世末期から明治期に於ける八重山蔵元絵師の画稿がまとまった伝存の歴史資料となる。※「^{くらもと}蔵元」とは首里王朝が地方統治のために創設した政庁。※型絵染とは、模様の下絵を洩染和紙に貼り、切り抜く紙型紙作る】



② 八重山諸島の黒島の豊年祭り・コロカルニュースより

③ ミク口面・波照間島前村・八重山博物館より

弥勒信仰（ミルク信仰） 「ミロク信仰」とは、弥勒菩薩を本尊とする信仰となる。「ミロク」が「ミルク」沖縄方言に変化もので、即ち「^{みろく}弥勒」のことである。^{はてる}波照間島（日本最南端、人口 500 人弱）では「ミルク神」は女性とされ、子供たちはミルクの子供であると云われている。沖縄諸島に於いては、東方の海上の彼方に「ニライカナイ」から神々がやって来て、五穀豊穰を齎した創世神話の思想であるが、この思想にミロク信仰が結びつき、豊饒を齎す来訪神「ミルク信仰」が成立して、八重山諸島の豊年祭りとなっている。

ソーロン(旧盆行事)、アングマ(あの世の精霊) 八重山諸島の盆行事を「ソーロン」と呼び、「アングマ」の由来は不明だが、一説に姉、母、ガマは「～ちゃん」等の接尾語で、お面のことを指すらしい。また、無縁仏、施餓鬼の意味もあるらしい。

アングマは石垣島の四カ所の^{あざ}字（石垣、大川、新川、登野城地区に^{うたき}御嶽があつて舞踊奉納）を中心に行われ、氏族系のアングマと、村落のアングマの2つがある。アングマは、「ウシュマイ（^{おきな}翁）」と「ンミー（^{うば}姥）」が、「ファ（子孫）」と呼ばれる花子（ファーマー）たちを引き連れて、グソー（あの世）からこの世に現れ、新盆を迎える家々を訪問して、家族たちと珍問答を交わし、踊りなどで先祖の霊を供養する祭りとなる。

八重山の盆は旧暦で行われ、盆の3日間に家々を回って、仏前で念仏^{うたい}謡や踊りを踊って、先祖霊を慰めて歩く、精霊の団を「アングマ」という。^{グソー}後生からやって来たウシュマイ（翁）、ンミー（婆）の面を被った2人が先頭に、三味線、太鼓、笛、そして踊り手が20～30人程が連れ立って家々を回る。皆、手拭で頬かぶりをし、クバ笠を持ち、踊りの合間に翁と婆は、集まった観衆と問答形式で、^{ごしょう}後生(あの世)に居られる先祖霊の消息や教訓を面白おかしく説き聞かせる。



④



⑤

④アングマの面・翁と婆の面 八重山博物館 ⑤ソーロン・アングマは後生の^{せいれい}精霊・やいまタイムより

⑤アンガマ問答は次の様な漫才的な会話をする。

問・後生(グソー)の5か条を教えてください。答・①眼を閉じ、息をしないこと。②後生に来る時は必ず手足の爪を切り、逆水(さかみず)を浴びてこい。③寝る時は必ず西枕をすること。④必ず1人で来ること。⑤後生に来たらウシュマイとンミ(爺と婆)の命令に絶対服従のこと。

問・後生にも宗教はありますか、答、あるとも、仏教、キリスト教、ミンタマ教、マホメット教、カトリック教、それにラッキョウ、ウイキョウ(セリ科)、ウシュマイの度胸、ンメー愛嬌、信教は自由じゃ。

問・西枕の理由を聞きたい。答、生きた人間は、太陽が東から昇るので東枕をするのだ。しかし、後生では西から昇るので西枕にする。(やいまタイムより)

アンガマ(あの世の精霊)の盆行事に生まれる不思議な空間 「やいまタイムニュース」はアンガマの記事は次のように伝える。

「自宅の庭に人を入れ、家の内部を見ず知らずの大勢の他人に見せる。これ自体が珍しいことではないだろうか。その場所を舞台に、先祖とその家の家族と周囲の観客が一緒に楽しむ。仏壇を前に、大爆笑が響き渡り、笑いあり、涙あり、懐かしい人の面影を、大勢集まった場の盛り上がり、よりいっそう楽しい時間を生み出していく。人の家の仏壇の前で、そこには遺影が飾られ、供物があげられ、その親族が多数集まる家の一番座と二番座で行われる。そこに意気なり他人がドカドカと行列を作って入るのだから、こんな不思議な異空間はない。迎える家も戸が外され、外から見やすくされる。民家に三方から観られる舞台が作られ、庭に集まる人はご近所に限らず、アンガマを一目見ようと訪れる島人や観光客などで、家の周囲はみるみる黒山の人だかり。静かな夜半に待つことしばし、どこからともなく三線と笛、太鼓が聞こえてきたら、いよいよだ。家の人も集まった人々も、興奮して一行の入場を待つ」と伝えている。

石垣島の来訪神・⑥・⑦「マユンガナシー」 八重山諸島の石垣島^{かびら}川平(78頁地図)に伝わる^{せちえ}節祭(シチ・シチィ)に「マユンガナー」(^{まゆんがなし}真世加那志)という精霊祭り(旧暦の9月頃の戌戌・つちのえいぬ日)。「マユ」とは「豊かな真の世」の意があり、「ガナシ」は敬称で、併せて「^{まよ}真世の皆様」という意となる。石垣島ではマユンガナシーの「節

祭」が終わると、これを「初正月」と呼び、民俗学研究者はこれを「南島正月」（南島=南西諸島）と呼んでいる。マユンガナシーが登場するのは旧暦9月、南島では旧暦9月は稲作の刈り入れの時期が、1年の^{せつき}節気(二十四節気)の正月と考えられ、それは日本の古代に於ける1年の区切りに合致する。収穫の秋に1年が終わり、農作が再開されるのは節分以後の田植えの季節となるからである。石垣島では大晦日を「シツ=節」と呼び、旧暦9月、戌亥(いぬい)の日(新月の日)から祭りを始める。マユンガナシーに扮する男達は^{いぬ}戌年生まれと決まっている。クバの葉(ヤシ科^{ビロウ}蒲葵)を^{みの}蓑にして、手ぬぐいで^{ほお}頬かむりして笠を被り、顔は見せないで6尺棒を持ち、来訪神の出で立ち姿、始終無言(小浜島では「ホーホー」^{カンフチイ}歓声を上るとある)、^{カンフチイ}神詞(のりと)以外口にははいけないという厳格な掟がある。

このマユンガナシーは「マヤ」とも呼ばれ、マヤの神であり、マヤ=真世とは、ニライカナイと同じ東海の彼方の異界を意味する。マユンガナシーとはこの神の尊称で、「ムトゥ=本神」と「トウム=供神」の二者一組で祝言を^{カンフチイ}唱え、^{カンフチイ}神司と呼ばれ、夜半から明け方まで、家の繁栄と家人の健康を祝福して歩く。^{あけぼの}曙を迎えると、男達はニワトリの鳴き^{まね}真似をして、つまりあの世の神(祖霊)から、この世の人間に「^{ふか}孵化」して生まれ変わった事を知らせるのである。この行事(5日間の行程)での^{かみつかさ}神司の祝詞姿を絶対に見てはならない掟が秘事とされている。



⑥石垣島川平の^{かびら}節祭にマユンガナシー登場(1989年)⑦「ンー」と神声をだし顔を隠す『神々の古層6』

【来訪神とは1年に一度、決まった季節に人間界に来訪する神で、豊饒や幸福を齎してくれる神々となる。「まれびと」の民俗信仰も同様となる。2018年に、日本の来訪神行事10件がユネスコ無形文化遺産に登録されている。】

クバの葉(^{ビロウ}蒲葵)について ヤシ科の常緑高木。^{ビロウ}蒲葵はその幹の様相から、祖神の

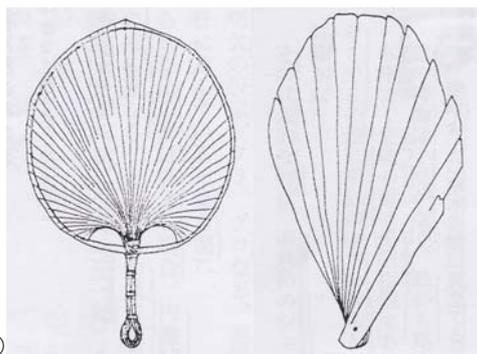
蛇に見立てられている。蛇の特徴は手足がなく、頭から尾まで一本棒で、全体の形は男根を連想させる相似で、この蛇に似たクバは神杵として信仰され葉は、繊維化して、蓑・笠・箒^{ほうき}などが作られ、祭りには祖神を象徴する祭具となる。蒲葵葉の入手困難な本土では、その代用として替や鬘が用いられる。本土では、杉・ヒノキの薄板でこの葉に象^{かたど}ったものを作り、これが本土の扇の祖で、扇の背後に潜む呪力は祖神としての蛇である。扇が出雲地方の古い神社のご神体で、扇が祭りの主役を演じ、ご神体となるその陰に濃厚な蛇が隠されているのである。（『山の神』星野裕子著より）



⑧



⑨



⑩

⑧クバの高木（#ピロウより） ⑨アングマのクバの葉扇 ⑩クバ扇と平城宮址出土の檜の扇図

来訪神マユンガナシーの由来

マユンガナシーは、石垣島北部地区(地図78頁)のなかすじ・ふかいのそこ・いぼるま・ひらくぼ中筋・桴海・野底・伊原間・平久保の各集落で明治時代頃まで行われていたが、現在では川平^{かびら}だけに残り厳粛に伝統が守られている。由来は次のようになる。

《・・・昔、仲間村の時代、節祭^{せちえ}(シツ)の日に身なりのみすぼらしい旅人がムラを訪れ、一夜の宿を乞うたが断られた。ところがムラの南端の貧しい家(南風野家)は、この旅人を快く泊めた。旅人が「他のムラは新年を迎えてに賑やかであるが、何故ここは淋しいムラなのか」と尋ねた。当家の主人は、「貧しくとも火と水さえあれば満足であると」答えた。夜中にふと主人が目覚めると、旅人は庭で神詞^{カンフチイ}(のりと)を朗々と唱えていた。主人は恐縮し、お茶を進めると、旅人は「実は私は神であり、天の神より人の心を定めて諸作物作りを授けるよう命を受けて来た。ここに諸作物作りの神詞を唱え授けたので、きっと幸福が迎えられるだろう。来年^{つちのえいぬ} 戊戌の日^{つちのえいぬ}に再来する」と言って姿を消した。

これ以後、南風野家は作物が豊作になり、約束の翌年の戊戌の日、夜間に立派な神が来訪し家運は益々繁栄した。ムラの人々は南風野家に豊作に不思議に思い、主人に尋ねて、「マユンガナシーの来訪神と神詞」を唱えた事を知り、ムラの人々も神詞^{カンフチイ}の

信仰を望んだ。3年目に来訪をムラ人に告げると、「村全部の信仰のために、神一人で全戸を回って神詞を朗唱はできない。己の目的は果たしたので、来年から来訪しない。その代わり神の代理として、戌年生まれを元(血族の始祖家)にして、ムラ人組で毎年各戸を訪問し、神詞を唱える事。戌年生れの元により神詞三句を朗唱し、後に杖を突き「シー」合図で、家々を回るようにせよ」と言われた。当主は、お米作った餅を神の島へのお土産に差し上げた。天使も満足して姿を消した。

そして、翌年から、神の神詞朗唱で「フュー、マーユー」(世界報・五穀豊穡の言葉)と神詞を捧げたのである。各戸家々の最初に訪れるのは、上村が南風野家、下村が多田家の両家はマユンガナシーに最初に遭遇した起源の家である。訪問家では当主が正装して迎え、マユンガナシーの「シー」の声に「ウー」と畏まって応える。マユンガナシーは6尺棒にもたれながら神口を唱える。神口は普通の声ではなく、唸るような声で神の声を発し、一節唱え終わるごとに、主人は「ウー」を発する。神口の内容は、農作物豊作、当家の無病息災、長寿、牛馬の繁殖が唱えられる。(『神々の古層』「川平・上の村由来」より)



⑪



⑫

⑪有形民俗文化財・マユンガナシーの面・八重山博物館 ⑫川平村宮鳥御嶽「keep out 許可なく立入を禁ず」とある。2019年3月に、川平村へ現地視察に訪れたが、境内には威圧があるので入らなかった。

【マユンガナシは、ニーラスク(ニライカナイ)と呼ばれる神の国からの来訪神で、村々に豊年・幸福を齎す神として信仰された。マユンガナシの面は1対で、夫婦だと云われている。デイゴ材で彫刻され、目と口の部分には黒蝶貝がはめ込まれている。伊原間村(現在は中止)のフタナカ(旧村)村のものと伝わる。(伊原間公民館所有・八重山博物館より)】

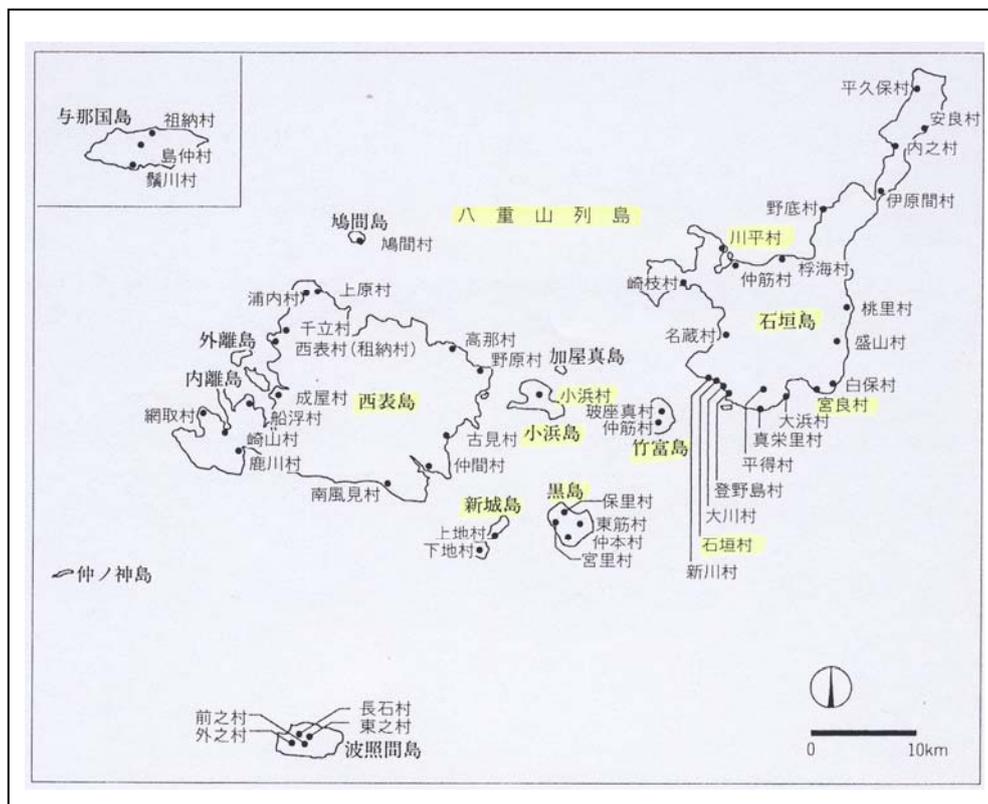
川平村の宮鳥御嶽(⑫の写真) 有形民俗文化財・拝殿は昭和12年に建てられた建物。右側に祭壇が設けられ、「沐陰」の扁額が掛けられている。この御嶽は、川平のみならず八重山の民間信仰の伝統的な建築様式となっている。(八重山博物館より)

川平村では「御嶽」を「おん」と呼んで、御嶽の「赤イロ目の宮鳥御嶽」の解説板は次のようにあった。

《この御嶽（おん）は、別名ア－ラオンとも呼ばれ、^{ンニブシイオン} 群星御嶽、^{ヤマ} 山川御嶽、^{キフア} 浜崎御嶽と並んで川平村の^{ユ－ヤマ} 四嶽の一つに数えられている。川平村の年中行事は、この四嶽を中心に行われ、中でも川平村の雨乞いはここで行われる。また、この御嶽の豊年祭は、境内の一角に祀られているビツチュル（カーラ石）と呼ばれる俵形の石を担いで境内を廻る儀式が行われる。『八重山島由来記（御嶽々名由来記）』に御嶽の神名は御嶽名と同じで、名は「まかこ大あるじ」と記述されている。

また、川平村では「牛馬による農作物の被害を避けるため、農作物保護役の野夫佐や馬夫佐へ監視させ、その結果を神司が毎月石垣村の宮鳥御嶽へ行き、同御嶽の神司を通じて神に報告する習わしであった。当時の神司がその繁雑さに同情し、宮鳥御嶽への御通しとしてこの御嶽は創られた」と伝えられている。この御嶽は、鳥居・^{オンヤ－} 拝殿・イビ門・イビを東西に直線的に配置し、神庭はイビ門前の広場・拝殿のある広場・下段の広場と高低差によって三段になっている。・・・(略)》とある。

【イビについて、御嶽の中心はイベまたはイビと呼ばれ、自然石が置かれ、神の憑代とされている。第4章、P54では、イビとは「神霊の憑代に香炉」説明してある。】



⑬・明治期の八重山諸島の集落地図・『琉球民俗の底流』吉成直樹著より

八重山群島に現れるのはアカマタ・クロマタ(⑭写真) 八重山群島にはアカマタ・クロマタの豊年祭に登場する来訪神がやって来る。西表島東部の古見を発祥として、小浜島、石垣島宮良、新城島の上地島に伝わる祭りである。西表島の古見ではアカマタ・クロマタ・シロマタの3柱となり、地区によりアカマタ・クロマタの2神の所もある。アカマタ・クロマタという名はアカウムティ(赤面)・クルウムティ(黒面)に由来し、西表島の古見の村では、旧暦6月の壬午(干支の19番目)の日に行い、豊年祭(プール)には、アカマタ・クロマタ・シロマタの異形の来訪神が、村人たちの豊作を齎す神々として各家々を回る。クロマタは親神で、アカマタ・シロマタは子神と見られ、各子神を連れだつて3組の神々が登場する。

民俗学者の折口信夫はこの怪物たちを「マレビト」(来訪神)と呼び、村人にとってはオドロオドロシイ魔物であるが、実は村人たちに福を齎す「マレビト」なのである。部落の人々は仮面の仮装者を迎え、団員以外の村人や観客は軟禁状態して、神を畏怖して決して直視させない。神の出現は中頭を下げ祈願するので、神の様相は分からないことになっている。古代に於ける神々は、時には我が儘で凶暴、立てつけば祟る存在で、実際に祭りに登場する「マレビト」はヒトを襲うこともあり、襲われた人はやがて幸や福を頂く。上地島の豊年祭(旧暦6月)開催の注意事項の看板が4項の厳重な禁止令(おふれ)が出る。

◎カメラ等の撮影禁止。◎祭詞、歌の録音禁止。

◎スケッチ等の禁止。◎夜間部落外への行動及び単独行動禁止、の4項目となっている。

厳しい注意項のおふれは、昭和43年に、新城島・あらぐすじま・上地島・はてるまじまにおいて、祭り見物部外者を島民が集団暴行する事件が起きている。昔は発祥地と言われる西表島の古見村のほか、新城島の上地、小浜島、石垣島の宮良村で見られたという。



⑭八重山群島のアカマタ・クロマタ・シロマタ(新城島)

アカマタ・クロマタ仮面来訪神は秘密結社的の祭り 縄文後期に起源を持つともいわれ、東北秋田のナマハゲに至るまで、秘密結社的な性格を持った来訪神が存在し、それが祖霊崇拜・祖先崇拜の信仰に結びついている。アカマタ・クロマタの祭りを演じる男たちは、「ギラヌム」(祭祀集団の初年者をウイタビ、2年目をマタタビ、それ以後の

者をギラヌム)という男性秘密結社に属し、祭りの仮装方法を秘密として、他言を厳しく固く禁じられている。入団者は仮装神に関する秘密事項、神の由来・伝説・歌も祭礼時に伝授され、団員と^{いえど} 雖も他言は厳禁となっている。アカマタ・クロマタを演ずる若者は、命懸けの誓いを立てて神事を行うというのである。

【補足・この祭りは、神と神を祀る者から成り立つ。祭りに関わりない俗人が、聖域に入って祭りを汚すのを恐れている。1年の稔を齎す神の祭りは村人には生きる行為であり、俗人の侵入は村人の生きる事への冒瀆であり、侵犯である。『沖縄の民話と他界観』丸山顯徳著より】

アカマタ・クロマタの異形姿 無足のクロタマ来訪神のいで立ち姿図を探していたら、下記のような由来譚が出てきた。私見として、南西諸島の「海神信仰」を国立民族学博物館研究報告別冊・下野敏見著に理解できる部分を要約で紹介したい。

《薩摩南部指宿市尾掛の「ムスドゥン」(⑮^{むそく}無足明神)に、旧暦10月15日の祭礼日に「無足舞」といって、長刀舞い、剣舞い、鬼神舞いの外に無足、即ち足の無い者に扮した一人が、いざりの如く進む舞いが行われていた。この舞い手は、渚から山を巡り神木の前に立ち、柴竹で神木を作り、体に綱をかけて舞う。無足舞いは、無足の者が海から上って来て、神木に^{まと}纏いつく様子を、芸能化した演劇的神事ではないか。根本は蛇神信仰(浜に漂着したウミヘビ)で海辺から現れることから竜神信仰であるとう説となる。》



⑮無足明神

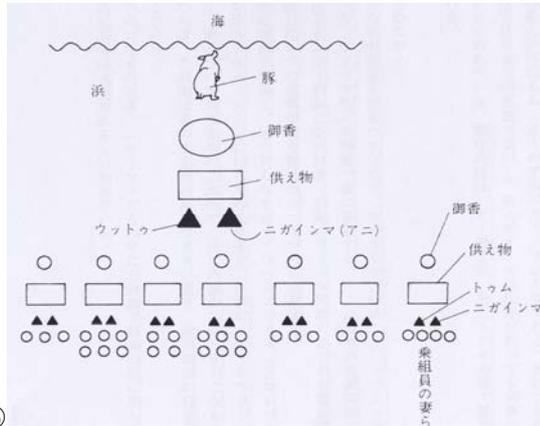
アカマタ・クロマタの写真容姿を想像すればこの辺に由来はあるかも知れない。

先島諸島・宮古島(リューキューヌカン=龍宮神)の祭り 宮古諸島は沖縄本島より300 km離れ、宮古島を中心に伊良部島、下地島、池間島、大神島、来間島、多良間島、水納島の8つの島々からなる。宮古島のヒダガンニガイ(浜神願い)の司祭者は池間島は漁業従事者主体からなり、参加者は海に関係している人たちとなる。祭司者は、ユークインマ(50～55歳の主婦が担う神職)を退職した主婦の中から籤で選出され、姉ンマ、^{ウツトウ}妹ンマの2人である。2人をニガインマと称し、任期は3年で、供え物は、豚1頭(参加者で購入)米・塩・タコ料理・小壺に入れた酒・御香を供える。午後4時頃、浜に参集し、青年たちは豚を担いで来て、ニガインマの前に頭部を海に向けてころが

す。豚の耳を起点に砂浜に円を描き、耳の所に^{わず}僅かに円線が切れている処が、その部分は竜宮へ通じる入り口を意味し、豚は龍神への捧げ物(生贄)となる。直径1mの^{だい}大御香炉^{おこう}に火がつけられ、御香の煙の中で合唱し、神詞を唱え祭祀は進行する。祭りの終了後、犠牲の豚は男たちがその場で屠殺し、その肉は参加者に分配される。



⑩



⑪

⑩丸円は龍宮神を誘導する印線、中心部に犠牲豚を置く。 ⑪図は浜の祭り模様図、豚は儀礼終了まで生かされ、終了時に屠殺する。1975年 『神々の古層10』海の神への願い・宮古島より

宮古島の「パーントゥ」(世界文化遺産に登録) パーントゥは宮古島南部の上野地区にある野原に出現する。この「神々がパーントゥに姿を変えて、^{ムトウ}元(草分の氏神を祭る家)の祭礼に現れる」。旧暦5月末から9月吉日の年に3回開かれ、悪魔祓いの奇祭となっている。3人の神様に扮した「パーントゥ・プナハ」は、逃げまどう見物客に泥を塗りとぐる祭りで、1993年に重要無形民俗沖縄文化財に指定されている。パーントゥの正式名称は「パーントゥ・プナハ」といい、悪霊祓い・無病息災の儀式で、宮古方言でパーントゥは「鬼や妖怪」、プナハ「悪霊祓いの祈願祭り」となる。百数十年前、島原地区海岸にクバの葉に包まれた仮面が流れ着き、その仮面を被った若者が神聖な井戸の泥を全身に塗り神様になったというのが起源という。



⑫

⑫パーントゥ(八重山博物館より)



⑬

⑬泥塗の厄払いに歩き廻る、宮古毎日新聞記事より

【親パーントゥ、倅パーントゥ、子パーントゥ3人が村人を追いかける。親は子供の健やかな成長を願ってけしかける。衣服も顔も泥だらけ。旧暦9月、日程は直前まで不明とか。】

泥塗パーントゥの伝説は その昔、島を上げてのお祭りの日に、島尻の海岸に異様な形相の仮面が流れ着いた。神女によりこれは来訪神だというお告げがあり、この仮面を元に、更に2つの仮面を作り、合計3体のパーントゥが誕生した。厄払いの方法は仮面を着け、蔓草つるくさのシイノキカズラ(ツル性の常緑低木)を纏い全身に泥を塗って、パーントゥに扮した青年3人が、人や家屋に泥を塗りたくる。この泥は「ンマリガー」(産湯に泉の水)と呼ばれる泉の底から取るもので、ものすごい臭気を放し、泥が乾けば泥を塗りなおしてパーントゥは人を追いかける。泥を塗られると無病息災が訪れるといわれている。(宮古島市総合博物館より)

鹿児島県島悪石島に現れる来訪神「ボゼ」祭り トカラ列島の悪石島あくせき十島村としまむらでは、独特な風貌の仮面神「ボゼ祭り」が旧暦の7月16日、お盆の締めくくりに「ボゼ」が現れる。ボゼには3名の若者が扮し、赤土と黒泥を塗り付けた仮面を被り、ビロウの葉を巻き付ける。手にはボゼマラと称する男根の杖を持ち、夕方太鼓の音に導かれ現れ、女性は子宝に恵まれ、来訪神は村人の穢れを祓ってくれる神様である。

薩摩硫黄島のメンドン・鹿児島県三島村の硫黄島(黒島の右側)に伝承される。メンドンは、蓑みのを纏い、頭にデコと呼ぶ籠かごに紙を貼り、奇怪な面を被る。手にスッベと呼ぶ枝葉を持ち、太鼓踊りする。手に持つ枝葉で叩いたりするのが、これが悪魔祓いとなる。この行事は夏の節目に現れ、人々の災厄を祓う。旧暦の8月1日、2日に現れる。



⑳



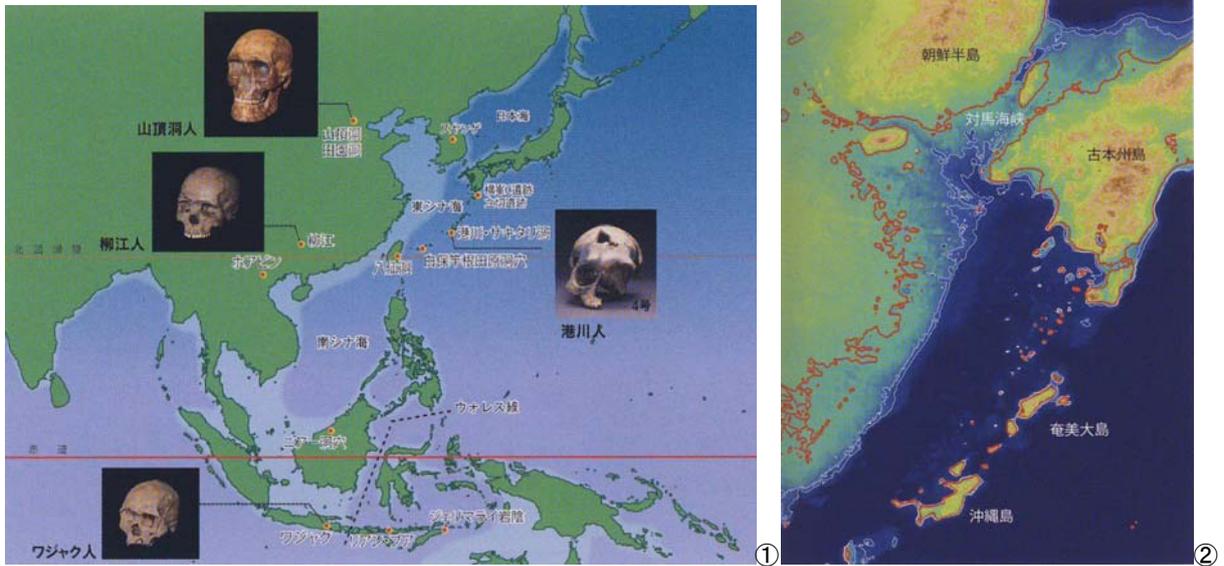
㉑

⑳ 悪石島の来訪神ボゼ(鹿児島観光サイト)。

㉑ 硫黄島の来訪神メンドン(無形民俗文化財・九州より)

第6章 琉球列島の化石人骨

新人=ホモ・サピエンスは東へ、東へ、そしてアジア大陸東縁へ到達した



①東アジア・東南アジアの旧石器時代の新人遺跡

②最寒冷期の九州・沖縄周辺の地形

「沖縄の旧石器人と南島文化」大阪府立弥生文化博物館・沖縄県立博物館・美術館・平成29年度より
後期旧石器時代に於ける最寒冷期(②約2万年前)海水面は凡そ100mほど低下が推測、右図(100m海面が低下により大陸が成長)は、琉球弧の島々は大陸との陸続きの地形ではないが、人類が古本州に到達するには、海を越えなければならない訳で、この時代の人々は、渡海能力も獲得していたと思われ、移住した島々での食料調達しながら、一定の男女数が渡来する事によって、琉球弧の歴史は発展したのである。①と③
人骨・新人ホモ・サピエンスの顔形が分かる新人化石として、周口店(北京南西)で発見された山頂洞人^{さんちょうどうじん}や中国南部(広西壮族自治区)の柳江人^{りゅうこうじん}、ジャワ島中部のワジャク人が知られている。沖縄の港川人^{みなとかわ}(③右)も同等の貴重な人骨化石の一つで、港川人は、柳江人やワジャク人との類似が指摘され、南方に起源をもつ人類だと考えられている。



③左から山頂洞人(中国北部)、柳江人(中国南部)、ワジャク人(ジャワ島)、

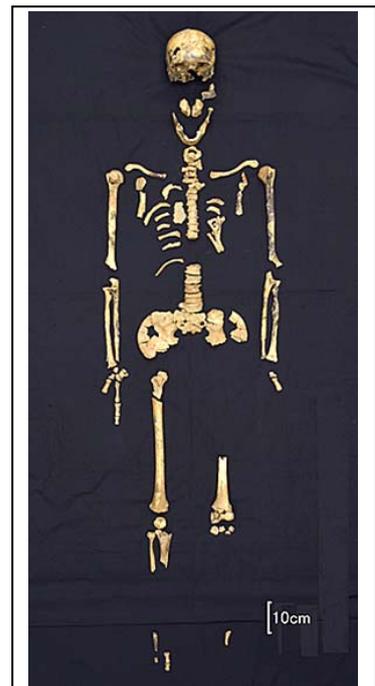
港川人1号(沖縄)

石垣島で世界最大級の人類遺跡発見、^{しらほさおねたばる}白保竿根田原洞穴遺跡を見る

沖縄県埋蔵文化財センターが2012年度から16年度迄の5年間、石垣空港の敷地内にある白保竿根田原洞穴遺跡を調査した結果、発見された人骨の内1体が国内最古の約2万7000年前の④人骨の全身骨格であることが判った。ほぼ全身骨が残され、葬られた時の姿勢も明らかになり、同センターは「これまで判らなかった旧石器時代人の葬法が判り、国内初の例だ」と発表した。遺跡は世界的に見ても最大級の旧石器時代人類遺跡と結論づけた。

同センターが発表した同遺跡は2009年建設工事中の石垣空港の敷地内で発見された。考古学や人類学、地質学等の専門家からなる調査指導委員会が調査方法等を検討し、調査を進めた結果、1000を超える人骨片が発見された。

出土した19体の人骨の中で「白保4号人骨」は、推定身長165・2センチの成人男性、国内唯一の全身骨格となり、港川人より5000年も古く、約2万7千年前のもので、日本国内で最も古い旧石器時代人の顔を知ることができる貴重な資料となったのである。



④白保竿根田原洞穴遺跡より発見の旧石器時代の人骨「白保4号人骨・2万4千～2万年前」県埋蔵文化センター



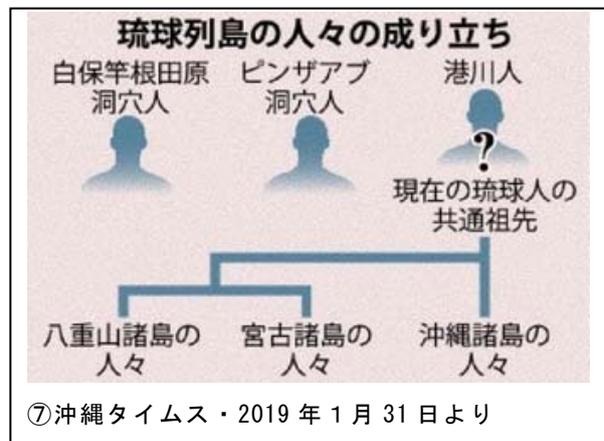
⑤^{しらほさおねたばる}白保竿根田原洞穴遺跡地図（石垣島空港内）⑥同遺跡発掘調査風景・『沖縄の旧石器人と南島文化』より

現在、デジタル技術を用いた頭蓋骨復元が進められ、港川人以来となる更新世人類を再現できる可能性が高く、また、骨の位置が解剖学的位置関係を保っていたことや、骨にネズミの仲間がかじった歯形がついていたことなどから、遺体は地中に埋めない「風葬」であったことが明らかになった。人骨の位置は、両手両足を強く屈曲させ、

仰向けの姿勢で葬られており、人の手で葬られたことは確実に、同遺跡が葬送の場所であったことを決定づけた。(八重山毎日新聞・2017年05月20日記事より)

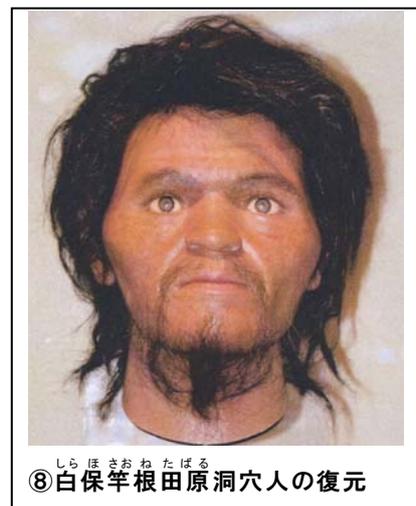
琉球弧の人の成り立ち・⑦絵図 石垣市盛山東牛種及び白保竈根田原の長大な鍾乳洞で発見された洞穴遺跡は、2010年、遺跡から採集された人骨3点からコラーゲンを抽出し、放射性炭素年代測定の結果、旧石器時代に遡る年代値(20,416BP, 18,752BP, 15,751BP)が得られたことから、科学雑誌 *Anthropological Science*(日本人類学会機関誌)で発表された。これは、旧石器時代の石垣島に人類が到達していたことを示す重要な科学的証拠となるものである。今回の発見によって、それまでの出土より、約1万年も前には、人類が石垣島に到達していたことが明らかになった。

右図、琉球大学大学院医学研究科の佐藤丈寛博士研究員らによる、英国に拠点を持つ分子進化学の国際専門雑誌「*モレキュラーバイオロジーアンドエボリューション*」の電子版に掲載された。研究では沖縄本島、八重山、宮古の各地から350人のDNAを採取、1人当たり50万カ所以上の塩基配列の違いを分析した。また、宮古・八重山



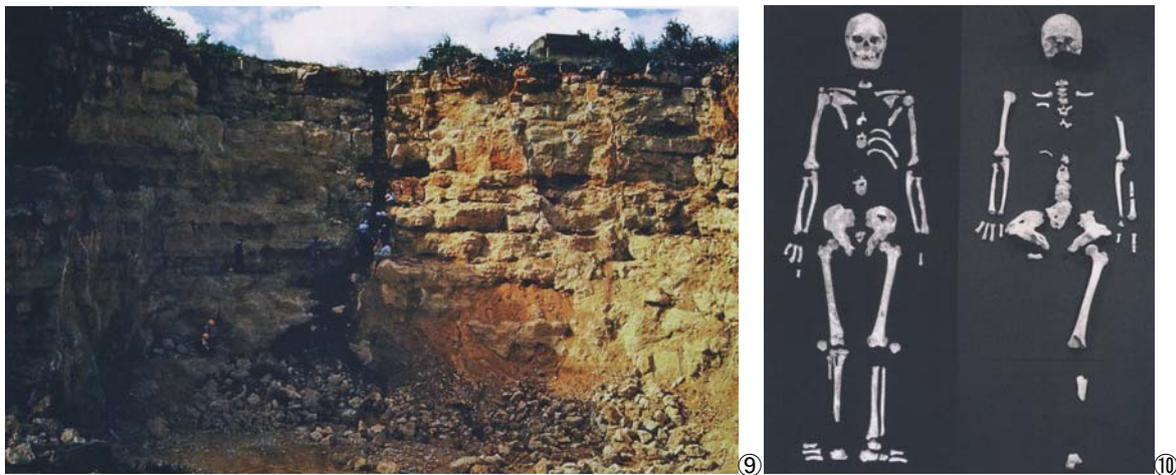
諸島の人々の祖先がいつごろ沖縄諸島へ移住したのか検証したところ、数千年～最大でも1年以上遡ることはないとの結果が出た。因って、現在の人々の直接の祖先なのか関心と呼んできたが、結びつく祖先ではないことを示しているという。

旧石器人は南方系の顔つき 全身骨格は手足を折り曲げて葬られた姿勢であることから、この男性の頭骨からは、日常的な冷水の刺激にさらされていたのか、外耳骨腫が確認された。長年海に潜り漁をしていたのではないかと推測された。白保竈根田原の旧石器時代の人骨は生前の顔が⑧デジタル復元され、南方系の人々の顔付きに近い事が判った。沖縄県立埋蔵文化財センターや、国立科学博物館の専門家で作る研究グループに依



りデジタルデータを基に頭部を復元から、30代から40歳前後男性とみられ、4号人骨を、3次元プリンターで肉付け作業した結果、鼻の付け根が落ち込む彫の深い顔立ちが現れ、中国南部や東南アジアの古人骨や、後の縄文人と似ていることが確認できた。アフリカを出発した新生人類が、日本列島に到達したのは4万余年ほど前、石垣島新空港建設に伴って発見され、人骨バラ骨は千点余りが出土したが、まとめられる人骨は19体、世界屈指の規模となった。(沖縄県立埋蔵文化財センター移動展より)

港川人の発掘状況 しまじりぐんぐしかみそんみなとかわ 沖縄県島尻郡具志頭村 港川(現八重瀬町字長毛)川採石場で発見された。⑨港川フィッシャー(岩の割れ目)から、せいほ 大山盛保氏が1968年1月に最初の人骨を発見し、この人骨は「港川人」と呼ばれ、人骨化石は4体、マチナト石灰岩(石灰岩の堆積土)の岩の裂け目から、動物の化石と共に発見された。年代測定の結果、人骨年代は約1万8千年(BP・年代測定、風葬の化石人骨)前のものであることが分かった。この年代は旧石器時代に属し、全国に同じ時代の遺跡から1万カ所以上発見されているが、化石人骨の形態が分かるのは「港川人」だけとされてきた。



⑨港川フィッシャー遺跡・港川人骨 ⑩1号男性(40歳位)、右2号女性(『発見への情熱』沖縄博物館)

⑩港川人の男性身長は約153cm、女性で約145cmと推定され、現代人に比べると小柄で、上半身はきゃしゃ華奢ながらだいたいこつ大腿骨など脚の骨はあししっかりしている。森の中を歩き回る、狩猟採集の生活を送っていたことが伺える。港川フィッシャーから掘り出された人骨は、世界的に見ても第1級の人骨化石となり、港川人は何処から来たのか、近年の研究からは顎の骨はきゃしゃ華奢、縄文人とは異なるオーストラリアの先住民アボリジニと特徴が似ていることも判ってきた。このことから、東南アジアで活躍していたグループが、琉球列島へ渡った港川人と、オーストラリアへ渡ったアボリジニがいたと

考えられ、港川フィッシャー遺跡は、約2万年代を考慮すれば、港川人は旧石器時代のホモ・サピエンスということになる。(※この記事は、白保竿根田原洞穴人が発見前の記事となっている。)

港川人頭骨について 鈴木^{ひさし}尚(人類学・解剖学)先生は、主に頭骨について⑪左港川人と⑫右縄文人がよく似ており、両者は近い関係にあったと考えている。旧石器時代に日本本土へ渡って来た集団も、港川人と同様の集団であったと推定、港川人が縄文人の祖先を代表できると見なしている。この考えは、埴原^{かずろう}和郎(人類学者)氏や馬場^{ひさお}悠男(人類学者)らの人類学者に受け継がれ、最近では見直しの動きが強まっている。それは、海部陽介氏(人類進化学者)らは、下顎骨の詳しい分析を行って、男女に共通した明確な違いがあることを示した。また、CT画像の分析を通して港川人の歯根が縄文人よりも長い傾向があることを発見した。

このような理由で、港川人は縄文人と直接関連は無かった可能性が浮上し、両者を繋ぐことは、人類の移住史の複雑性を示しており、現時点ではよく判らない状態が結論のようである。港川人は何処から来たか



の間に、両頭骨両者を比較すれば、中国北部の山頂^{さんちやうどうじん}洞人よりも、ジャワ島のワジャク人とよく似ている。こうした理由で港川人の祖先は、東南アジア地域の可能性も浮上する。港川人は南方起源説に新しい解釈を加え、それは5千年以上前の東南アジアに、現在のオーストラリア・アボリジニとよく似た集団が広く分布しているので、港川人の下顎骨を考慮すれば、この集団に由来する可能性が高いと考えられる。

港川人はどのルートで琉球弧へやって来たのか 朝鮮半島説、中国大陸から舟で渡って来た渡海説、当時の寒冷による陸橋^{りっきやう}説は、この地域の海底地形や生物地理などの多くの証拠から、陸橋は存在しなかった明らかになっている。因って、港川人の祖先は、何らかの舟で海上移動をしていることになる。それは驚くことではなく、ホモ・サピエンスは4～5万年前頃に、舟でオーストラリアへ渡っており、海で漁をしていた痕跡も見られるので、琉球列島への航海の証は、山下町第一洞穴(旧石器時代、山下洞人の人骨出土)の事例を考えれば、3万年以前に於いても可能であったことを充分考

えられる。従来の復元の港川人は、縄文人の祖先という前提があって、“日本人らしい”顔つきに復元したが、今回の復元では、顔のシワや瞼を変更して少しアボリジニ的な要素を加えている。港川人は日本人の起源を探る目的で研究された経緯となり、港川人はホモ・サピエンスの世界拡散史を探る上で、重要な資料になっている。

(参考『発見への情熱・大山盛保誕生 100 年記念』2012 年沖縄県立博物館・美術館より)



⑫左新たに復元された人骨 右従来のモデル

⑬従来の港川人

⑭新たに復元された港川人

ハイサイ人類学より

やましたどうじん 山下洞人 山下洞人は、1968年に沖縄県那覇市山下町の第一洞穴遺跡から発見された。旧石器時代の化石人骨が出土、人骨は8歳位の女兒のものと思われる大腿骨、脛骨、腓骨各1本が見つかった。放射性炭素年代測定の結果、約3万2千年前の更新世(洪績世・氷河時代)後期であることを示し、現生人類の人骨であることが判り、日本国内では最も古い化石人骨である。



山下洞穴遺跡出土斧刃状鹿角器

ピンザアブ洞人 ピンザアブ洞穴は、1974年に沖縄県宮古島市上野豊原にある洞穴で発見された約25800～26800年前(旧石器時代)の化石人骨となる。「宮古ゆったり生活」のブログによると、島言葉でピンザ(ヤギ)、アブ(洞穴)の意で、南琉球圏のピンザアブ洞穴から発見された。洞穴人は



ピンザアブ遺跡・宮古島ゆったりより

北琉球圏から発見された更新世化石人骨群、山下町洞人、港川人、下地原洞人、ゴヘズ洞人(本島本部半島北西)等と深い関係にあると推測され、それらは周辺地域から琉球列島に渡来してきた「旧石器人」の移住・拡散行動の一連の行動資料となっている。

しもじばらどうじん
下地原洞人

1978年～1986年調査。下地原洞穴は、沖縄県具志川村（久米島）字具志川北原下地原の洞内に存在する。年代測定の結果、約1万5千年～2万年前のものであることが判明した。洞穴は久米島の最西端に位置し、空港の北側の中位段丘面（標高約40m）の下にある。発見当時は、岩陰には「風葬墓」が形成されおり、使用された^{ずしがめ}厨子甕（骨壺）が洞穴入口に散乱し、洞内には人間が隙間から入れる状態で、この洞穴は中央部で屈曲し、南東隅の洞口から陥没ドリーネの底部に開口し、延長約100m、洞幅2m～20m、天井高2m～8mのドリーネにつながる大洞穴の風葬墓となっている。



⑮久米島・^{しもじばらどうけつ}下地原洞穴遺跡・[PDF: 4MB]久米島町 ⑯国頭郡伊江村（島）^{いえそん}ゴヘズ洞穴・伊江村役場より

ゴヘズ洞人 伊江島空港（国頭郡伊江島村）の西、ゴヘズ山（標高82m）にあることからこの名付く。洞穴は直径2mの入口から地下へ広がり、複雑に奥へ伸び、奥行き35mの下洞と続いている。昭和50年からの調査では鹿の化石、叉状骨器、人骨や貝殻などが出土し、鹿の化石は、リュウキュウジカ、リュウキュウムカシキョンという更新世（約200万～1万年）の鹿の一種、人骨は測定の結果約1万5200年前と判明。



⑰琉球列島の旧石器時代遺跡

平成29年度・大阪弥生文化博物館
×沖縄博物館・「沖縄の旧石器人と南島文化」より

第7章 縄文時代に縄文酒は存在したのか

青森県三内丸山遺跡から 平成4年県営野球場建設中に、縄文時代前期から中期の遺跡が発見され、緊急調査を開始し、平成6年に保存、整備、公開が決定、平成9年国史跡となり、縄文時代の代表的な縄文遺跡となったのである。

この三内丸山遺跡の低地から、クリやクルミなどの大量の植物種子が出土したことにより、三内丸山縄文人たちが「酒造り」に使用した後に、捨てたものであるらしいと推測がはじまる。^{おきだて}沖館川に面した斜面に、種子は1mの層になって堆積しており、出土した種子の中で、最も多いのが、ニワトコ(写①)種であった。ニワトコは初夏になると、赤い小さな実がなる^{かんぼく}灌木(低木)で、ニワトコの実は毒があるとも言われ、食用にはならないらしいが、ニワトコの実が多量の堆積出土となっていることから、そこで考えられるのは「ニワトコ酒説」である。

どうやら、ニワトコは食べるために収穫したものではなく、酒造りに利用、「ニワトコ酒」の材料にしていたようである。ニワトコの種子の糖分だけではでは、糖分不足で発酵しないらしく、ヤマブドウ、ヤマクワ、サルナシ、マタタビ、キイチゴ(下記写真参照)等を混合し、果実が自然発酵をもたらし、^{さかづく}酒造(ワイン酒)に使用されていたと考える。これ等の実を乾燥したものを配合し、煮出して糖分を増し^{ふや}発酵させていたようである。その証として発酵した糖分に集まる「ショウジョウバエ」(^{さなぎ}キイロショウジョウバエ)の蛹がたくさん出土していることで、その様子が解かるのである。



①ニワトコの実



②ヤマブドウの実



③ヤマクワの実



④サルナシ



⑤マタタビ



⑥キイチゴ(①～⑥インターネット図鑑より)

縄文時代に考古学的には、酒が無かったということが定説であるが、大型の土器（容器壺）使用を考察すれば、ストーンサークルに於ける祭祀、土偶祭祀・石棒祭祀等々を考え合わせれば、果樹酒（ワイン）造っていたことを断言できそうである。

恐らく三内丸山のムラでは、ムラ中心の大型竪穴住居館^{たて}に人々が集まり、祭祀儀礼に果樹酒を先祖霊に献上していたことは容易に想像される。当時の信仰に基づく思考から「再生」（この世に再度誕生）の祈願祭祀に欠かせない「酒」であったと思われる。

又、縄文晩期には米による醸^{かも}された「日本酒」の存在も考えられる。日本酒は、中国や朝鮮半島から伝えられた物ではなく、日本人が発明したオリジナルの酒であると、ネットの「酒蔵の倅の話」に出ていた。それはもしかしたら縄文晩期の農耕に、「陸稻^{りくとう}」（オカボ）や野稻^{のいね}から収穫した「米」で酒造りがあったとも考えられる。木の実に含まれる果糖やブドウ糖が自然界の酵母と反応すると、アルコール発酵が始まることを縄文人は知っていた証として、縄文中期の有孔罎付発酵壺^{ゆうこうつぼつき}がそれを証明している。

有孔罎付土器^{ゆうこうつぼつき ど き} 「有孔罎付土器」を酒の発酵壺と推測、この土器は長野県や山梨県の中央山脈の高地に、縄文時代前期末期～中期終末に分布し、口縁部に内壁を貫通する径5ミリ程の小孔^{しょうこう}（小穴）が20個程度の孔^{あな}があり、一般的な深鉢型土器と異なり樽型や壺型に孔が多く、胴体には動物文様や装飾文様が施されている。小孔について、その使用する目的に諸説もあるが、⑧写真の壺に4か所の把手^{はしゅ}（酒類等の重さに耐える）が付けられている。土器の使用には土製太鼓説もあって、皮を張り土器太鼓にして打つと良い音色が出るという。有孔罎付土器の内側には、黒色変化が見られ、ヤマブドウの種子の炭化物の出土事例があり、土器は酒造具に利用された可能性が高い。



⑦



⑧



⑨

⑦人形装飾付有孔罎付土器・鑄物師屋遺跡・御所野縄文博物館 ⑧有孔罎付土器と器台・曾利遺跡

⑨半人半蛙文有孔顎付土器・⑧、⑨は『井戸尻の縄文土器2・4』より

酒造り道具壺の孔は蓋を締め付けるためか 使用目的の考察は、ワイン酒は祭り等の儀礼用に使用されたと推測されること。果実酒の果実素材は写真①～⑥の植物の実を使い、凹石皿で磨り潰し、野生酵母によって発酵を齎し、1週間程度でワインが醸造され、祭事・儀礼に飲まれていたことが推定される。容器下の写真の⑩・⑪の「注口土器」から推測すれば、米酒でも、ヤマブドウから造ったワイン（果実酒）でも、同様に小さな容器に注ぐことはできる。最近の発掘調査により、遺物の発見が著しく、縄文中期には飲む酒（米・ワイン）はどちらでも造酒は可能であったことが証明されつつある。この時代、果実による酒造りには、植物の根や茎、雑穀等に含まれているデンプン質を口で噛んで、唾液に含まれるアミラーゼ（澱粉を消化する酵素）によってブドウ糖ができ、酵母と結合すればアルコール発酵し、酒ができる。これが「口噛み酒」と呼ばれる酒である。恐らく南方系の酒造り技術が日本列島に齎されたと推定するが、縄文中期・後期頃、ニワトコやヤマブドウの天然果実だけでは、自然酵母で発酵させるには糖分不足なので、ハチミツ等の天然糖分を添加したのではないかと考える。

ワイン・酒の注ぎ急須土器であろうか



⑩注口土器（晩期）本宮能堂A遺跡（盛岡市）より ⑪中空注口土器（後期）長倉I遺跡（軽米町）より
胴部側面あるいは口縁部直下に注ぐ口が付いた土器、酒などの飲物を注ぎ入れるために使われたと考えられる。この土器を見て岩手南部鉄器とよく類似していると思う。（岩手県埋蔵文化財センターより）

有孔罎付土器⑦について 井戸尻考古館編『甦る高原の縄文王国』の講演録より。

《・・・この有孔罎付土器は、材料と焼き方が他の土器と違っていて、赤っぽい色に非常にいい焼き方の土器で、内側には漆が塗ってある。なぜ内側の漆が残っているかというと、火にかける器だと、漆は火に弱く、一寸と火を当てただけでもだめになる。ところが、この土器は漆が残っていた事実から、この土器の使い道が判った。それで

何に使ったかと言うと、お酒を造った道具だという結論になった。この土器には太鼓説があるが、絶対太鼓ではなく「供献用土器」である。中には同種の小さな器があって、これは酒の種(酵母菌)を残して置くものと考えられる。最近の研究では、果実の他に、クリやヤマイモのデンプンで造った酒もあったのではないかと推測されている。これは、藤森栄一(考古学者)先生が唱えた「縄文農耕論」を肯定しており、先生は、「米」は縄文早期から渡って来た説を唱えている。この有孔罌付土器壺でデンプンを使い、口で嚙んだか分かりませんが、とにかく、デンプンを材料にして酒を造ったと思います。」・・・》(『甕る高原の縄文王国』2004年「それからちょうど四十年」武藤雄六講演より。尚、有孔罌付土器の「用途と意義」は、『藤森栄一全集・9』「中期縄文土器の貯蔵形態」P85参照下さい)

神奈川県平塚市で有孔罌付土器とキツネノカミソリ類の炭化球根が出土した

平塚市岡崎^{かみ いり}字上ノ入(岡崎小学校校庭内)「かみのいり遺跡」は縄文・弥生・古墳時代に続く遺跡となる。縄文時代の遺構は竪穴住居址10軒、配石遺構4基、土坑等、遺物は中期を主体に土器、石器等が出土し、特質すべき遺物に、有孔罌付土器とキツネノカミソリ類の炭化球根が出土した。容器には曾利遺跡で出土した有孔罌付土器と同じカエルの図が描かれていた。キツネノカミソリ類の炭化球根は日本初出土例で、球根からはデンプンを含み、食用か、醗酵酒に利用したものか、これらにはアルカロイド^注が含まれているので、水晒^{みずさらし}などの毒抜きが必要となる。(平塚市博物館より)



⑫上ノ入遺跡「有孔罌付土器」⑬同・キツネノカミソリ類の炭化球根 ⑭キツネノカミソリ(ヒガンバナ科、8月末の花期、身近な自然観察より) ⑫、⑬は平塚市博物館より。

注・【アルカロイド=塩基性(アルカリ性)を示す天然由来の有機化合物の総称。アルカロイドは酸塩基抽出によって粗抽出物から精製できる。一般にアルカロイドは他の生物に対しては有毒で、医薬や娯楽のための麻薬として使用すれば幻覚をおこす。キツネノカミソリにはリコリンと呼ばれる毒があり、誤食すると吐き気、下痢等の症状が現れる。縄文人はこの毒を水にさ

らしたのか、醗酵によることで、酒の魅力を増したもののなのであろうか。】

猿酒伝説 ざるさけ 猿酒とは、山の果実を原料にし、山猿が造った酒のことである。山猿が自然の古木の洞に果実の実を運び込んだものが、猿が食べるのを忘れたのか、食べ残したのか判らないが、残った果実が自然発酵し、ワインのような酒が出来ると云う伝説の酒を、「猿酒」という。現在の生活から考えると漫画的であるが、山猿が木の洞に果実の実を溜め込み、その果実を猿が忘れてしまい、雨水によって果実の実が自然発酵して、酒が生まれたということになる。この猿酒伝説は、日本と中国の南の島々あって、中国大陸には無いということである。猿酒の存在について、考古学の世界では否定的で、霊長学では、猿は物を貯蔵する習性を持たないので、猿が自己の意志を持って木の洞に運び込むことはない、という結論であるらしい。

が、実は、筆者は造園職人の友人と、「五木の子守歌」の里、熊本県球磨郡五木村へ旅行した時、山深い山路に難渋走行中の会話で、筆者が「五木村の山奥では、集落の人々はどのような生活をしているのだろう」と話をした。友人は突然に「こんな山奥では、春秋の野草とキノコ採取か、“猿酒”か、位しか楽しみはないだろう」と言った。この時“猿酒”の話を私は偶然に聞くことが出来た。猿酒の話は次の様であった。

友人曰く、「造園職人修業時代(横浜市)のことで、この会社の植木販売・造園業4代目の親方から聞いた話で、その猿酒の飲酒経験者は2代目の親方の話は、大正の初め頃、植木の苗木を探しに、箱根の山々から関東一円の山々を歩き、珍しい植木の苗木を探して苗木集めを生業なりわいとしていた。或る日、箱根の連なる山中で、不覚にも道に迷い、水筒の水は飲み終わり、見渡すかぎりの山また山、湧水や小川が無い所に入り込んでしまった。

この程度でプロの職人はへこたれない、山の経験が豊富な親方なので、「ならば、猿酒でもさがすか」の余裕で、古木の洞に溜まり水があるはずだと、古木の洞うろを探し周り、やっと見つけた古木の洞に「赤黒い水」が溜まっていた。古い水かと思い指先で溜水をなめた。すると、甘づっぱい、そして微かすかな酒の味がして、“これは猿酒だ”親方は狂喜したという。古木の洞に「猿酒」があることを造園仲間からも聞いて知っていたので、「これは天から頂いた猿酒だ」と、感動が体の中を走ったと言う。その時の果実の実やまももは「山桃の実」であったという。

猿酒造りに挑戦したい方に 果実の写真90頁、①～⑥のニワトコ・ヤマブドウ・クワ・サルナシ・マタタビ・キイチゴとの果実の組み合わせを考え合わせる。この組み合わせにより、縄文酒研究家によれば縄文ワインが出来るといふ。ヤマモモ(6月果実)は、街路樹にも見られるヤマモモの実に目印を付けておく。アルコール発酵には糖度が必要で、ハチミツを加えるか、または果実を乾燥(糖分が増す)させ糖分を凝縮する事がコツ、それを煮出して糖度を上げれば、縄文酒・ワインができるという。

猿酒外国版として、西アフリカ・ギニアでのオックスフォード・ブルックス大学のキリバリ・ホッキングス氏率いる研究チームの研究論文によれば、現地住民が乳状の甘いラフィアヤシの樹液を採取した穴に、残った樹液が自然発酵したヤシ酒を、チンパンジーたちがスポンジ状の木の葉を使って飲んでた。猿グループの仲間で飲み会が行われ、論文によれば17年間の記録で、チンパンジーのアルコール摂取回数は51回で、うち20回は「飲み会」形式という。(ヤシ酒を飲むチンパンジー・AFPより)



⑮

⑮ヤマモモ(雌雄異株)6月果実・園芸の豆知識より



⑯

⑯ラフィアヤシの幹・街は素敵な植物園より

「南島の稲作行事について」 「稲の大祭Ⅰ」頁318より、『をなり神の島』伊波普猷(1876-1947・民俗・言語学者)より抜粋する。

《・・・稲の刈入れが済んで、間もなく行われる行事がいわゆる「稲の大祭」で、南島(南西諸島)の新嘗祭ともいふべきものである。『女官御双紙』(琉球王国の王妃・女官・神女の記録)及び『琉球国由来記』(1713年琉球王国府が編纂した地誌・前編1~11巻、後編12~21巻)の三殿内(宮中賢所)の条に、この大祭の時の御規式(宮中の祭事)は稲の穂祭と同じ、但し「おしるまし」(御酒)は無いと見えているから、「火の神」(かまどの神)を中心として行われた「三日崇」であろう。『琉球国由来記』(以後『由来記』)の各処

祭祀中^{まわし}真和志(地名)の項に、

「稲の二祭之時、穂、シロマシ^注」と書いて、「此二者、大祭之時ハ不レ備。後諸間切倣レ之也」と註してあり、他の間切^{まぎり}(琉球王朝期の行政区分)の項に、大祭に二者を備えた所がかなりあるから、古くは、やはり稲の祭同様であったと思われる。これは古俗の多く保存されている伊平屋島^{いへやしま}(沖縄県島尻郡伊平屋村)の稲の大祭の時、「火の神」の前で唱える「のだて詞^{ごと}」(戸外)を見ても知れる。・・・(略)

・・・「けふどかけな、首里按司^{あじ}(豪族)をそひ、ただみきょう、足間^{あしま}の敷配^{かずは}ぎきらしめしよわちやる、しるましいせ祭。ふさきん(稲の穂を)大春^{おほうす}(大臼)入れて、磨りて、小臼^す入れて、こつき(磨り潰し)、二十宮童^{はたちみやらべ}(二十歳前)が、朝川^{あさがわ}に下りて、済川^{すみかわ}に下りて、み顔押し撫^なでて、御口^{みくち}ふさ滌^{すす}ぎ、せせに入れて、かい立てて(醗酵させて)ふづくたる(醸した)がめんしるまし、あんぢやどん(火の神)かなはや(神名)に、御祭しやべむ。」

口語に直して見れば、「今日の吉日に、首里の王^{くま}が隈なくお達しになった通り、しるまし^{たてまつ}を奉り、鄭重^{ていちょう}な御祭を致します。稲の穂を大春(大臼)に入れて磨り、小臼に入れて砕き、二十乙女^{はたちおとめ}が朝川に下りて、澄川^{みそぎ}に下りて、禊^{くちすす}をしてから、よく口滌^{すりつぶ}ぎ、磨潰したものを、口に入れて嚙んで醗酵させて造った、がめん(神酒)しるまし(口嚙酒の薄い御酒)を以て、火の神^{みき}かなはや(『由来記』神名のかねせど・かなはや)にお祭を致します」と記録されている。

金武(地名)祝女^{ノロ}の御嶽^{うたき}にて、「6月になれば、ましら(米)を^{おが}拝まれ、しるまし^く醸うて、おしやげやべら」と出ており『由来記』の中に、「しるまし」の代わりに「穂たれ」を用いた所もあるが、「たれ」は醸す事を意味するタレユン^{タレユン}の名詞形だから、「穂たれ」には「穂で醸した御酒」の儀がある。麦の穂祭の所にも「しるまし」が見えているから麦の穂で醸した事は明らかである。オモロ(古代歌謡)の中には「みしやく」という語が所々に出ている。これは普段米を嚙んで造った酒のことらしい。後世それに「御」を冠して、一般に「ウンシャク」(歯で嚙んで造る酒)というようになった。それを「嚙みおんしゃく」の儀か、それとも「神おんしゃく」の儀か、その辺は判然としない。『由来記』中にあらゆる祭祀の時、火の神などに奉る「神酒^{みき}」もそれらしい。・・・この種の酒類の製造法については、尚清王^{しょうせいおう}(1497-1555年・琉球第4



ミーシャン酒(美酒)昔年頃の娘が嚙ませて造った美酒が見られるのは前泊御嶽の神酒
西表島列島知恵プロジェクト

代国王)の時の冊封使陳侃^{ちんかん}の使録中に、「造酒則以水漬米越宿令婦人口嚙、手^梶取為之(梶は筆者作る)、名曰米奇」とあるのが最も古く、『混効驗集』(琉球語の古語の辞典 1711年)にも「おむしゃく、御神酒の事也。むしゃく、みき共云。和詞にもみきと云詞あり。口にて米をくだきて、昔は酒を作りしと呉竹集(和歌呉竹集^{わ か ごちくしゅう})に見ゆ」と書いてある。

奄美大島では嘉永(1848-55年)の頃まで行われたと見えて、例の『南海雑話』(南東の民俗学辞典)にも「西東屋木内辺に調ゆる造酒は女共嚙^{かみくだ}碎き調ゆるなり。是を嚙造酒と云ふ。・・・名瀬も此以前は総て嚙造酒なりしが、今は嚙て調ゆることを止めたり。然れども名瀬の内浦上村計は、今も嚙造酒を調ゆるとなり。・・・西方にて嚙造酒の調方、年若き女半時計塩(塩水で口を洗)にて歯を磨き、又紙にて能く拭ひ、白歯にて二嚙位嚙て、交^まざる迄なりと云」と見えている。

この風は沖縄でも一時代前まで行われて、西原辺ではお祭の一週間前に、数名の宮童^{みやわらべ}が選抜されて、魚類その他のヒルグサリ物(生臭い)を食べるのを禁ぜられ、最後の日にはサトウキビを嚙^かじって、歯を奇麗に白くしてから、米を口で嚙んで磨りつぶした米を、水に漬けた桶の中に吐出し、表面に浮いた涎^{よだれ}を、竹のアカシ(スプーン形の竹の皮)ですくい取り、一晩置いて醗酵させた。置県前(廃藩置県)までは、王城内でも未婚^{グスク}の王女達^{おみなり}が、同様な方法で、神饌^{みき}の御酒を醸された、と聞いている。

延喜式卷第7(平安時代中期編纂された格式=法令、^{きやくしき}、^{せんそだいじょう} 踐祚大嘗ノ祭(天皇即位の儀式)の記事中に、造酒^{さかつこ}見一人(大嘗祭に神酒を醸す少女^{だいじょうさい})や共作二人(酒造^{あひづくり}の助手)も、このようなものであったに違いない。これらは大嘗祭の時、齋場^{セーフアー}(御嶽^{うたき})で神饌^{みき}の御酒を醸^かみ造り成すを、掌^{つかさど}る少女で、齋田地(大嘗祭の米作り田)の者を卜定^{ほくじょう}(吉凶を占う)して用いられたとの事である。・・・》と、酒造りを記してある。

【注・シロマシ(シルマシ)は、麦や稲の初穂をとり、粳のまますり鉢の容器に入れ、水を加えてすり潰^{つぶ}し、漉した乳白色の米汁を、口で嚙んで醗酵、シロマシは「白くする」という動詞となる。由来のこの酒は東南アジアで飲まれるという。】

「折口学」酒造について(折口信夫・民俗学者)『上世日本文学史』より

《・・・「古代に於いては、酒の用いられる時は、割合にはっきり定まり、且、其用いられる機会も、そう度々ではなかった。神事のみ用いられたのである。酒を用いて陶然^{とうぜん}(酒に酔う)とした境地に入る。それが己に一つの神懸りの状態でもあった。而も古代に於いては、そうした神酒^{つかさど}を掌^{つかさど}るのは女性であった。琉球では、今も女が酒を

文字通り嚙んで作っている所がある。古の日本でも同様であった事には証拠が多い。

^{みきのつかさ}造酒司、さけの司、の酒瓶の名は女性の名である。おほおとじ(おほとじ)、ことじ、つぎとじ(すきとじ)とある。とじは刀自と字をあてる、女主人を意味する言葉である」・・》。沖縄女子が酒を飲むのは祭祀(直来・神祭後の宴会)の時に限り、「しるまし」「おんしゃく」をいただいて酔った事は十分想像が出来る。と述べている。

沖縄の神酒 沖縄国際大学文学科紀要社会科学篇第1巻・平敷令治著より概要で。

《・・穀物や特定の植物の根を嚙んで吐き出し、それを醗酵させて酒をつくる習俗が、古代中国・日本・台湾・メラネシア・マイクロネシア・ポリネシア・南アメリカの原住民の間に分布し、共同体の儀礼には嚙酒を造るのは女性であった。クチカミの酒の名称の語源について、「嚙む・歯・顎」の名称に由来している事例が多い。

『記紀』や風土記に、神寿^{ことほ}ぎ(祝言)の御酒・待酒(客をもてなす酒)・盟酒(実の父親^{うらな}を占いで探す)を造る風俗について、酒はサケ・ミキ・キ・ミワ・クシとなり、8世紀に酒を造ることを「酒を^か醸む」と唱えていた。酒を嚙み酒造した習俗と思われる。

『大隅国風土記』逸文に「大隅の国には、一家に水と米をも受けて、村をめぐらせば、男女一所に集まって、米を嚙み、さかぶね^{さかぶね}(酒槽)はきいれて、ちりぢりに帰る。酒の香のいでくる時、また集まって、嚙みて、奇麗にしたものを、これを飲む。名づけて、「くちかみの酒」と云う。・・》と、風土記記に見える。又、琉球王朝時代、島作り粟・大麦・キビ・コウリヤンの刈入れの祭りに醸されたことが多くあったらしい。

【※酒造りを表現する「醸^{かも}す」という言葉は、口嚙み酒の「嚙^かむ」の語源説、「醸す」は「かびす」から転じた説もある。】

近代のクチカミの酒 クチカミの酒をつくる習俗は、沖縄本島では、廃藩置県(1879)前後に急速に廃れたらしい。『南島雑話』(文政・天保 1829-1842の記録)によれば、奄美大島では19世紀中期まで、クチカミの酒をつくる村があった。沖永良部島では、「明治の直前まで、15、6才の少女の口を洗い清めて、米を嚙ませその吐き出した液の醗酵酒は、神にも供え、人々も愛用した」とある(『沖永良部島民俗誌』1939年)。

与論島にも同じような報告が、明治33年1月9日付の『琉球新報』に、宮古島にミキ(神酒)を嚙む旧習^{のこ}が遺っていることを伝えている。昭和前期の民俗誌は、八重山の波照間島(日本の最南端)の『南方文化の探史』(1939年)に見え、西表島(『南島覚書』1944

年)にもクチカミの酒を紹介している。沖縄本島周辺と離島では、大正から昭和の初めにかけて日本政府は、クチカミの酒をつくる習俗を廃止させた。

【^{くちかみざけ}口噛み酒・米などの穀類やイモ類、木の実等を口で噛み造る酒のこと。口噛み酒は、古代の日本列島、アイヌ、沖縄、奄美諸島で造られていた。アイヌの酒造りは、アイヌ・アマン(穀物)と称したエゾ稗^{ひえ}で造った。デンプン質を含む食物を、噛むことにより、唾液中のアミラーゼがデンプンを糖化させ、それを溜^ためて置き、野生酵母が糖を醗酵し、アルコールを生み出す、これが口噛み酒。噛む製法以外に、原料を煮炊きして、原料を酸敗^{さんぱい}(すっぱくなる)させた後で口噛製法する。発生地は不明であるが、東南アジアから南太平洋域が有力とされる。】

アイヌの酒・ヒエ=稗「トノト」 イネ科ヒエ属、アイヌ語では「ピヤパ」と呼び、ヒエと混同されやすい雑穀、シコクビエ(オヒシバ属)、トウジンビエ(チカラシバ属)であるが、縁の遠いイネ科である。日本では縄文時代の前期から北海道・東北地方で栽培されていた。アイヌでは最も重要な主食穀物の一つが「ヒエ」であり、北海道アイヌの儀式に用いる酒、「トノト」(稗を原料にした酒)が知られている。アイヌに於いて、最も神聖な穀物とされ、アイヌ神話に「オキクルミ(アイヌ創世神話)が自身の脛^{すね}を断ち切り、その傷の中に天上界のヒエを隠して盗み出し、地上の人間に伝えた」とある。

東アジアの栽培ヒエ(ニホンビエ)は、栽培化されたと考えられている。ヒエ属植物は世界に50種ほど知られ、雑草種の殆どは1年生で、野生種は多年生となる。栽培種には、中国から日本に分布するヒエのほか、インド亜大陸のインドビエ、中国雲南省のモソビエの3種があり、酒造りの目的として維持されているものもある。



⑰ヒエの熟した穂 ⑱アワの仲間 ⑲野ビエの仲間(⑱・⑲は筆者宅の小鳥の餌から発芽したもの)

第8章 現代に甦る縄文文化を考える

日本人の「あの世観」 日本列島に栄えた縄文文化という土器を伴った狩猟採集文化が、世界史の中ではどのような位置づけの文化であったのか。それは徐々に明らかになり始め、日本で発見された最も古い縄文土器は1万2千年前とされ、メソポタミア地方の最も古い土器は、8千年前と言われている。日本の土器は今のところは、世界で最も古く、土器文明を発展させた日本は、狩猟採集文化を高度な形で造りあげていたのである。たとえば、大湯環状列石(秋田県鹿角市)の「5本柱建物」(①写真)は中央に5本の太い柱を建て、周りに20cm程の柱を巡らせている遺跡となり、柱の上の建物は解らない。又、石川県能登半島の先端にある真脇遺跡は、直径90cm～30cm位の「クリの半割材」で造られている「環状木柱列」(②写真)である。発掘調査の結果、縄文前期～晩期までの約4000年間、魚労を中心として繁栄したムラとなり、285頭のイルカ骨が出土している。そして、半割クリ柱(③写真)、長さ8m、幅80cm～100cmの巨木が使われ、数回にわたる環状列石が建設され、おそらくこれらの遺跡は祖霊神との交信の神殿であったと思われる。



①



②

①大湯環状列石遺跡の5本柱建物・2016年写 ②真脇遺跡の環状木柱列・能登町・2016年写

大湯環状列石はクリの原木をサークル状に並べた遺構は、掘立柱建物技術と、祖霊信仰の場を現在に伝えている。その文化は、弥生文化、古墳文化を経て、現在の伊勢神宮の心の御柱や、長野諏訪神社の御柱の信仰に繋がっていると考えられている。この御柱で推測できることは天と地、神の住まいと人間の住まいを結びつける、先祖霊(神様)はこの柱を伝わり天から地上に降りて来る祭祀跡と推測される。又、人間の靈魂が昇天する時は、この柱を伝わり魂は天へ登って行く先祖信仰が存在していたと考える。



③クリの半割材・能都町真脇遺跡縄文館

石川県能登半島の真脇遺跡のウッドサークル(②環状列木)の柱木は、先祖神と結ばれている架け橋という意味合いが強かったようである。

「ハシラ」は「ハシ(橋)」の意味も含んでいると思われ、「ラ」というのはアイヌ語で「高い処をさす言葉」であるから、ハシラは立っている「ハシ」を表わしているかも知れない。「ハシ」は「この世」と「あの世」を結ぶものであろう。能舞台に於いては、鏡の間から舞台へ渡した廊下は、あの世から来た「ハシ掛り=橋掛り」は「この世」と「あの世」を結ぶ「橋」であらう。(参考『日本人の「あの世」観』梅原猛著より)

又、これに似た実例は、沖縄県の久高島の「イザイホー」(神女就任)の儀礼では、神女になる女性たちが「神アシャギ」(神の来臨小屋)の入口に七段の梯子を横に寝かせた「ハシ」が架けられている。この橋は正に「あの世」と「この世」を結ぶ架け橋を、神女たちが渡る儀礼がそれである。(4章イザイホー63~66頁参照)

【環状木柱は、前・中期のイルカ解体場の上に設けられていた事が判明。解体場を「墓地」と捉える事で、立柱と墓の関係性が再認された。『立柱祭祀の史的研究』日本考古学第19号より】



④神が来臨する小屋入口に7段の橋を架ける ⑤真脇遺跡全景 ↓ 印環状木柱列 ← 印真脇遺跡縄文館

真脇遺跡出土の能面(土製仮面)について 真脇遺跡から能面の癒見(能面・下顎に力を入れ口を結んだ鬼神面)の面に、よく似た土面が出土している。日本の能面が面としては甚だ小さく、伎楽面や舞楽面の被る面ではなく、疑問を抱いていたが、もしも能面の起源が、木の面ではなく土の面であるとすれば、その疑問は一挙に解決される。だいたい能の「シテ」(シテが主役「仕手」「為手」男、女、神、精霊、鬼等約60~2百種)は多くは「死霊」であり、能の筋(物語)の多くは、人間の中に紛れ込んだ死霊を鎮魂し、あの世に送り帰す物語となっている。4千年前の真脇遺跡では、仮面を被って死霊を

なぐさ
慰め、再び天に送る祭典が行われていたと考えられる。土製仮面(⑥)は真脇遺跡から出土したものは、長さ16cm×幅13cm程度のもので、目は吊り上がり、眉と鼻が高く、顔面に入れ墨があつて、魔よけの化粧と思われる。沈線文(曲線、魔除け)が施されており、土製仮面と土偶は人間を形どる点は似ているが、両者には大きな相違点がある。土偶は全国でたくさん出土するが、土製仮面の出土例は少なく、縄文時代後期・晩期の東日本に片寄って出土している。土製仮面は後期前葉気屋式期(北陸地方の縄文後期の土器)もので、右顔面と顎が欠けている。時期は縄文早期から晩期まで、東日本片寄っていて、縄文時代には仮面をつける儀礼が存在していたことは確実である。

⑥土製仮面・復元すると目はつりあがり、眉と鼻が高く顔面にイレズミ、魔よけの化粧と思える沈線文が施されている。面白いことに、仮面は鼻、耳を土製にして、他を貝の材料で作ったと推定され、仮面を着ける儀礼が存在していた事は確実である。



⑥真脇遺跡出土した仮面、長さ16cm、幅13cm

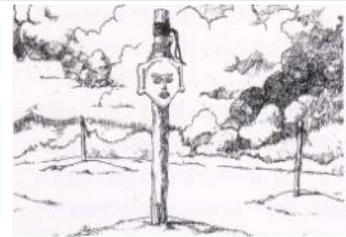
る。尚、ナマハゲ(男鹿)、アマメハギ(輪島市)、面様年頭(輪島崎町)は仮面祭事と符合する。(写真『新図説・真脇遺跡』・能登町より)『日本人の「あの世」観』梅原猛著より)

他の地域の土面の謎 縄文人の被ぶり土器のお面(⑦)は、死者を葬る時に死者の顔に被せたものか、呪術師(シャーマン)がこの仮面を付け、死者と祖霊神との間を取り交わす、言葉掛けに必要な仮面であったものか。土面は北海道から四国まで、凡そ50遺跡より60点ほど出土し、徳島県の矢野遺跡から出土した後期初頭のものが現在のところ最も古い土面となる。土面は東北地方から最も多く出土する地域となる。



⑦左より矢野遺跡土製仮面、千歳ママチ遺跡⑧想定図、能代麻生遺跡土面、盛岡稗内遺跡大型土偶頭部

ママチ遺跡の⑧土面・昭和61年に出土した。土面は目と口は貫通し頭と耳に5mmの貫通穴があって、紐を通せば顔に装着できる。顔の感じから男性と考え、土面は墓の上から発見された事から、墓標に付けられていたものか。



⑧土面使用の想定図

(⑧想定図としている。北海道教育委員会より)

⑨土面・耳・鼻・口形土製品・顔の一部である耳、鼻、口などを表現した土製品が、岩手県の八天遺跡(北上川中期から後期)から、墓穴から出土したことは、死者の顔に被せて送り儀式をしたものだろうか。土製仮面に括り付け墓標にしたものか、呪術師が顔面に紐で結んで死者の送りに使用した葬具なのであろうか。



⑨土製耳・鼻・口・重要文化財(北上市)

あみゆかんじょうれっせき
大湯環状列石(ストーンサークル)

鹿角市十和田大湯環状列石ガイドブックより



⑩

⑩約4000年前に造られた大湯環状列石遺跡 ㄣ矢印万座環状列石、ㄥ矢印が野中堂環状列石



⑪

⑪ まんざ万座環状列石・二重円直径52m約5千個の石



⑫

⑫ のなかどう野中堂環状列石・二重円直径44m約2千個の石



⑬万座環状列石を上空より見る・配石遺構 109 基

⑭野中堂環状列石を上空より・配石遺構 61 基

大湯環状列石の配石遺構 配石は 30～40cm の石が、10～20 固が一組の単位で出来ている。石組の下にお墓がある環状列石遺構は、になる。環状列石は北海道から三重県までの地域に 178カ所、多いのは秋田県74カ所、北海道2カ所、静岡県3カ所、岐阜県2カ所、愛知県・三重県に1カ所となっている。

この環状列石の配石遺構の下から、円形・楕円形・方形の墓穴が見つかり、この墓穴を「土坑」(土壙)といい、大きさは丸・楕円形で1m前後、大人が膝を抱ええて入れる大きさとなっている。このことから、土坑は死者を埋葬したお墓と考えられ、環状に配置された石は、お墓の上に作られた墓標であることが分かった。採取石は東北東に約7km離れた安久谷川周辺から集めたもので、小石は20kg位、大石は200kg位、石質は石英閃緑岩(淡い緑色)となっている。200基の墓から想定すれば、25人余のムラ単位か、幾つかのムラの共同墓地であったことが考えられる。

死者を何故丸い形の穴に埋めるのか 『月と蛇と縄文人』大島直行著に、次のようにある。《・・・縄文人が死者を穴に葬るのは、合理性や衛生上の理由からではなく、大地に墓としてデザインされた「子宮=母の体内に遺体を帰すという意味が込められているのではないか。なぜ母の体内に帰すのかといえば、^{もちろん}勿論「再生」させるため、縄文人はそうして1万年間に亘って、子宮に見立てた穴を大地に掘り、葬儀を行ってきたのではないのでしょうか。考えてみると、縄文人のお墓は、その深さも大きさも形も、地域や時代によって異なるが、深さや大きさに意味があるわけではなく、死者を子宮に帰し、再生



土壙墓・屈葬イメージ図小牧野遺跡より
胎児の形、屈葬の姿勢で埋葬された

を願うという事で、縄文人にとっては「墓を掘って死者を埋める」という行為が第一義的なものと思える。子宮は縄文人には自分が生まれた故郷、死は蘇る再生の場所である。「死と再生」を象徴として崇められている。・ ・ 》と、述べている。他説では屈折は靈魂が浮遊しないようにした説、更に石を抱かせ魂を浮遊させない説もある。

大湯の縄文人は、日時計状組石で「夏至と冬至」で1年を理解していた

野中堂環状列石の二重の円の間に「日時計状組石」がある。中心に1mの立石で、200kg重さがある。放射状に細長い石を配置し、外側に4個の丸い石を置き、調べてみると、ほぼ東西南北を指している。この配石遺構は日時計の形をしていることから「日時計状組石」と名付けられている。縄文人が日時計と使用していたかは定かではないが、野中堂環状列石の日時計の石組を見ると、立石の影が、太陽の春夏秋冬の動きによって、影の長さを変え、東西南北に太陽の動きの変化を見て取れるのである。



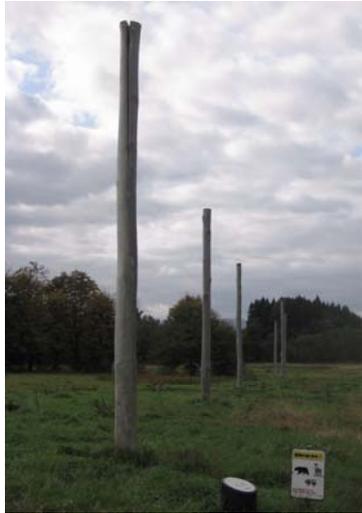
⑮野中堂冬の日にみる日時計石組 ⑯手前が野中堂サークル、奥が万座サークル、夏至には一直線に

1年間の日時計石組の観察の結果、2つの環状列石の中心と、日時計石組と結び、「夏至の日没」で確認された。狩猟採集の日々の生活を過ごしていた縄文人は、1年の暦を、この大湯環状列石で生活のサイクル計画を立てていたのだろうか、また、先祖霊を祀る祭事を、この日時計の影の長短で祭祀の日時を決めていたのだろうか。

大湯の柱列造りは後世の諏訪大社御柱祭の繋がる 『諏訪大明神絵詞』によれば、

御柱祭（おんぼしらさい）（B写真・諏訪大社式年造営御柱大祭・7年毎に新柱を建立）は桓武天皇（在位781～805）時代に遡る。民俗学での祖先霊は山に宿り、正月や夏盆に里へ降りて来ると考えている。夏は盆提灯の灯かり目指してやって来て、正月には家の門松を目指し霊がお飾りに憑依するのである。従って御柱は、祖先霊が山(天)を降りて来るハシゴの階段

と考えられる。民俗学者折口信夫は、柱=ハシラ（約直径1m×長さ17m×10t、社殿の四隅に建てる）は、階=キザハシ（能舞台に掛ける段）などと語源は同じ、天と地とを結ぶ橋=ハシであり、祖霊神は柱を目指して来臨して来ると述べている。



①⑦万座環状列石にある柱列^{はしられつ} ①⑧諏訪大社（下社、2016年） ①⑨御柱祭の神木（タウンニュースより）

①⑦柱列^{はしられつ}、万座環状列石から南西方向に柱が、3本組が2つ立ち並ぶ。発掘調査の結果、約50cmの径の柱穴を検出、10mの等間隔で、一直線に建てられていることが判った。柱列は何のために作られたのか、柱の上に何があったのか、それは解っていない。大湯環状列石はクリの原木で並べた、掘立柱建物や柱列を見て推測できることは、「あの世」と「この世」の異界の世界を結びつけ、先祖神はこの柱を伝わり天から地上に降りてくる柱列^{ひょうちゆう}（標柱）であり、それらを祀る祭事跡と考える。

また、「この世」から「あの世」へ行く霊が天に昇る時、この柱を伝わり天に登る先祖信仰を施していた縄文人の想いは強烈である。あの世とこの世の信仰文化が縄文、弥生、古墳時代等々の歴史を経て伊勢神宮の心の御柱^{しん みはしら}や、諏訪神社の御柱^{おんぼしら}信仰に繋がっていると考えられるのである。そして奉納役木は20年毎に新造され、その築造技術の継承には、歴史時間



②⑩伊勢神宮式年遷宮・外宮別宮多賀宮『ウィキペディア』より

単位20年を守って行くことを厳守している。経験の築造②⑩式年遷宮は、若い世代に一度、棟梁の代になってから二度目の経験伝承をする。人間の生きる寿命を考え、民俗の知恵を結集し、20年毎に今日まで途切れること無く継承しているのである。

大湯環状列石の掘立小屋と沖縄県の神アシャギ小屋は類似

第4章 64 頁でも紹介したが、再度この「神アシャギ」の小屋について述べさせていただく。大湯環状列石の万座の掘立小屋柱は4本と6本柱建物があるが、どちらもとても良く似た建物小屋となっている。沖縄諸島の⑳神アシャギは、先祖神の守護神が天より降臨(来臨)する小屋となっていて、大湯環状列石の㉑掘立小屋を造った推測は、死者の埋葬儀礼や祖霊神との交信、収穫祭儀礼に使用した小屋と考えている。両者の掘立小屋の使用目的は、祖霊神との交信の場として使用していたことは同様であろう。



㉑



㉒

㉑神アシャギ・沖縄県今帰仁村なまじんそん(おきなわ歴史散歩より) ㉒万座環状列石の復元掘立柱建物ほったてぼしら・2016年撮る

掘立柱建物の目的は葬送儀礼・先祖霊の供養祭事・作物豊穰儀礼の掘立小屋か

大湯環状列石の調査報告には、建物周りからは火を焚いた跡などなく、住宅使用ないことも分った。その代わりに、祭祈に使われた供物土製品等が多く出土しているのである。このことからこの建物は死者を埋葬する葬送儀礼場であり、農作のヒエ・アワ等の収穫後の豊穰儀礼の場所と兼ねていたと考える。写真⑱、掘立小屋は4本柱と6本柱の2種類があって、6本柱の建物は遺構の内側に多く、4本柱建物は外側に多くなっているが、その理由は分からない。

年代を経て建物を立て直す時は、前の柱を抜かないと同じ場所には建てられないので、何度も建物を立て直していることを考えると、長期に亘って先祖霊を祀り、自然の恵みに感謝し、祈りを捧げるムラの儀礼・祭祀の小屋であったと思う。

野中堂環状列石の周りからも建物跡から出土した土器やクリ、クルミやドングリが盛られて、供物として捧げられたのであろう。供物の器うつわ㉓・㉔となり、キノコ形土製品㉕となる。食料として豊穰を祈願、また薬用としての効果を期待していたかも知れ

ない。また、キノコの幻覚作用を利用して、呪術作用（まじない）儀礼に使われていたかもしれない。次にキノコについての専門家による考察を見て行きたい。



⑬帯状文入り土器「帯縄文」^{おびょうもん} ⑭装飾台付土器（献上器） ⑮きのこ形土製品・伊勢堂岱遺跡・縄文後期

「きのこ形土製品」についての考察 この件については『縄文時代のきのこについて』工藤伸一著（日本菌学会会員）を参考した。この論考は「菌蕈」^{きんじん}2002年10月に掲載から要約で紹介とする。（「こまきのいせきものがたり」インターネット配信あり）

《・・「きのこ形土製品」が作られたのは縄文時代後期、今から約4000年前のことで、この時期は既に地球の寒冷化が始まっており、生活も大集落から小集落へと変遷期の時代と重なる。それまで「キノコ」を食料としていなかったものが、自然の恵みが少なくなり、「キノコ」を食料とする必要が出て来たものなのか。それとも「キノコ」を食料としていたが、何らかの都合でキノコの「形」（模型）にする必要が出て来たものなのか。出現の理由は謎であるが、少なくとも縄文時代に於いて、キノコは貴重な食料であったことは推測できる。しかし、キノコの食毒の判断は現代の科学を持ってしても、先人の貴重な体験によるところが殆どである。

このことは縄文時代に於いても例外ではなかったと思われ、毒キノコによる中毒の犠牲者もかなり出ていたと思われる。キノコは腐敗しやすく、長期保存は不可能で、従って貴重な体験から、食用と判明したキノコを、何らかの方法で残す必要があったのではないかと。つまり、キノコをここまでリアルに表現する必要性があったのは、食べられるキノコの再現を試みた結果、採集する時の見本として、毒キノコによる中毒を防ぐ目的があったのではないかと考えられる。食用キノコの模型「きのこ形土製品」は、ムラの人々や家族たちがキノコを採集する際の見本、特定の食用キノコに関する

知識伝達の為の道具（模型）、言うなれば縄文版「きのこ図鑑」としていたのではないかと考えられるのである。

果たしてキノコの模型で食用キノコを判別できるだろうか、疑問はある。現在まで伝わるキノコを食する正誤に、「鮮やかな色のキノコは毒である」とか「縦に裂けるキノコは食べられる」等の誤った迷信情報より、縄文時代の人々の方法（模型による）の方がより具体的で確実性がある。このキノコ模型の利用は、縄文時代後期前半迄という短期間で、わずか500年で消滅している。その理由は謎で、土製品以外に伝達手段を持たなかったのか、その土製品の持つ意味が後世に継承されなかったようである。

「きのこ形土製品」と言われるものの出土例（1999年現在）は、青森県13遺跡で58点、秋田県10遺跡で60点、岩手県19遺跡で51点、山形県1遺跡で2点、福島県13遺跡で24点、北海道4遺跡で4点、計60遺跡で199点が出土している。これ等が全ての「きのこ形土製品」か、どうかの確認をしていないが、「きのこ形土製品」は東北地方北部を中心に、北海道南部、南は福島県北部の広範囲に分布している。

今まで見て来た「きのこ形土製品」の中で、特にリアルなものと思われる数例について紹介する。きのこ写真で判りづらいが、右の図1～図6となる。

②の図1は傘の部分が径52mm高さ10mm、傘の下面はわずかに凹状で、柄の部分は傘に垂直に下がり、ほぼ円筒状で上下同大、頂部付近でややクビレている。

②図2は傘の部分が48mm高さ10

～20mm程度の中高の丸山形で、片側は厚く、反対側は薄く仕上げられ、表面はほぼ平滑、傘の下面は縁が突出し、縁部は薄くやや内側に巻くが全体に肉厚。柄の部分は傘の厚い方に向かって多少斜めに付けられ、ほぼ円筒状で下方に向かって細くなる。



⑳図3は傘の部分が径65mm、高さ25mm程のやや深い丸山形で、表面はほぼ平滑^{へいかつ}、傘の下面は深い凹状に仕上げられ全体に肉薄、縁部はやや波打つ、柄の部分は、ほぼ円筒状で下方に向かって細くなる。基部はほぼL字型に曲げられ、長さは傘の大きさの割には短く作られている。

⑳図4は傘の部分は推定で径約40mm、高さ22mm程の饅頭形で、表面はほぼ平滑で、下面は凹状に仕上げられ、中央部分はかなり肉厚で、縁部は薄くやや内側に巻き、柄の部分は傘に斜めに取り付けられ、ほぼ円筒状で下方に向かって細くなる。

⑳図5は傘の部分が径59mm、高さ15mmほどのやや低い丸山形で、表面はほぼ平滑、傘の下面は凹状に仕上げられ、中央から縁部にかけて薄くなり、柄の部分は、ほぼ円筒状で、ほぼ上下同大で下方に向かって細くなり、「じ」の字形に屈曲し、全体として極めてバランスよく作られている。

⑳図6は傘の部分は径40mm、高さ36mmで縁が反り返ったやや薄い漏斗状をしており、肉厚で傘の下面は柄に垂生し、柄の部分はほぼ円筒状で多少湾曲して先細り。

次にこれ等の土製品に付いて、キノコの種類を考察する・土製品からキノコの種類を推定することは大変難しいが、その祭、大きな手掛かりになるのはその形状である。

⑳図1～6は、何れも傘と柄の部分が明瞭に示されており、この形から、表現されているキノコは⑳ハラタケ写真(キノコの分類)の種類と推定される。「きのこ土製品・写真㉑P108」が作られた縄文時代後期には、ブナやミズナラなどの冷温帯落葉広葉樹を中心とした森が広く分布していたと考えられる。縄文人にとっては落葉広葉樹林が身近な存在とすれば、土製品のキノコの種類を推察する場合には、キノコの形状を考慮する重要である。土製品と次の頁の写真を見比べながら見ていただきたい。

⑳図1の傘の部分が平たい丸山形で、全体にやや肉厚、傘の下面はわずかに凹状であるから、キシメジ型～カヤタケ型の形状を示す大きさから、ミズナラ林に多い、ヌメリガサ科の「㉑サクラシメジ」のキノコなどが考えられる。

⑳図2では柄が傘にやや斜めに取り付けられており、斜面に発生している状態を現していると思われる。この土製品は傘がやや中高の丸山形で肉厚で典型的なキシメジ型の形状を示すことから、キシメジ科のキシメジ属などのキノコを表しているから、特に傘の状態から青森県でミズナラ、カシワの雑木林に発生する「㉒バカマツタケ」

を強く連想する。

⑳図 3 では柄の基部が意識的に曲げられており、このことは、倒木や枯れ木などに付着していたものを表現すると推測、傘の肉が薄く仕上げられており、比較的深い丸山形である事からキシメジ科の「㉑サマツモドキ」の様なタイプのキノコに似ている。



㉑サクラシメジ (図 1 に似る)



㉒バカマツタケ (図 2 に似る)



㉑サマツモドキ (図 3 に似る)

下記白黒写真は「縄文時代のきのこについて」工藤伸一著より、カラー写真は筆者による

㉒図 4 も前記と同様に柄の基部が意識的に曲げられ倒木や枯れ木などに付着していたものを表現していると推測され、形態から傘が開く前の若いキノコを模倣したと考えられるがキシメジ型の形状を示しており、見た目はキシメシ科の「シイタケ」か、スギタケ属の「㉓ナメコ」の様な肉厚のタイプのキノコに似ている。



㉓ナメコ・ウィキペディアより

㉒図 5 では実物を見ていないものの写真からだけでもリアルさが分かる。柄が傘にやや斜めに取り付けられているが、材に発生しているものではなく、斜面に発生している状態を表現しているものと考えられる。傘が丸山形で柄が細く仕上げられ、全体のバランスがよく、ミズナラ林に発生する「㉔ホンシメジ」の様なシメジ属ノキノコに似ている。



㉔シメジ・ウィキペディアより

図 6 ではリアルさにやや欠けるが、傘が肉厚で漏斗状^{じょうご}をしており、傘の下面が柄に垂生することから、ハツタケなどのようなベニタケ科か「㉕アンズタケ茸」のキノコを思わせる。



㉕アンズタケ茸・キノコの事典

以上のようにリアルに表現された「きのこ形土製品」観察すれば、殆どが良く知られた食用のキノコの選別を考える事ができる。縄文時代に於いて、キノコも貴重な食料であったことを十分推測されるからである。尚、当時の日本列島に先住していた

東北・北海道の縄文人は、土製品から考えて「きのこ好き民族」と思われる。そして後続の大陸から渡来の弥生人は「きのこ嫌い民族」であった様である。キノコ嫌い民族は、キノコを食する恐怖があったのか、祭祀・呪術の道具として使用したことも考えられる。「きのこ好き民族」はキノコを貴重な食料として捉え、土製品の作りはシンプルであるところをみると、豊作を祈り豊饒儀礼用の供物としての利用も考えられる。・・・》と説明されている。

誠に「菌蕈研究所」の先生の推察通りで、縄文期の食用キノコ推察を試みるに、キノコ言葉をもって説明されたことに感動を受ける。縄文人からの伝言を、現代人に手にとって伝わる凄さを実感し、菌蕈類調べてみたら、「一次菌糸は体細胞接合により二次菌糸となり、子実体を形成する。世界中で1万5種以上が知られ、サビキン(さび病菌)とクロボキン(黒穂病菌)を含む半担子菌類(孢子が発芽すると管状構造となり、その細胞の外に孢子が形成される)と、その他の担子菌を含む菌蕈類に二分、後者にはキクラゲ、マンネンタケ、マツタケ、シイタケ等が含まれ、食用キノコが多いという。

縄文人の算術「大湯環状列石の算術土製品」を見てみよう

秋田県大湯環状列石遺跡から不思議な粘土で作られた土版が出土した。③土版、高さ5.8cm余りの土版の表面は、口、目、右胸、左胸、正中線に注目し、表面には1から5の数を表わしている。裏面には左右の肩に穴が3個ずつあいている。3が2つ並んでいるだけなのか、6を表すものか縄文人の謎にせまる。



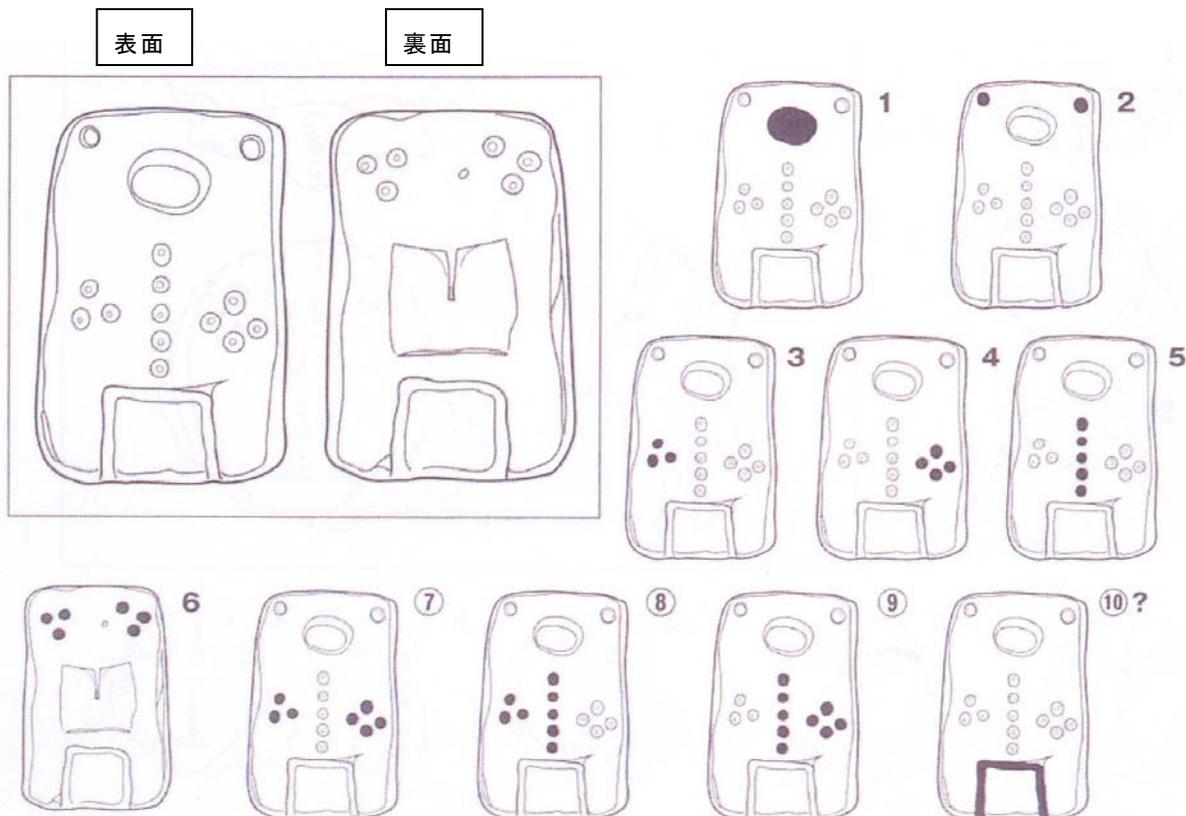
③大湯環状列石より出土の土版・左表面・右裏面
縄文後期 「大湯ガイドブック」より

『算術する縄文人』藤田富士夫著から、要約で土版の謎を考察してみたい。

《・・・この遺物は、自然数で①～⑩までの序列を示している。土版が顔面表現とすれば「耳」に相当する⑥が、なぜ裏面に置かれているのか、これを表裏関係の数字資料と見れば疑問は解ける(③④絵図参照)。①は「口」、②は「目」、③～⑥までは「丸穴」、円形刺突文(突き刺す丸穴)で表現されている。よって、③～⑥までが一連の単位。表面には③+④+⑤=⑫が、裏面には③+③=⑥がある。表面の円形穴が計12個で、裏

面が6個である。表面の数字の和が裏面の和の2倍で構成されている。・・・》

《縄文人は少なくとも100を超える数字を理解していたのではないかと考える。》



③④ 不思議な土版・秋田県大湯環状列石の土版の数を導きだした図絵

秋田県由利郡象潟町大砂川遺跡の「屈折土偶の数法」は



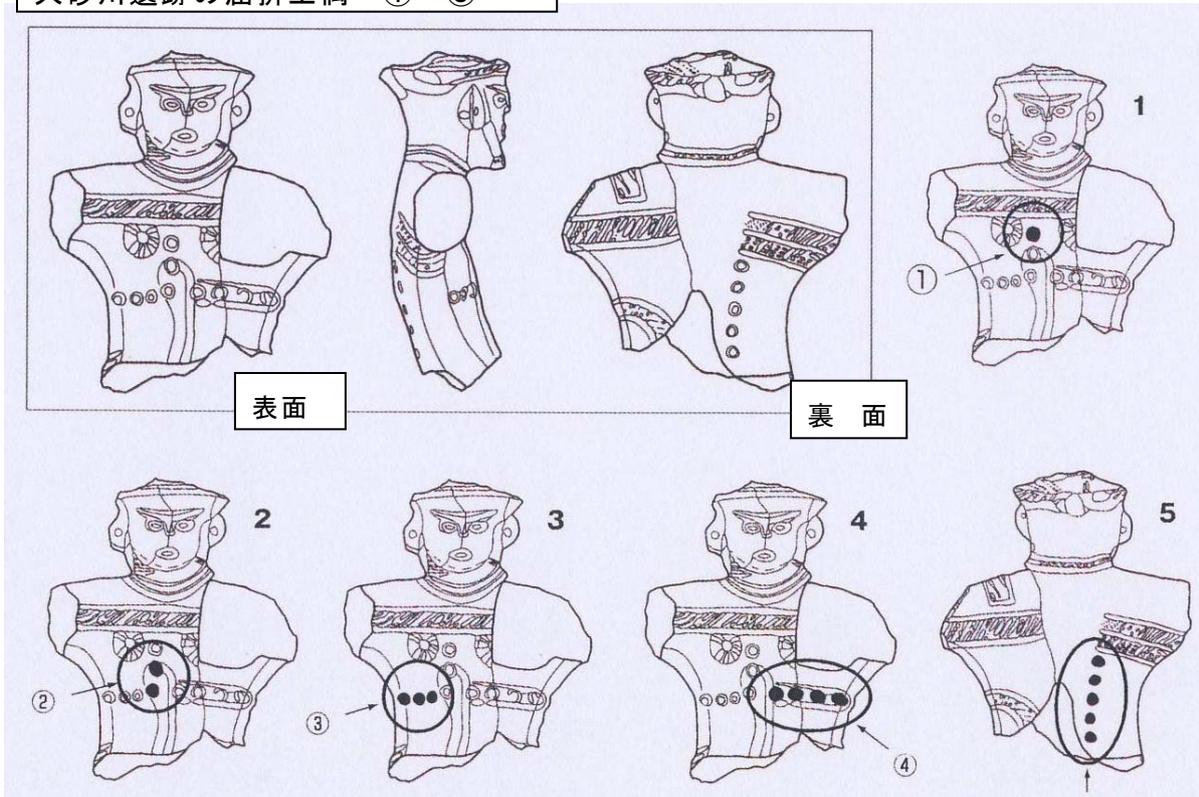
③⑤ 秋田大砂川遺跡・屈折土偶・縄文後期・高さ11.6cm 縄文後期
縄文時代土偶・土製品画像データベースより

縄文後期の屈折像土偶の頭部と胸部に丸印の円形刺突文しとつもん残存し朱彩しゅさいされている。

③⑤ 屈折土偶参照、高さ11.6cmを測り、本資料には①～⑤までの自然数が円形刺突文で表記されている。③⑥ 絵図、表面の円形刺突文は、①+②+③+④=⑩で合計1

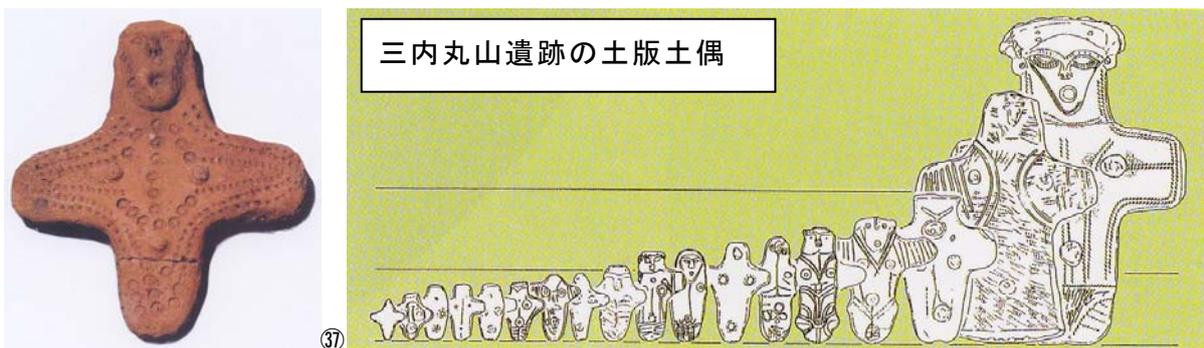
0個穴となる。裏面には円形刺突文が5個あって、表面は裏面の2倍数で構成されている。この数字穴印は、信仰上に必要な印なのか、生活での数量表なのか、解らない。

大砂川遺跡の屈折土偶 ①～⑤



③⑥秋田県大砂川遺跡の屈折像土偶 『算術する縄文人』藤田富士夫著より

青森県の「三内丸山遺跡の土版土偶数術」 中期中葉の十字型土偶

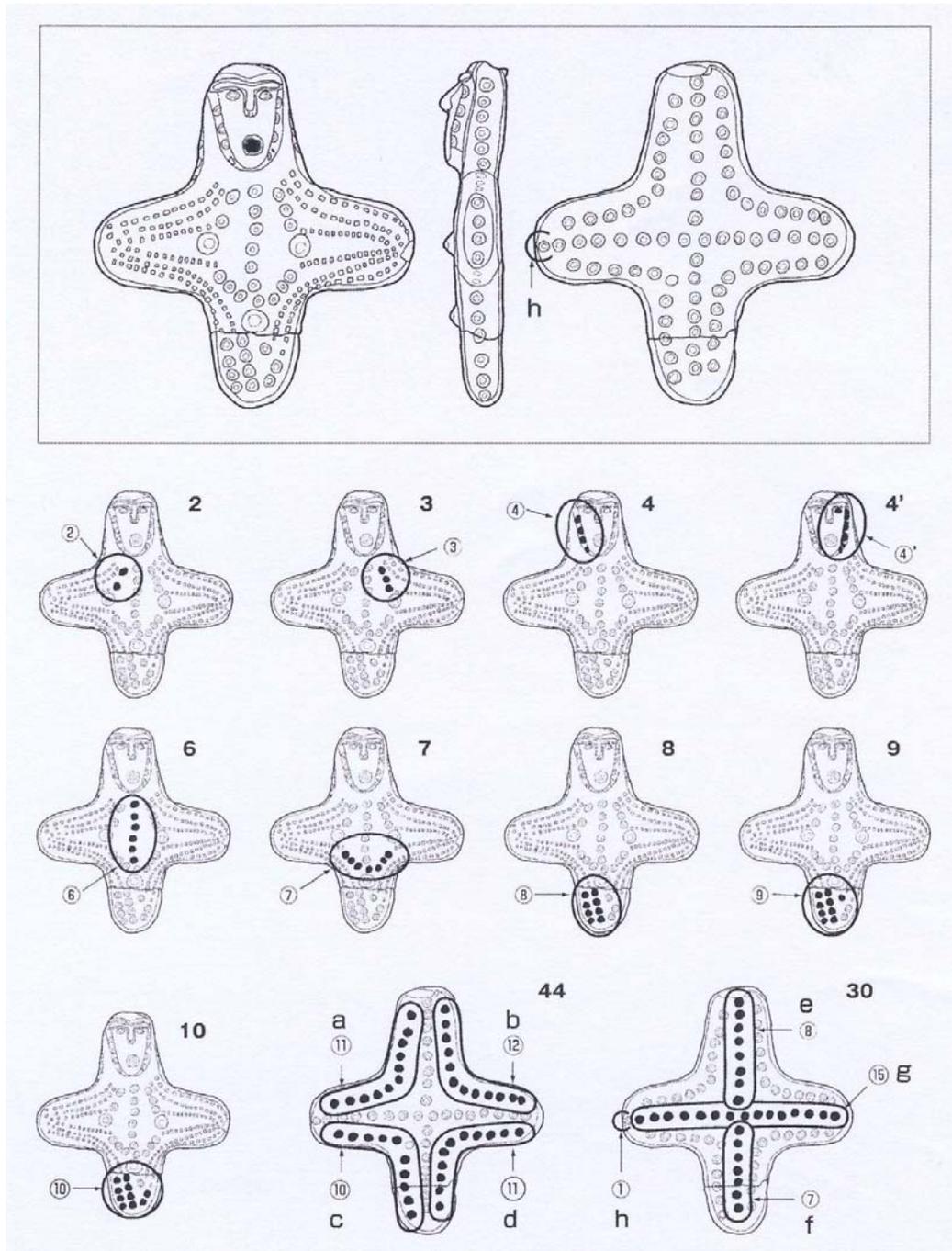


③⑦十字型土偶 14.3 cm 板状土偶の大きさは最大32.5 cm、最小3.7 cm、土偶2千点余出土

土版土偶数術の本資料は、中期中葉の十字型土偶で数字は円形刺突文しとつもんで表記されている。③⑦写真十字型土偶、高さ14.3 cmを測り、表面には①～⑩までの数が示されている。③⑧絵図、裏面にはa⑪、b⑫、c⑩、d⑪、e⑧、f⑦、g⑮、h①が刺突文されている。土偶裏面は縦横2群15個、合計30個を中心に置き、その周囲を対角線にある

2群22個、合計44個が取り囲む構成を成す。2群構成で組み合わせる数字配列と見れば、1つの群は⑮+⑳=㉟となる。それぞれが「37個単位」で成っている。つまり裏面の数字は、37個単位×2群=合計74個数と成っている。

青森県三内丸山遺跡の土偶 『算術する縄文人』藤田富士夫著より



⑳絵図 三内丸山遺跡の土版土偶 ①～⑩、㉟、㉟円盤型土製品にみられる数字の読み解き方

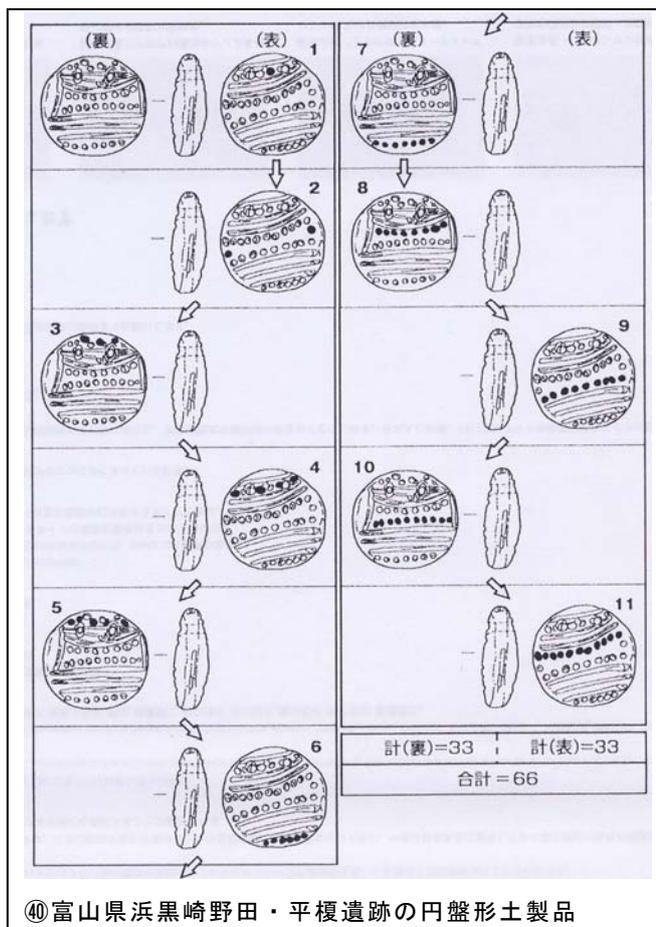
⑳絵図・①は口(他の円形刺突文とは異なるので除外としている)で、②+③+④左④右+⑥+⑦+⑧+①+②=㉟となる。驚くことに、土偶裏面で見えた「37個単位」と同数

を成している。本土偶は、「37個単位」で表象され、表面の列点総数が37個で、背面が37個の2群で計74個から成る。背面は表面の2倍数で構成されている。裏表の列点総数は111個で「同数並び」となる。また、22個や44個といった同数並びに、こだわりをもった構成を意図的に演出している。

富山県「円盤型土製品にみられる縄文人の数字認識」縄文後期後葉

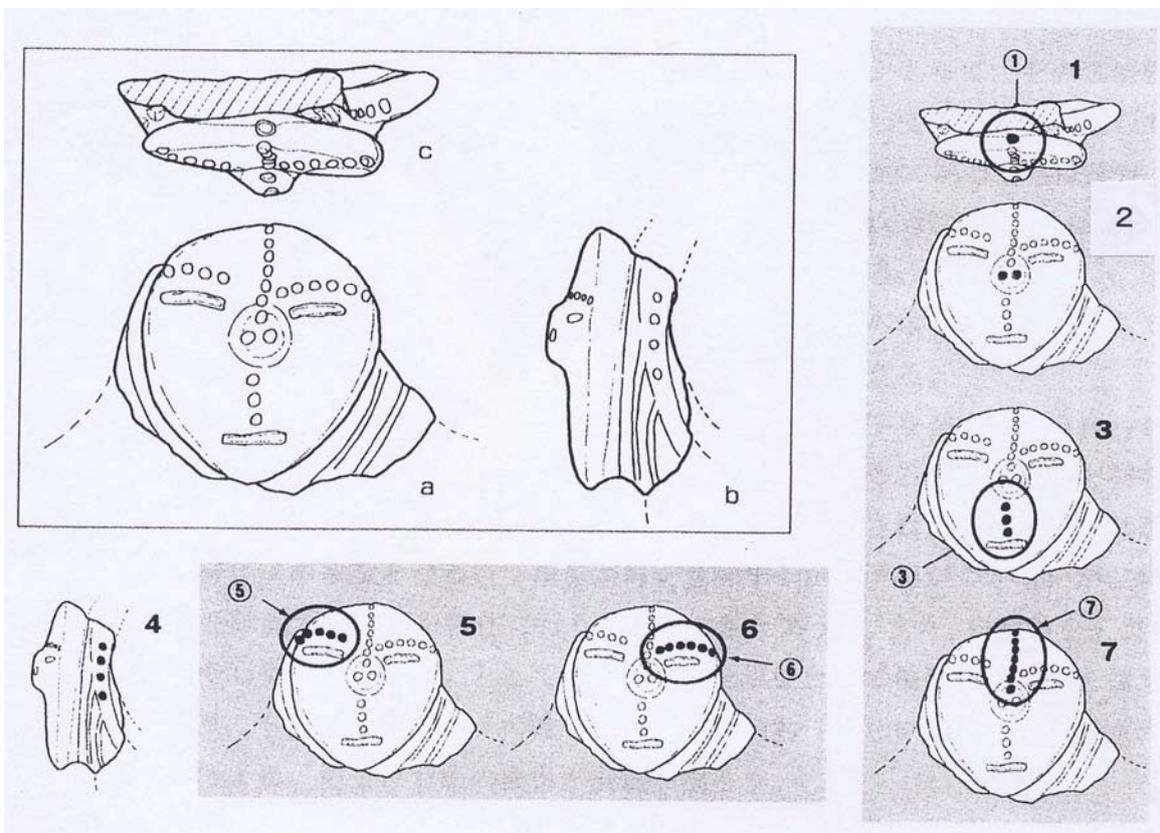
藤田富士夫著「富山市浜黒崎野田・平榎遺跡の円盤形土製品について」より掲載。

《浜黒崎野田・平榎遺跡出土の円盤形土製品について、藤田富士夫氏は縄文人が数を表した珍しい遺物として注目し、数字配列を読み解いた。土製品③⑨円盤型・直径4.2cm、最大厚1.4cm、重さ26gの完成品で表面は黒褐色で、垂下りの孔が2カ所開けられており、製作時に紐の形を押し付ける行為がある様で、孔の縁に紐の痕跡が残っている。④⑩絵図、横位に走る列点の個数のうち⑥～⑪まではっきり読み取る事ができる。列点でもって自然数列を示している。表面に①+②+④+⑥+⑨+⑪を配し、裏面に③+⑤+⑦+⑧+⑩を配している。表面の列点は計33個、裏の列点も計33個で表裏同数を成している。合計66個の列点が施された数字遺物とすることができる。左右対称形をなし、それが意図的に配され、巧みな計算されつくした数字の配置は偶然ではない。・・・》



富山県魚津市「^{はやつきうわの}早月上野遺跡の顔面土製品」縄文後期後葉

顔面土製品は縦径4.8cm、幅4.1cmを測る。④①絵図・本資料には円形刺突文で①～⑦までの自然数が表記されている。②は鼻孔を2個の小穴刺突で表わしている。他の①～⑦は②よりはやや小さな列点と刺突で共通している。①は頭頂部に、③は鼻と口の間に、⑦は眉間に置かれている。これ等の①+⑦+③=⑩となる。合計11個の列点で構成され、⑤は左眉に、⑥は右眉に表記され、これ等は⑤+⑥=⑩となる。合計すると11個の列点で構成され、表面の縦横表記で11の同数を成し、縦横で等倍数の関係を示す。尚、④は他の数字配置と異なり^{ほぼ}頬部に置かれたのは、④は計算から除外する意図があるのか、縦横数を⑩で表記する為に正面からは見えない頬に置いたものと思われる。

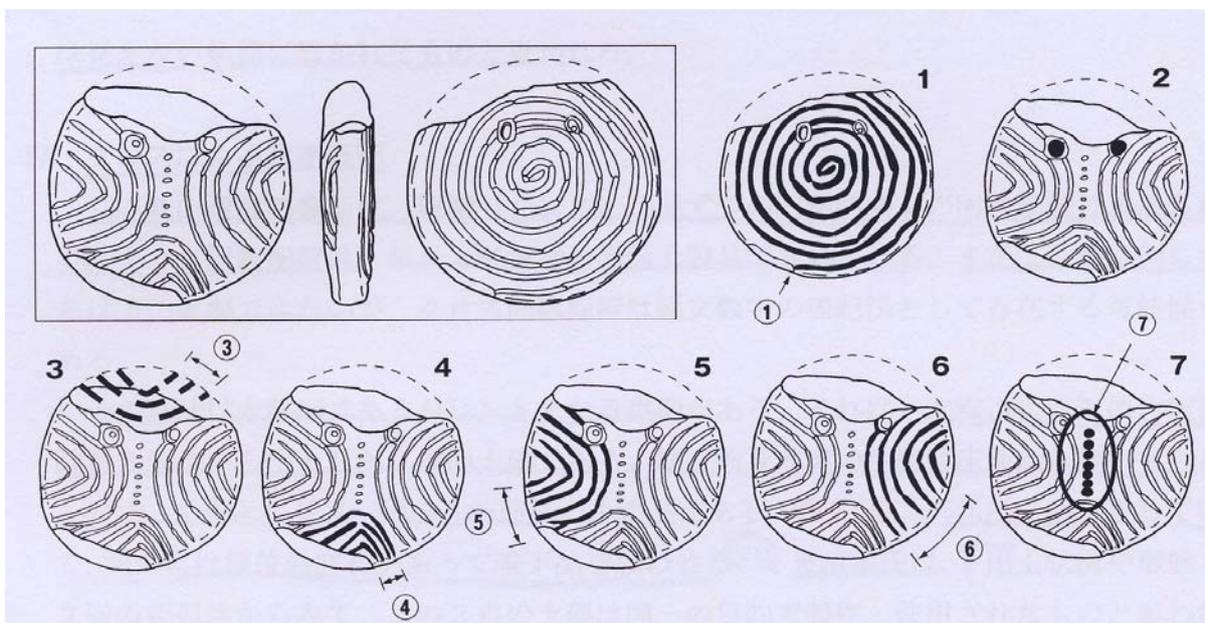


④ 富山県早月上野遺跡の顔面土製品 ①～⑦ 『算術する縄文人』藤田富士夫著より

3倍数関係を有する・富山県A遺跡(朝日町)の円盤形土製品 縄文後期後葉

④②絵図・完成品で、5.7×6.6cmを測る。円盤土製品は、「渦文」や「棒線」、「小石(列点)」で数字表記がされている。渦文や弧状棒線が沈線で描かれている中であって、中央部に配された縦位列点による⑦が際立っている。⑦は、本遺物を表象する数と解することができる。沈線の数は、①+②+③+④+⑤+⑥=②①で合計21となり、

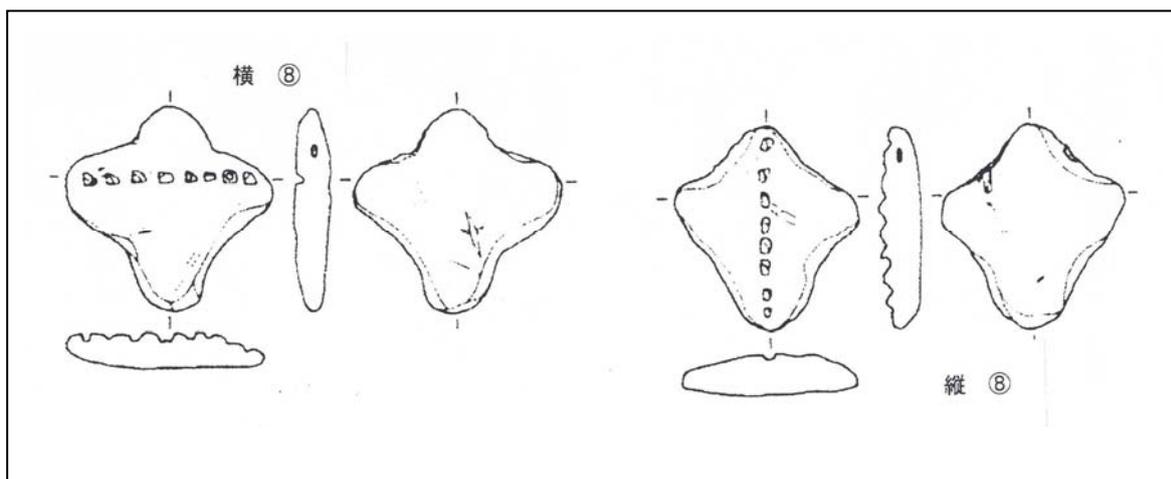
この数は⑦の3倍数である。



④ 富山県境A遺跡の円盤形土製品 ①から⑦

十字形の縦横円形刺突文の同数配置土製品・横8個、縦8個の押し穴がある

北海道松前町の白坂遺跡第8地点から出土した2点の土偶、④絵図・2点とも長さが、5cm前後の小型品となる。形状は十字形で、頭部に穿孔(穴)があり垂下品を思わせる。1点品に横に8個の円形刺突文、もう1点の縦に8個が施されている。横縦の列点にそれぞれ8個の数が、土偶は2個でワンセットの土偶となって、列点が意味する呪術や祭事に使用されたものかも知れない。



④ 北海道松前町の白坂遺跡より出土 十字形縦横刺突文「北海道の土偶」長沼孝著より

大和言葉の数え方 大和は本土こと。縄文・弥生の混じった数え方かも。

1 2 3 4 5、6、7、の後は 8 9 10 100 1000
ひ ふ み よ い む な → や こ と も → ち

その後の数え方 1・ひとつ、2・ふたつ、3・みつ、4・よつ、5・いつ、6・むつ、7・ななつ、8・やつ、9・ここのつ、10・とお、

更に「つ」を省略して ひ一、 ふ一、 み一、 よ一、 い一、 む一、 な一、
や一、 こ一、 と一、

20→はたち、30→みそ(じ)、50→いそ(じ)、60→むそ(じ)、70→なそ(じ)、
100→もも、ももち→八百万→やほよろづ、100万→ももよろづ、

縄文時代前期、中期、後期、縄文言葉は1万5千余年、そして弥生時代を経て、上記のような近い言葉が、大和言葉、縄文語が交わされていたと思われる。それは、日本列島で焼かれた縄文土器文様から想定し、縄文語が通じていたから、縄文文様の土器が全国に広がったと考える。黒曜石・翡翠・^{ひすい}アスファルト等の交易が、奄美大島から、北海道礼文島まで交易され、交易内容を想像すれば、現代人が想像以上に、数字の計算術（小石を並べて納得する数値を決めた）は優れ、遠路はるばる国々への交易品の数量は、縄文言葉交わしながら、ムラムラの産物を交換していたのであろう。

縄文人の知恵が発揮され、海側からは塩・乾燥魚介類→山側から→クリ・クルミをはじめ大豆・小豆・ソバ・アワ等々交易されていたのであろう。



古代の塩づくり・新潟市歴史博物館



ソバの花・猪苗代旅行記一覧より

おわりにかえて

表紙に「縄文の国宝^{めがみ}女神像」を載せたのは、女神土偶像は何のために作られ、何故に土偶は壊され、何故に埋められたのか、その謎の女神像に強く感心があったからである。女神土偶には多くの諸説があるが、大方の説は「女神像説」(安産の守り神)、「地母^{じぼ}神説」(多産・豊穰齋す)、「故意破損説」(病根を土偶に身代わりにさせ壊して埋める)「安産護符説」(出産時の身代わりにするために壊して埋める)等がある。

今回、『縄文人の「あの世」と「この世」』で、色々つたない考察を1章から8章で述べさせていただいた。筆者の能力不足で、説得力のある吉田敦彦著の『縄文土偶の神話学』、大島直行著の『月と蛇と縄文人』等々から色々勉強をさせていただいた。

『縄文土偶の神話学』では「ハイヌヴェレ型神話」(インドネシアの死体化生神話^{したいかせいしんわ}=人類・穀物等は原初の神や人間の祖先の死体から生まれたとする神話)に展開する娘ハイヌヴェレが殺され、その死体を地中に埋められた場所から、「作物(食物)起源神話」(神を殺すことで食物誕生神話)が生まれた。この論説に筆者は刺激され、即刻、山梨県の「釈迦堂遺跡博物館」へ、壊された土偶を見た時、作物起源神話に納得した次第であった。

しかしながら、女神土偶は妊婦を模しており、その女神像をどのように捉えたらよいか、その縄文文化の深層に、アイヌ文化や琉球弧の文化を考察すれば、子孫繁栄が第一にあると考える。縄文人の土偶製作の思考には、あの世の「先祖霊」に感謝し、そのカタチを表したモノが女神神像と考える。縄文人の願いは元気な赤ちゃん誕生させること、母子共々安心のお産ができるよう、女神土偶に祈願したと推測する。

縄文時代は約1万5000余年の歴史を刻み、子孫繁栄を絶対条件し、様々な危機から子供も守るのは、何時の世でも親の責任である。子供がこの世に誕生することは、天に居られる「先祖神」たちが集会を開き、次は誰々の子供を送り出そうと、子供の誕生の順番を決めていたのが、縄文思想の信仰であろう。この世に誕生した子供は先祖神たちがあの世で、寄合で決めたというアイヌの思考と同じであろう。

このような思考を持つ縄文人は、母親の健康と、健やかな赤ちゃん誕生を女神像に向かって、ひたすら対座祈願していたのではないだろうか。

第2章の「アイヌの葬儀」(P24~30)で述べたように、アイヌ民は現代でも生死論の深層に、「あの世は、この世と何にも変わることなく、ただ、上と下、左と右、昼と夜、完全と不完全が「あべこべ」になっているのが「あの世」と考えを持っている。

現在の我々の葬儀に於いても「お通夜」は太陽が沈み、周りが暗くなり夜の帳^{とぼり}が下

りる頃に、「お通夜」は執り行うことは、この思想に従っているからである。その儀は、「この世」では夜が始まるが、「あの世」では陽が登り「朝明け」の時間となるからである。第5章で沖縄宮古島の「アンガマ」(盆の先祖霊祭り 73頁)で「生きている人間は、太陽が東から昇るので東枕にする。後生(あの世)では西から陽が登るので西枕にする」と爺と婆が、この世とあの世を説明している。

我々の葬儀でも、「この世」から、「あの世」へ「モノ」を送るには、あべこべにして送る、「カタチ」(仕草)は行われている。地域によるが、死装束は必ず左前で着付けし、手甲、脚絆、草履を左右逆に死人身支度をさせ、故人の愛用していた茶わん等を割り「あの世」へ持たせる、「送り」儀式となる訳である。

その延長線で考えられる事は、縄文時代の土偶が何故に壊され、埋められるのか、それは現在の葬儀から考察すれば、女神土偶を壊して「あの世」へ送れば、あの世で「ちゃんと」した女神土偶になって届き、先祖神たちに願いを聞きいてもらうためであろう。更に、アイヌ民族的思想で云えば、「生命誕生は、全て先祖の生まれ変わりで、胎児は全て先祖の誰かの霊が、この世に帰って来て胎児になったものである」と。

また、琉球弧(沖縄)の人たちの生死観に付いては、第4章「琉球弧の古層の神々」で述べた通りで、「人があの世へ旅立後、33年を経過すると神になる」という思想を強く持っているのである。沖縄諸島でも異なる地域もあるが、あの世へ行った人は、先祖霊たちは、この世と同じ様に生活をして過ごしていると想われている。それは沖縄諸島の亀甲墓を見れば一目瞭然で、東海の彼方にある水平の理想郷の神、ニライカナイ(東海の彼方のあの世)に居られる先祖神は、守護神となって子孫を守っている。天上神オボツカグラ信仰する地域は「神がオボツ山から降りたまう」と信じ、天に居られる先祖神たちが守護している存在、即ち、神とは血の繋がった親戚関係なのである。先祖神は、山頂や海の彼方に居られ、子孫を何時も見守ってくれる有難い親戚の「神」なのである。

縄文時代は呪術社会であり、生と死と再生の一体化した文化で、死に関する所作は埋葬という行為で、



この中空土偶は男のシャーマン説も考えられ、霊力を持ち、ムラの指導者か地位者と思われる。像はシャーマンの死去時に、一緒に土坑墓に埋められたと推測、もしかしたら、この像の持ち主は、縄文人と少し離れた沿海州・樺太からやって来た少数民族とも考えられ、自然界の精霊と交信ができ、先祖神も交信する役目を担っていたのではいか。参考にロシア沿海州のアムール流域先住民族のシャーマンの持ち具を見る。



A・ハバロフスク州立郷土博物館刊『СЭВЭННІ・カタログ』刊「カルト彫刻コレクション」より。
 B・ウリチ族(東スラヴ系民族)の木彫像、擬人化されたイメージの楕円形頭顔が垂直にたれ、モデル化した組み合わせが、鼻の線を形成している。
 C・ウデヘ族(ツングース系民族、間宮林蔵が記した「キヤツカラ」と比定する)。木彫の擬人化、頭が丸く黒く塗られ顔が平らで、目が窪みに青いビーズで出来ている。
 D・楕円形体で側面にエンボス加工(浮彫)が施され、石は玄武岩加工となる。A～Dの擬人化像は、シャーマンが自然界の精霊と交信の像と考える。(筆者のロシア語訳による。尚、沿海州の先住民族について拙書『アムール下流奴児干都司と永寧寺と先住民族たち』の第5章・第7章参照下さい。)

北海道の先住民・アイヌには「熊送り」(イオマンテ)儀礼がある。あらゆる自然現象や、モノをカムイ(神)の化身と捉え、生命が終わった時や、モノ・道具が壊れたりすると、それらをねんご懇ろにカムイの国へ送り返す儀礼行う習俗を持っている。

『日本書紀』に7世紀に阿倍比羅夫が北海道へ遠征を行い、ヒグマの毛皮を持ち帰り、朝廷間で珍重として扱われている。本州との交易が活潑になるのは9世紀以降であるが、熊・鮭・オオワシ



(弓の羽根に使用)の羽等の産物は本州では古来より流通している。オホーツク海に面した道北・道東にはオホーツク人(網走モヨロ貝塚)が進入の足跡はある。千島列島やサハリン、沿海州等と交易を行っていたアイヌ民族の思考は、これ等の文化・交易を考え合わせれば、中空土偶の生まれた文化背景には、サハリンや沿海州の文化の影響を受けていることが推測できるのである。

中空土偶のふるさと(函館市南茅部著保内遺跡) 昭和50年に現函館市尾札部町で、ジャガイモ畑より農婦によって発見された。南茅部遺跡(縄文後期、約3200年前)からは94カ所の遺跡が存在し、これ等の遺跡から出土遺物は400万点を越えている。集団墓・配石を伴う土壇墓からはヒスイ勾玉(糸魚川産)と、赤漆(ベニガラ)が塗られた櫛くしも出土し、北海道地域での縄文精神文化、信仰や祭祀の実態を明らかにする上で重要な遺跡群となる。本州の縄文遺跡は大きな川岸の近隣で、縄文文化が発展をみるが、北海道は海からの直接の舟による交通・交易等で地域は発展していたことが分かる。



中空土偶の故郷・函館市南茅部遺跡ガイドより



南茅部には94カ所の遺跡ある



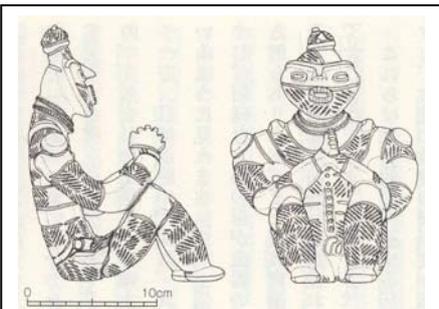
合掌土偶 がっしょう 縄文後期、八戸市風張1遺跡、是川縄文館蔵。像の高さ19.8cm、幅14.2cm、奥行き15.2cmが出土。「風張1遺跡」は八戸市庁から南方へ4.3kmの所、出土時に欠けた左足部分は、2.5m離れた西側の床面から出土。住居の片隅に置かれた状態で出土し、座った状態で両腕を膝の上に置き、手を合わせから合掌土偶と称され、お腹の丸点印は正中線(妊娠線)が見え、座産土偶の形(姿)で、足を開き腹に力を入れている安産の姿となっている。

「合掌土偶」の出土状況 合掌土偶の出土状況は、第15号竪穴住居跡の出入り口から向かって奥の北壁際から出土し、右側を下にして、正面を住居中央に向け、背面は住居壁面に寄り掛かるように出土した。また、出土時に欠けていた左足部分は、2.5m離れた西側の床面から出土し、土偶は一般的に捨て場や、遺構外からの出土例が多いが、住居の片隅に置かれた様な状態で出土した例は非常に少ない。両腿の付け根及び膝と腕が割れていて、割れた部分にアスファルトを使って修復している。長く使用していた様子が見られ、また、土偶の顔面や体の一部等に赤色顔料が認められ、使用時は全体が赤く塗られていたと考える。この土偶には女性器をはじめ、眉毛、鼻、鼻穴、目、指、肛門など人体的特徴のほか、頭部に一つの鬘型の髪形がついている。座りの姿勢は、座産の出産姿勢と考える。(是川縄文館より)



合掌土偶の出土時の姿

座産・この合掌土偶は、これは座してお産する土偶、つまり、お産家族が祈る対象の土偶と考える。入墨や身の装身具から考えれば、女姓の呪術師(お産婆)の声掛けで、妊婦を座らせ両脚を開き、腕を胸前で力瘤させ、股間に嬰兒の誕生させる、祈りの座産土偶と思われる。(参考文献『縄文人からの伝言』岡村道雄著より)



合掌土偶=座産土偶・是川縄文館より

合掌土偶像を考察する この合掌土偶は、「座産ポーズの安産祈願像」と推測する。家族に信頼されている呪術師は、ムラの妊婦のお産に呼ばれ、家族の想いを受けて、呪術師は靈力を發揮して安産を祈る。出土状況は、合掌土偶は膝や腕をアスファルトで接着して使用していたと説明があり、このことを考え合わせると、この合掌土偶は呪術師者の持物で、本人が死去時にムラ人たちは土偶を少しずつ壊し「送り」の儀式によって埋められたと推定する。

次に紹介する話は、昭和時代の話となるが、土偶の役目は何であったのかを、少し理解できる説話を紹介してみる。岩手県東磐井郡藤沢町郷土研究会(昭和16年)が出した『岩手藤沢誌』にお産説の話がある。(『山の神』「第1章・蛇と山の神」の「八・産の神としての山の神」吉野裕子著・講談社学術文庫より)

その1、《・・・年中行事・「初山の神」 1月12日の初山の神という祭りがある。これは年が改まって初めての山の神の祭りで、婦人たちが、妊婦のいる家に集まり、精進料理を作り山の神に供え安産を祈る。山の神は、^{えたい}得体の知れない神様で、山だけを守ってくれるというのではない。主婦のことを「山の神」というように、家の中を取り仕切るばかりか、お産の手伝いまでしてくれる。妊婦が産気づいても、なかなか子どもが生まれない時、夫は馬を引いて山の神を迎えに行くのである。初山の神も、婦人たちの最初の集會に、一同一番の痛切な願い事を、神に祈願する行事なのである。》

その2、《・・・誕生と成人・「オンバ様」 福島県の猪苗代湖湖畔にある「オンバ様」は、産の神として有名である。オンバ様の掛け軸を家に掛けて安産を願っている。子供が生まれると必ずお礼参りに行く。オンバ様は女の神とか、山の神とか、人によってはオバ神様だという人もいる。昔は、難産の時は、主人が馬を引いてオンバ様を迎えに行き、馬の止まった所から引き返して来る。そしてオンバ様が来たというと、生まれるのだという村もある。妻が産気づくと、主人が馬を連れて山の神を迎えに行くという村もある。オンバ様を山の神だという人も、そこら辺から来たという人もいる。オンバ様はオバ神だと言うのは、子供の成長にウバなどと同じく、年長の女性が関与する習俗の一つである。子供がこの世に生まれてくる時、オバと呼ばれる女性が関与している例は多い。神奈川県足柄上郡では、子供が生まれてくる時、お尻の青いアザ(蒙古斑)は、地獄の鬼ババが、「^{しやば}娑婆へ行ったら早く戻ってくるな」といってつねった跡だという。このアザが大きいほど長生きすると伝える。地獄の鬼ババとオンバ様とは直接関係はないが、両者は子供の誕生をこの世へ迎える点と、あの世から送り返す点、つまり生と死の境にいる者では一致している。オバ神は村の境とか、山の麓とか言われるのも、人生儀礼の生と死の境のオバ神と同じ意味を持つものである・・・》とある。

2つ説話の考察を吉野裕子著より要約で 《・・・諸例を要約すれば、山の神は人間の誕生に深い関わりがあり、女が無事に子供を産むことは、山の神がその^{うぶや}産屋へ^{らいりん}来臨が絶対必要条件とされる。山の神が産の場^{きあ}に来合^あわすこと、それが第一儀である以上、夫は山に向かって馬を^ひ牽いて行き、その馬が歩みを止めた所、あるいは^{いなな}嘶く所まで神を迎えに行く。こうして山の神を乗せて産婦の許に帰れば、そこで初めてお産が始まる。「山の神の来臨、即ち、人間の誕生」ということになる。人間の誕生とは、決して

単独、且つ唐突のものではない。山はこの世ながらの他界であるが、そこで山を中樞にして、人は生死の輪廻を繰り返す。つまり誕生とは、祖霊から人への変身、死とは人から祖霊への変身ということになる。オンバ様とは、山嬢の尊称で山嬢は、元は「山ハハ」(山カカ・山カガシ)のことで、この「山ハハ」は山の神であり、「ハハ」は「母」に通じ、「山ハハ」は「山母」となり、更に「山嬢」に転訛し、山に独り棲む老女は常人とは思われず、異形・妖怪に推移して行くのは自然の理である。・・》と説明される。

《2つの説話を拝読すると、縄文時代の人形土偶文化は終り、縄文人は平野に出て稲作農耕を始める。衣食住の安定を獲得(弥生時代)したが、安産祈願だけは縄文文化に従い、仏教伝来後も「オンバ様」に変遷してその信仰は現在まで続いている。》

オンバ様の立膝姿は妊婦が頼れる姥神である



③会津若松市長福寺の御姥尊 ④猪苗代町優婆衣霊 ⑤富山県立山町おんば様 ⑥会津西方観音堂おんば様

【③会津若松市日新町(祭礼は毎年7月1日)の曹洞宗長福寺の観音堂に祀られているおんば様。

霊験のある「姥神」は左膝を立て、左手に綱を持ち、口を開き、胸は開け、恐ろしい形相。

④猪苗代町関都にある優婆堂の本尊、優婆衣霊の石像。このおんば様に祈願の帰りに、白い紐とシャモジ貫い、紐はお産時に手を握る力帯に使い、シャモジは福を召し上げる意味となる。

⑤立山信仰の里、立山町芦峯寺集落のお堂に、おんば様座像がある。永和元年(1375年)に造られたという。⑥三島町西方大杉観音堂に祀られている木製のおんば様。石田明夫氏によると会津には80カ所あるという。「おんば様」は立膝手に「力綱」を持ち、顔の苦悩相は出産に耐える妊産婦の姿像を表す。※おんば様は一般にばば様、うば様、ばば、ばんば、鬼ばばと呼ばれ、

『仏説地藏菩薩発心因縁十王経』(12世紀末に成立の偽経)に出て来る經典の奪衣婆を指す。悪事を働いた死者は十王の審理(7回)を受け、地獄道、餓鬼道、畜生道に分けられる。※優婆衣霊は奪衣婆を指し、鬼婆は三途の川を渡る亡者(悪事をした者)の服を剥ぎ取る役。※写真・③と

④の写真・記事は『おんば様』石田明夫著転載。⑤ブログ・「立山のおんば様」より。⑥「山びこ」おんば様より】

会津の「おんば様」の信仰 会津若松市日新町の長福寺や猪苗代町関都を中心に安産信仰が知られ、この安産信仰はお産が軽く済まされる様にと祈願するもので、古よりお産の苦勞は大変なものであった。小さく生んで大きく育てる教えが一般的であり、サラシを巻いて大きくなるのを押さえていた。おんば様は、昭和初期までの座産の姿や、既に安産信仰されていた如意輪観音像(如意宝輪と法輪の力によって人々を救済する菩薩)に酷似していることから、安産信仰とされ会津全域に広がったと考える。昭和17年頃までのお産は、座産が一般的であり、座産の姿から庶民に信仰されたと考えられる。「おんば様」は、特に会津地方では、座産のスタイルがおんば様の姿に似ていることから、安産の神として親しまれた様である。(『おんば様』石田明夫著より)

神饌(供物)について 『山の神』吉野裕子著「第2章・亥(猪)と山の神」より

《・・伊賀青山町(三重県伊賀市)の例・「山の神の喜ばれる神饌は土地により異なるが、最も特色のあるお供物といえば、それは「シトギ」(粢)であろう。シトギは米を水に浸して柔らかくして米を突いて粉にし、それを水でこねて丸めた食べ物がシトギで、純白だからシラ餅、オシロイ餅などの名がある。シトギは何も山の神の専有供物ではないが、山の神には最も多いお供物といえよう。シトギは、延喜式には見えなく、白米とか黒米というのは見えているが、それでいて神饌となると、シトギは重要なお供物となるのである。

東北から九州迄、シトギを山の神に供える所は非常に多い。シトギは、今は粳米で作っているが、稲作以前から存在していたようで、古代に於いては、ヒエ等でシトギを作っていたのではないかと思う。その他にデンプン質のカタクリ・クズ(葛)・イモ(芋)等でも作っていたらどうか、それが、稲作が始まってからは、専ら粳米に代わったものと思う。しかも山の神に供える時に、「わらづと」(藁苞)に入れる古風な形で、伊勢ではシトギをシラ餅といい、山の神祭りの供物として無くてならものとなっている。

伊賀も同様であるが、この「わらづと」の中心部を開いて、そこへ白いシトギを入れて供える方法は、見ようによっては、性的な祭りという感じがする。伊賀の青山町の一部の北山では、シラ餅に渋柿の赤い果肉を挟み込んでお供えする風習があって、これなどは一見性的なものに見える。山の神は生産神であるから、祭祀に性的要素が濃厚なのはやむをえないであろう。

また、伊賀では「ミソギ」といって、神木などの枝で男女の人形を作り、これに顔

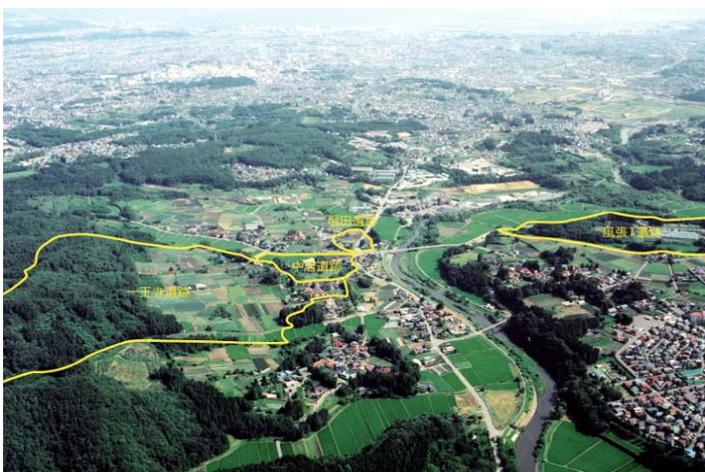
を描き、性器までもつける。祭りの時には、フッタイ(男)とメッタイ(女)とを腹合わせに重ね、交合の状態を演じさせる所も少なくない。極めてリアルに激しく何度も何度も交わせ、そうすることによって、秋の実りを山の神に約束させようとするのである。こういう性的な山の神の祭りをするのは、湖南地方(琵琶湖周辺)では珍しくなく、一般的な姿である。・・》(「山の神」『講座・日本の民俗宗教3』弘文堂刊所収より)



⑦神饌・樂樂福神社(鳥取) ⑧シトギ(シラモチ)アオキの葉包(亀山市)⑨藁苞納豆『Rico's Room2』より

「合掌土偶」のふるさと・是川中居遺跡 八戸市大字是川字中居・是川縄文館周辺

八戸市街地から南へ約4km、北上山地に源を発する新田川の左岸、河口から約7kmの地点に所在する。地形は標高10～20mの台地部分と北川の長田沢・南側の沢の低湿地部分に分けられ、総面積は約45000㎡、現状は畑・水田・宅地となっている。近隣に一王寺遺跡、堀田遺跡、新井田川を挟んだ東側、約400mの所、後期後半の環状集落、風張(1)遺跡(合掌土偶出土)となる。縄文時代晩期の亀ヶ岡文化を中心とする中居遺跡、前期・中期の一王寺遺跡、中期の堀田遺跡、この3つの遺跡を総称して、是川遺跡と呼んでいる。(八戸市教育委員会・文化財グループより)



これかわ 是川遺跡全景(東京ドーム7個分)・八戸市の南東部、新井田川沿いの台地に広がる遺跡となる

話が横道にそれましたが国宝土偶にもどります。



縄文の女神 ^{めがみ} 縄文時代中期、山形県最上郡舟形町西ノ前遺跡より出土。縄文時代中期約 4500 年前。JR 舟形駅の西約 300m の所。女神像は、高さ 45 cm、幅 16.8 cm、腹厚約 7 cm、股下脚長約 15 cm、重さ 3.155 kg、土偶像の中で最も大きい。
「縄文の女神」は、頭、胸、腹、腰、両脚の 5 個に分かれ破片は 6 m の範囲から散見、頭部は半円形、W 字のシャープな胸、尖った腹、尻は突き出し「^{あな}尻形土偶」と呼ばれている。(写真・山形県立博物館総合案内別冊『国宝・縄文の女神』より)

「縄文の女神」の出土状況 土偶は主に南側の沢跡（落ち込み遺構）から出土。縄文土器、石器、土偶等整理箱約 750 箱の遺物が出土している。遺跡から 9 棟の竪穴住居跡、フラスコ状土坑、土器等を大量に破棄した沢状の落ち込み遺構から検出し、「縄文の女神」の頭部は扁平な扇形で、上下に 6 つの孔が開いている。同遺跡から下記の残欠破片 47 点が出土、これも国宝破片「^{つけたり}附」となっている。

右は縄文の女神発見時の姿像・『国宝・縄文の女神』より



国宝「^{つけたり}附」・残欠破片 47 点出土し破片出土により大型土偶が作られていた



「縄文の女神」のふるさと 「西ノ前遺跡」は、最上郡 JR 舟形駅西約 300m 在所、小国川（最上川へ合流は 150m）左岸の舌状の河岸段丘上、遺物は土器が多く、狩用道具の石鏃（^{せきぞく}矢じり）は少なく、穀物の加工に使う磨石や凹石（^{すりいし}くぼみいし）が多く出土している。この地域では動物捕獲より農作栽培を営んでいたと考えられ、大豆、小豆、ヒエ等が栽培と推測する。ここで誕生した「縄文の女神」は子孫繁栄、豊饒（農作物）、自然災害から守護神像であり、自分たちの願いを聞いてくれる女神像であった様である。



遺跡位置図、赤丸が遺跡地点



遺跡全景写真(南より)半円形が当時の発掘現場状況



仮面の女神 縄文後期の約 4000 年前。茅野市尖石^{とがいし}縄文考古館蔵。中ツ原遺跡より出土。高さ 34 cm、2.7 kg、出土状態から土偶の右脚を壊し、土偶内部に破片を入れ、他の破片で割れ口を塞ぎ、土坑墓に埋葬していた。土偶用の小さな穴を掘り、壊した右脚と胴体を一緒に埋納され、仮面の女神像を使い神事を取り仕切る人物が死去に伴って埋葬されたものであろう。壊した右脚と破片も埋葬している事から、「仮面の女神」は死者の再生を祈り埋められたものと思われる。

「仮面の女神」の出土状況 遺跡中央の墓と思われる場所から横たわり、右足が壊れた状態で出土し、しかも、割れた時にできた破片の一つが、胴体の割れ口にはまり込み、これは人為的に壊されたと考える。死者と一緒に埋葬されたものか、仮面の女神だけが単独に埋められたものかは、今後の研究を待つ。女神の顔は、三角形の仮面を表現し、胸からお腹にかけて、渦巻の文様は何か神経を集中させ、当時の人間をも吸い込む様な迫力を持っている。土偶の中は空洞で、中空土偶となっている。



『縄文ガイドブック』尖石縄文考古館より

« 「仮面の女神」「縄文のビーナス」には人間の様に目をつけ無い。何故か、その考察する確信的な資料を見ていないが、畏れおおい先祖神と向き合う事は、「目」を隠す必要があった縄文信仰思考があったのであろうか。 »



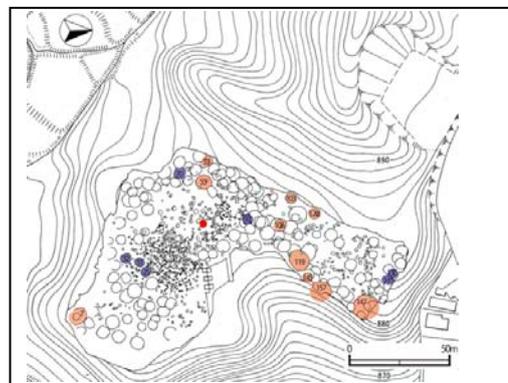
縄文のビーナス 縄文中期、茅野市尖石縄文考古館蔵。茅野市棚畑遺跡から出土、前3000～2000年。高さ27cm、重さ2.14kg。妊婦を彷彿させ、手足は短くアンバランス、吊り上がった目は、人間の生命力を強調している。豊かな腹部の繊細なカーブ、頭部にはヘビ模様が描き込まれ、土製には細かい雲母片が練り込まれ、滑らかな光沢を放つ地肌がオーラを発し、女神像の霊力を感じさせる。この縄文のビーナスはほぼ完全な形で見つかったことは珍しい。
(尖石縄文考古館より)

「縄文のビーナス」の出土状況 ビーナスの頭は頂部が平らに作られ、顔はハート形のお面を被ったような形をし、切れ長の吊り上がった目や、尖った鼻に針で刺したような小さな穴、小さなオチョコボ口は、八ヶ岳山麓の縄文時代中期土偶の特有の顔を持っている。耳にはイヤリング用の孔か、小さな孔が開けられている。腕は左右に広げ、手も省略され、又、胸は小さく、摘み出されたように付けられ、お腹とお尻は大きく張り出し、妊娠女性を表している。集落中央広場の浅い土坑の底に顔を西側に向け横たわって出土する。



出土時の縄文のビーナス

縄文のビーナスを推測すれば、^{どこう}土坑(楕円形の墓穴)に埋められほぼ完全な状態で出土しているのです。この「縄文のビーナス」はムラの集落の中央広場の⑩集落図・ここに祀つられていたのではないかと、そして何かの都合により、儀式の「送り」の儀式で埋めたのではないかと。⑩ムラの集落図を見て、その中央広場に祀られていることは、ムラの妊婦に「子宝塚」の様な赤ちゃん誕生祈願所になっていたものか、又は「子産石」として「お産婆神」になっていたのではないかとと思われる。



⑩赤○印土偶出土、オレンジ色と紫色。

ムラの中心は土壇墓、その周りが住居跡

ビーナス像は宝像と尊崇され、広場に置かれ、「社」や「神籬=ひもろぎ」(「ひ」は霊、「もろぎ」は竹や柴で編んだ垣根)の中で祀られ

方をしていたのではないか。ビーナス像は壊されず地中に埋められ、そしてムラの歴史時間が過ぎ、女神の姿像を正確に覚えているムラ人もいなくなり、時代と共に女神像の姿は変り、やがて異なる女神土偶が生れた歴史経緯となったのではないか。



⑪



⑫

⑪^{ひもろぎ}神籬(神と御幣)神が来臨・(古神道講座より) ⑫^{こうみいし}子産石・横須賀市秋谷久留和海岸(民俗探訪会より)

「縄文のビーナス」ふるさと(棚畑遺跡)・仮面の女神のふるさと(中ツ原遺跡)

茅野市には348カ所の遺跡があり、その内237カ所が縄文時代の遺跡となっている。そこから出土した「縄文のビーナス」・「仮面の女神」の国宝の土偶は、縄文中期(約5000~4000年前)となっている。縄文中期は現在と同じ気温といわれ、中部高地から関東地方を中心に集落が急増し、長野県八ヶ岳山麓、800~1000mにかけて、縄文中期には、爆発的に集落が増えた時代となる。八ヶ岳山麓には、クリ、ドングリ、クルミ等の堅い殻の実をつける落葉広葉樹帯が広がり、山菜、キノコ、シカ、そして、ノウサギ、キジ、カモ等の動物もたくさん生息していた。また、幾筋もの川が平野に向かって放射状に谷を刻み、谷と谷の間に長峰丘陵の台地を形成し、その台地に集落が広がり、水を確保出来る地形、それが八ヶ岳山麓住環境であった。



八ヶ岳の^{ふもと}麓は広大な裾野が広がっている・正面は八ヶ岳連山(茅野市縄文ガイドブックより)

縄文時代遺跡図

- ①御座岩岩陰遺跡 ②栃窪岩陰遺跡
- ③上之段遺跡 ④中ッ原遺跡
- ⑤駒形遺跡 ⑥中村遺跡
- ⑦下菅沢遺跡 ⑧棚畑遺跡
- ⑨与助尾根遺跡 ⑩尖石遺跡
- ⑪稗田頭B遺跡 ⑫梨ノ木遺跡
- ⑬藤塚遺跡 ⑭下ノ原遺跡
- ⑮阿弥陀堂遺跡 ⑯構井遺跡
- ⑰御社宮司遺跡 ⑱勝山遺跡
- ⑲阿久尻遺跡



尖石縄文考古館刊『茅野市縄文ガイドブック』より

ひとがた
人形土偶は何の為に作られ、どの様に使われたか 土偶の使われ方や意味などについて決定的な定説はないが、土偶は何のために使われたのかを考察すれば、「呪術師」(シャーマン)の姿が浮かぶ。祖霊・精霊のイメージを含めて女神像を尊崇し、受胎、安産、子の成長、厄払い、家内安全等のムラ全体や、家族、女性の願いを聞き届けてくれる対象の土偶であったであろう。土器には使用寿命に限りあり、周辺の人々が拠点集落に持ち寄って、“送り”や“祭祀”“儀礼”を行ったと考える。土偶の役目は、地母神説は多産・豊饒、子孫繁栄説、病の身代わりに壊す説、バラバラに壊して地中に埋める作物誕生神話説、作物豊作説等もこれに準ずるであろう。

呪術師は今日の巫女、恐山のイタコ、アイヌ民族の「ツスグル」(伝承巫女)、「ポタラグル」(一種のシャーマン)は、沖縄の「ノロ」「ユタ」などに繋がっていると考える。秋田県では最近まで、葬儀に弓を持つ女性が現れ、葬儀の後に死者の霊を呼び出し、言葉を伝える「エジッコ」と呼ばれる人が居た。この人たちも縄文期に通じる習俗かと思われる。(参考文献『縄文人からの伝言』岡村道雄著より)

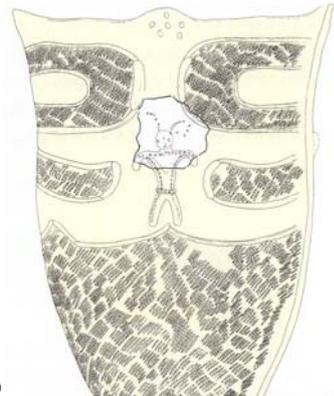
ひとがた
縄文の人形土偶は、 集落の長(呪術者)による先祖神との交信ができる頭が、縄文女神像を操ったのではないかと思われる。下記の⑧・⑨の土器の頭部に小孔があり、その孔に羽を挿して靈力を高めたシャーマンの姿が浮ぶ。土器に表現された円い刺突文(竹管等で突く)と人体はシャーマンと推測する。



⑬



⑭



⑮

⑬ 巳を戴く神子・中期・井戸尻考古館 ⑭ 羽付き縄文人・中期 ⑮ 深鉢形土器文様推定図御所野遺跡

⑬の神子の頭上に孔があり、その孔に羽等の祈禱具を挿せる土偶となっている。

⑭、⑮は深鉢形土器の破片で、曲線的な縄文文様の間に人の頭と体を表現して、さらに刺突文(突きさす文)により羽など表現している。土器の内側に暗褐色の付着物があり、おそらく煮炊き(神饌の供物作った)に使用した痕跡と思われる。この人体文土器は、全国で50点ほど出土している。(『描かれた縄文人』御所野縄文館刊より)

シャーマンの姿・ロシア沿海州アムール川の少数民族・参考として



A



B



C

A・シャーマン・1894年 B・シャーマンの衣装 C・ナナイ族(ツングース系、アムール川に分布1894年) (『ハバロフスク地方のカルト・彫刻コレクション』ハバロフスク博物館刊より)

縄文親子の情愛が溢れる土製品は弥生時代への縄文人の願を乗せて



⑯



⑰



⑱

⑯子抱き土偶・東京都宮田遺跡(『歴博』第179より)、⑰赤ちゃん土偶・三戸沖中遺跡(三戸町出土資料より)、⑱足形付土版。垣ノ島遺跡(函館市縄文文化交流センターより・2016年写す)

⑯子抱き土偶・縄文中期。この土偶は高さ71mmの小さなもので、赤子を抱く土偶として知られ、乳を飲ませている姿、母の横座り足の重ね方、腕を回す姿に感動を受ける。本来の土偶の使われ方は病氣治癒、安産、豊饒、子孫繁栄などを祈願像と云われてきたが、縄文晩期には人の心に安寧を与える土偶に変化がみられる。

⑰おくるみ(布包)に包まれ嬰兒・縄文晩期。赤ちゃん土偶は青森県三戸町で出土、これは日本初と言われる。赤子の何か言いたげな表情に現代人は笑顔に誘われる。

⑱足形付土版・縄文早期後半。筆者は函館縄文文化交流センターで拝見した時、「縄文の人たちは、この様にして子供の記録を残したのか」と強く感動を受けた。孔に紐を通し住居の中に吊るし、子供の成長を喜んでいたのであろうか。この足形付土版は縄文早期後半に集中し、他の遺跡には見られず、この遺跡の時期のみに現れた土版となるらしい。親の埋葬時「送り」に、「父さん、あの世に自分の足形を持って行きな」と子供たちが持たせてくれたものであろうか。

《上記にみる足形付土版は、現代版の葬儀に見られ、故人の写真や個人の持物を遺体と一緒に火葬し、送るその仕草は現代でも同じである。この土版は縄文時代早期後半約4500前に、この様な人間の琴線に触れる感情があったことに驚きを覚える。そして、縄文期は巡り、やがて縄文晩期、2300年前に入り、稲作中心の新しい弥生時代に突入し、やがて、精神的に頼って来た縄文の女神像文化は崩壊し、その大半の縄文呪術文化は消滅したと考える。しかし、縄文晩期に「赤ちゃん土偶」が突然に生まれ、現代で言う所の「人間的」と言われる時代の幕開けを感じさせる人形土偶である。現代版の写真を見る思いで、赤ちゃんをいたわる土偶や、足形付土版文化は人間の絆であり、今日の世まで続く愛情を継承していることを強く思うのである。》

「縄文土偶」の故郷から眺めれば

縄文時代は過ぎ去り、歴史文化が始まる時代に入ると、縄文人たちは山の麓や舌状段丘地域から平野に降りて、「稲作文化」を発展させて、今日の日本の歴史文化時代を刻んできた。しかしながら、縄文人は平野に降り、稲作農業に専念し、山の麓のムラに戻ることはしなかった。その結果、縄文人のムラは忘れ去られ、2千年後、我々の時代の目の前に、縄文の舌状段丘陵に眠っていた女神土偶が突然に現れた眠りから起こされ、目を覚ました女神像は、現代人に伝える話は計り知れないと思うが、女神像

は黙視をしている。その姿からは「わたしをみなさい」と自信有り気の立ち姿にも見えるのではないか。そして、女神は「まだまだ土偶の仲間はあるのよ」、との声が聞こえるようである。筆者の直感として思うことは、まだまだ全国の山裾の舌状段丘陵に、未発見の縄文の女神像が、まだまだ、眠っていると考えている。

—おわり—

『縄文人の「あの世」と「この世」』を、最後までお読みいただきありがとうございます。感謝申し上げます。

2019年(令和元年)8月 孟蘭盆 池田 勝宣

「電子書籍版歴史シリーズ」

- 電子書籍版 『義経不死伝説の声を聞く』
- 電子書籍版 『仏教伝来の道物語』
- 電子書籍版 『“ジンギスカン即源義経”流布の顛末』
- 電子書籍版 『日露戦争への列強の策謀』
- 電子書籍版 『手宮・フゴッペ洞窟壁画人は何処から来たのか』
- 電子書籍版 『アムール下流域ヌルガンとし奴兒干都司と永寧寺と先住民族たち』
- 電子書籍版 『絵詞と元寇の考察・蒙古襲来考』
- 電子書籍版 『縄文人の「あの世」と「この世」』

付録・沖繩の針突習俗・アイヌの入れ墨

針突習俗については、『沖繩の成女儀礼』沖繩県読谷村立歴史民俗資料館刊行・1882年より転載した。昭和56年度の国・県の補助を得て、56～57年にかけて沖繩本島各地で、文化庁文化財調査官の指導の基に、調査員の熱意によって「沖繩本島針突調査報告書」が仕上がったものである。

《・・序文に 「私達が今回精力を傾けてきた針突(ハジチ)文化は、何時から芽生え、あるいは伝播して分化してきたかは知るよしもないが、古琉球の時代から南は八重山与那国から、北は奄美大島・喜界ヶ島まで、かなり久しい間、花咲いた民俗文化であった。中央文化偏重の時代から、地方文化尊重のきざしが見えて来た昨今にあってみれば、かつての方言撲滅運動は奇異に思える。わが南島(琉球列島)の同胞奄美地方は、早くから異文化者の島津氏(島津藩)の翼下(1609年)に置かれ、洗骨改葬を伴う風葬から、土葬という屈辱的な葬制を強要された。さらに、その後明治政府は、わが南島女性たる象徴である針突習俗を無惨にも法令でもって禁止するに至った。異文化者たる支配者、大和人(本土人)には、わが南島の針突習俗や葬俗、あるいは言語は蛮風としか映らなかつたらしい。・・》と厳しい指摘からはじまる。

《・・「大和乱髪者が 罰ぬね一んうちゆみ 寄らん歳寄らち ハジチ突かち」と、荒々しく歌い、またある時は、「ハジチ突ちぶさや 心から思ぐてい 突ちやる夜からや思ぐいとるり」と歌って、あれほど元気はつらつな沖繩娘たちも、いまは90余歳の老婆。しかし彼女等はいまてせも心のどこかで、「銭ぬあていん あぬ世までい持たりみ 私が突ちえーるハジチ あぬ世までいん」・・》と、歌っていることだろう。

《・・「私たちは彼女たちのこの永遠の宝物をこの現世にもいくらか残しておきたく、長い人生航路で疲れはて、耳、目、足腰不自由な方々のひとときを煩わして、これら貴重な宝物をいくらか分けていただくことができた。」・・》

昭和57年2月21日 読谷村立歴史民俗資料館館長

沖繩の針突習俗と成女儀礼・要約で記す。

南島にはかつて適齢期の娘たちの間では、両手の手甲から腕にかけて、ハジチ(針

突)と称される入墨(原文通りとする)をする風習があった。この風習が廃れた直接の原因は、明治政府の明治32年の禁止令によるものである。南島における針突の歴史は古く、陳侃(1489-1538・浙江省の人・尚清王の冊封正使 1534年来琉)の『陳侃使録』(1534年)や、袋中和尚(1552-1639・浄土宗の学僧)の『琉球神道記』(1605年)等に琉球婦人の入墨のことが述べられている。針突の分布は、南は与那国島から、北は奄美大島、喜界島まで分布し、分類すると三類型に分けられる。

I・針突系(道具は針で突く) パジチ、ファジチ、ハジチ、ハジキ、ハズキ、ハリヅキ、カシキ、(沖縄本島、宮古諸島、与那国島、奄美諸島)

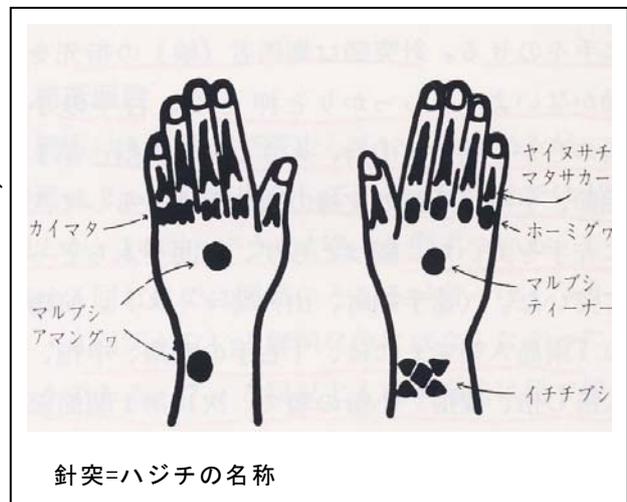
II・手突系(手で突く) テーツク、ティツキ、ペイツク、ピッツギ、(大島字堅、石垣島)

III・色付系(墨で青黒く色付け) イルズキ、(竹富島)

調査例は772例となっている。施術年齢は、17歳が97例で最も多く、最年少は5歳、最年長は30歳頃となる。結婚前に施術した者が658人、結婚後の者が59人となり、特に北中城村(城=グスク)等ではすべての人が結婚後に施術をしている。

針突模様

-  指背部・ヤイヌサチ=矢の先
-  手甲部(左右)・ホーミグラー、宝貝
-  カイマタ、クジマ、海の生物の名
-  マルブシ、ティナー、=丸い星
-  イチチブシ=五つ星



その他、腕の内側に「𠄎」や、「𠄎」、「𠄎」形はウルマグラー称される「馬の形」がある。左手腕に「𠄎」トゥザ=魚を突くモリの魚具の文様がある。

糸満市の針突模様に、身分の高い王族婦人のものは線が細く、農家婦人のものは線

が太く、手一杯に模様が施される。宮古地方にも士族と平民との模様に差異があり、士族は沖縄本島のように指手甲、手首の部分にあって、平民は指、手甲、腕にかけて様々の文様が施してある。



①



②

①大宜味村・明治10年生れ・19歳の時

②宜野湾市・明治28年生れ・14歳の時



③



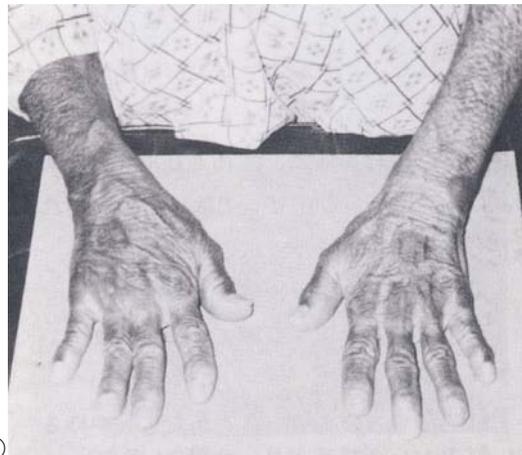
④

③読谷村・明治12年生れ・18歳の時

④読谷村・明治13年生れ・20歳の時



⑤



⑥

⑤読谷村・明治15年生れ・20歳の時

⑥玉城村・明治14年生れ・20歳の時

針突と信仰 針突が南島女性としての一人前の象徴と、針突の信仰からも考えられる。施術の理由事例が最も多いのは、「針突をしないと大和(本州)へ連れて行かれるので突いた」が、264例。それ以外に、「薩摩に連れて行かれる」3例、「唐に連れて行かれる」8例、「大和・唐に連れて行かれる」4例、「アメリカ、オランダ、支那、ハワイ、台湾等に連れて行かれる」18例、「兵隊に連れて行かれる」15例、「どこか遠くに連れて行かれる」1例、「大和人と沖縄人を区別するため」1例、これ等の回答は、生まれ故郷から強制的に連れ去られることを拒んだことを示している。

1609年に島津氏の侵入があって、大和人の圧政に抗した沖縄女性史の一端が窺える。

針突の信仰には、「後生(あの世)に行けない」、「後生に行けない」、「後生で苦勞する」等があり、これは墓の信仰に見られるように「現世の家は仮宿であり、墓こそが永遠の住家である」という信仰によるものである。

厄払い印は、「ハジチを突くと厄が払われる」、「病気にならない」古い習俗を示す。

成女の印は、「ハジチは大人になった印」、「娘になった印」の例がある。また、「母親や姉の身内の者が突いているので、一緒に突いてもらった」、「ハジチを突くと、傷が治るまで10日余遊ぶことができた」、「自分で、いたずらで突いた」例などもある。

ハジチを願望した歌に、

ハジチ^ち突ちぶさや 心^{くる}からみぐてい 突^ちちやる夜^{ゆる}からや みぐいとうるり

(訳)ハジチ^ち突きたさは、心からの願いいで、突いた夜からは、願いがかない心もやすらかだ。

後生(あの世)の歌に、

銭^{じん}ぬあていぬ一すが 後生^{グソー}に持たりゆみ 私^わあ手^{てい}ぬハジチ あの世^ゆまでい

(訳)銭があっても何の役に立つか、後生までは持って行けないから。私の手にあるハジチは、あの世まで持って行ける。

結婚に関する歌に、

ニービチ^{めーたち}前二月 あいがる^{たちち}二月 またん押^{うし}ぬきみ 二月^{たちち}なすみ

(訳)結婚式は二カ月後にと約束しているが、二カ月というのは大部ありますね。またも日延べして、二カ月後にするんですか。

年齢に関する歌に、

年^{とし}ゆたんでい^{うむ}思^してい ハジチぐわ^ち突^ちちやれ 年ゆでいる^し知^しゆる 肝^{ちむ}や十八^{じゅうはち}

(訳)年をとったと思って、ハジチを突いたけれども、年を数えて見て年をとったということが分かる。気持ちは18歳だけれども。

文様を歌った歌に、(伊江島)

長^{なが}パジチ突^しちゆみ 玉^{たま}パジチ突^しちゆみなりば長^{なが}パジチャ ましやあらに

(訳)長い文様のパジチを突きましょうか、それとも丸い文様の玉パジチを突こうか。できるならば長い文様のパジチが良くはないか。

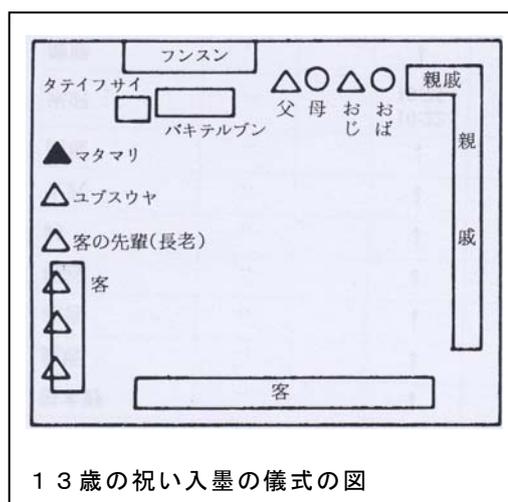
針突師をほめたたえた歌に、(渡名喜島)

沖繩^{うちなー}長^{なが}浜^{はま}ぬ 突^ちきみせるハジキ 渡名^{とく}喜^な東^{あがり}浜^{はま}ぬ うち^ひ光^ひちやい光^ひやい

(訳)沖縄本島の長浜さんが突いて下さったハジキは、ちょうど渡名喜島(島尻郡)の東浜のように美しく、光り輝いているよ。

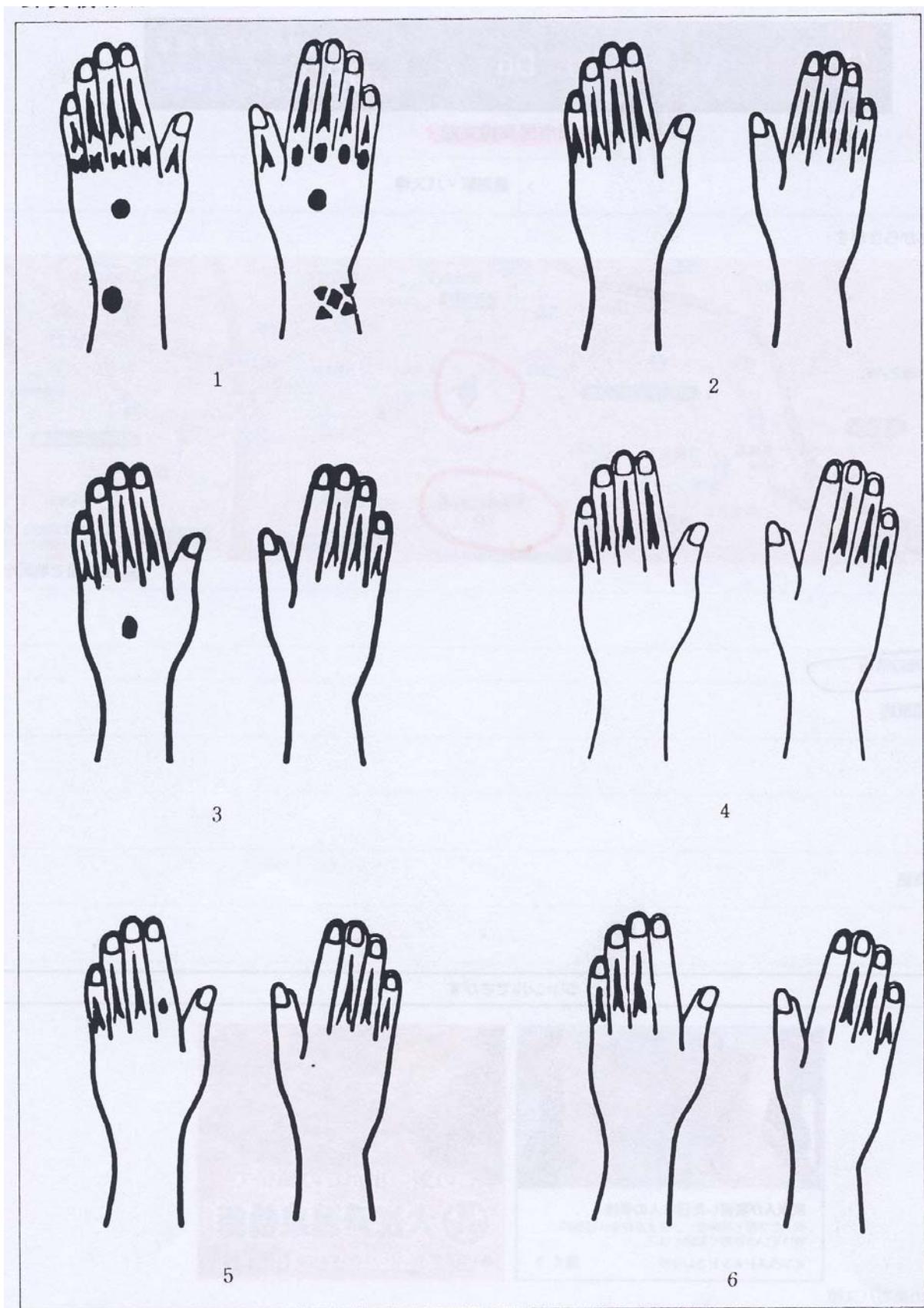
ジュウサンユーエー(13祝い) 数え13歳になると、ジュウサンユーエーの祝と称して、旧正月の生まれ年の干支の日に行く。読谷村宇座では、親戚を招いて会式膳など御馳走を出して、トートーメー(仏壇)に花や米、酒、ウチャヌク(餅)、クバン(白紙)、線香、チャウキ(茶請)等を供えて祈願する。

石垣島^{かびら}川平(「マユンガナシー」来訪神の祭り P74~76 参照)では、13歳の祝いをカナツカルヨイ(カネツケ祝い)と称している。この日はおじいさんに頼んでカンザシを挿してもらおう。カンザシを挿す人をユブスウヤ(鳥帽子親)といい、本人はマタマリと呼ばれ、「今日から一人前だよ」と言われ、酒盃をユブスウヤからマタマリに渡され

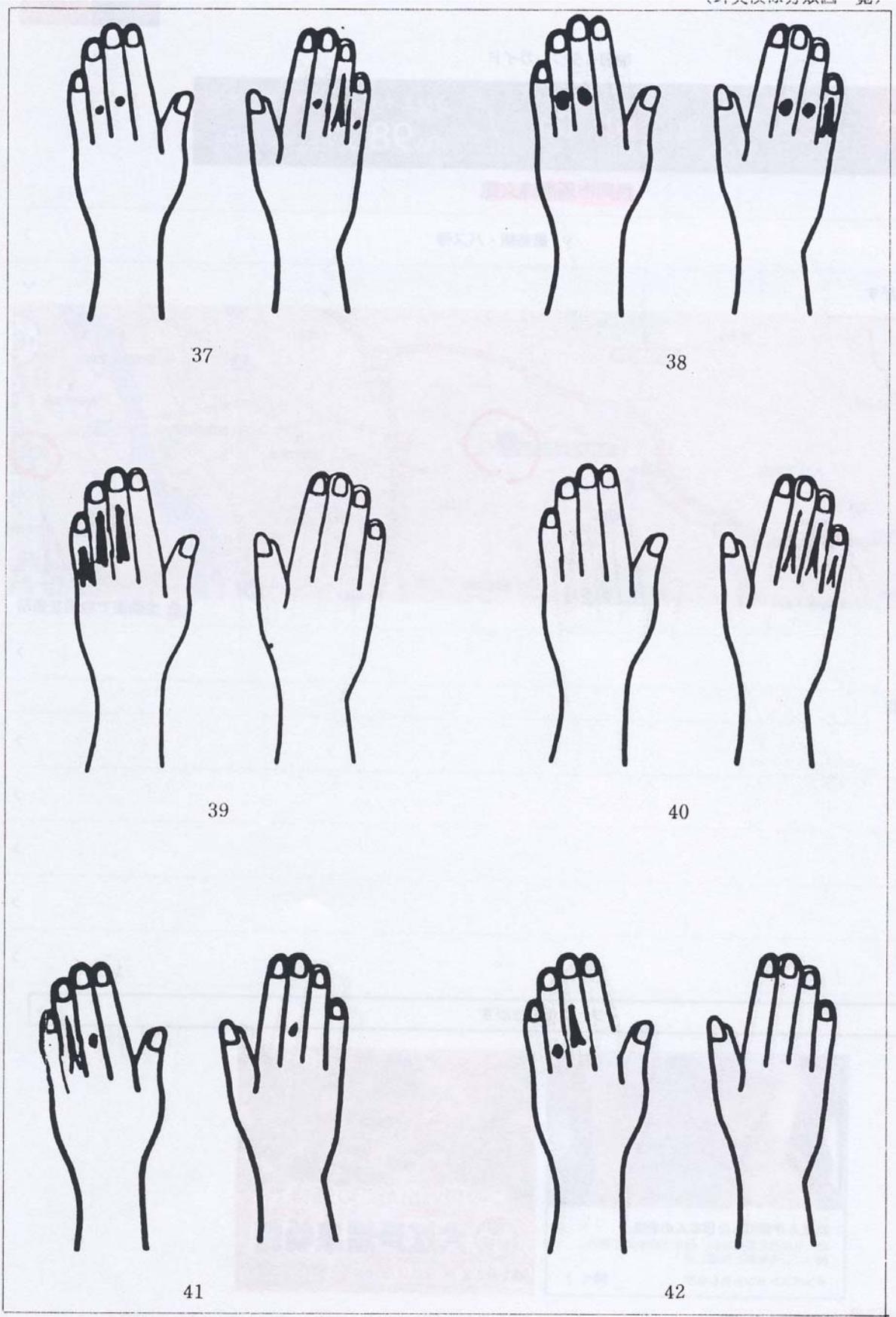


この儀式は一番座で行われる。上図の座席。ハジチ文化は、「女子の入墨は成女のしるしで、調査で聞きうるところでは、有夫の印、貞操の印で、嫁入りする時に行く地方が多い。本土の「おはぐろ」と同じような成女の印で、入墨をすることは一種のイニ

シェーション的試練で、入墨が完成することは成女式の済んだことを示している。



⑦針突模様分類図 1～6 (7 1 模様ある)



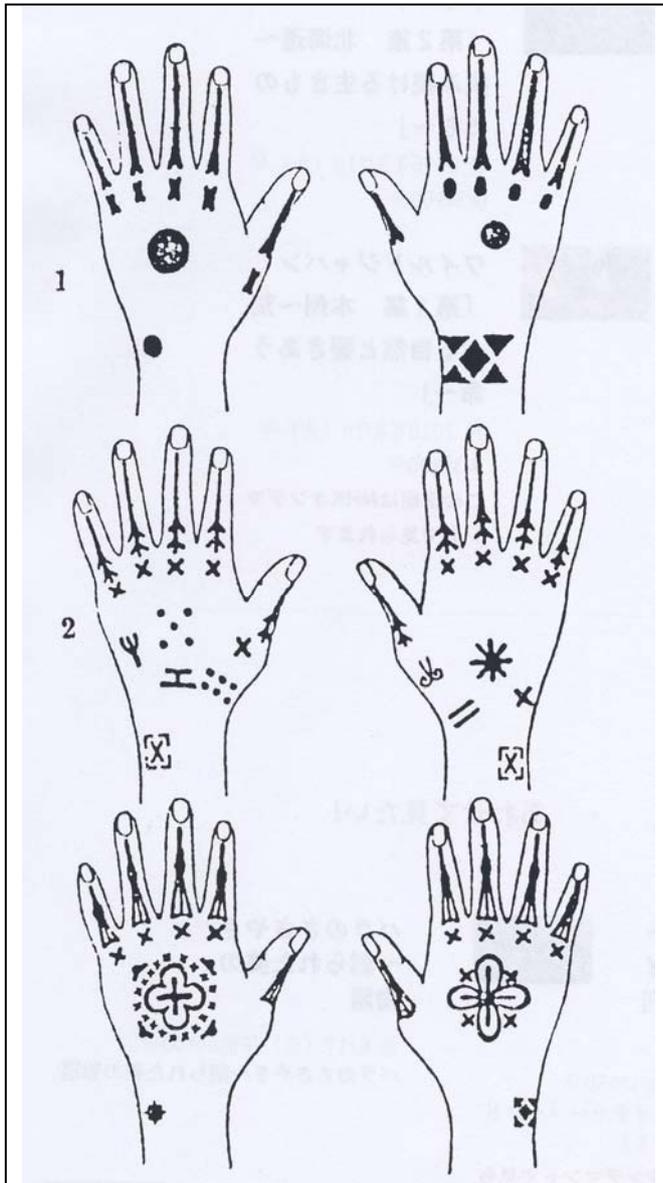
⑧針突模様分類図 37～42 (71模様ある)

琉球女性の入れ墨の世界 『青い目が見た・大琉球』 編著ラブ・オーシュリーより

序文に、《・・・地球上に存在した“^{しゅれい}守礼の^{くに}邦”の画集であり、“大琉球”の讃歌である。世界に名だたるブロートン、バジル、ホール、マクスウェル、ビーチー、ベルチャー、ペリー提督の数多くの冒険家、探検家が守礼の那を訪れ、大琉球を讃える航海記を残した。・・・》—1987年7月 ラブ・オーシュリーより

北は奄美から南は八重山まで、全琉球の島々の女性は手の甲に入れ墨をする。奄美では手の甲の中心の模様は一定していない。個人の趣味や好みで模様が違う。・・・

—ファーネス—

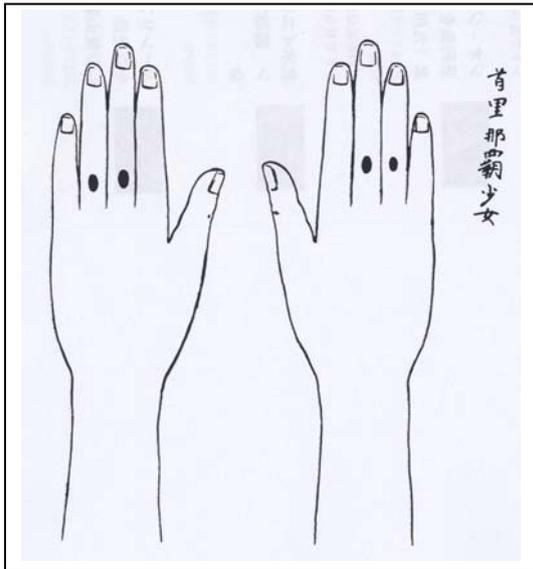


スケッチ・ファーネス(1896年)

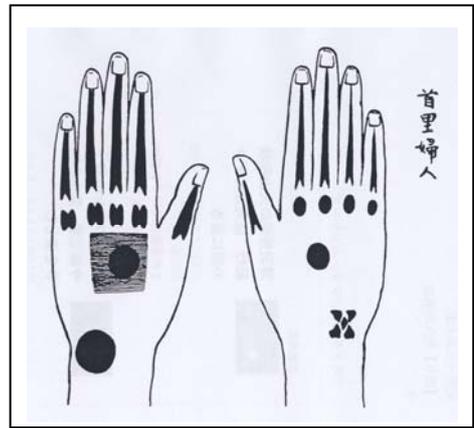


ハジチ(入れ墨)「ギヤマード航海記」木版画ウィンパー

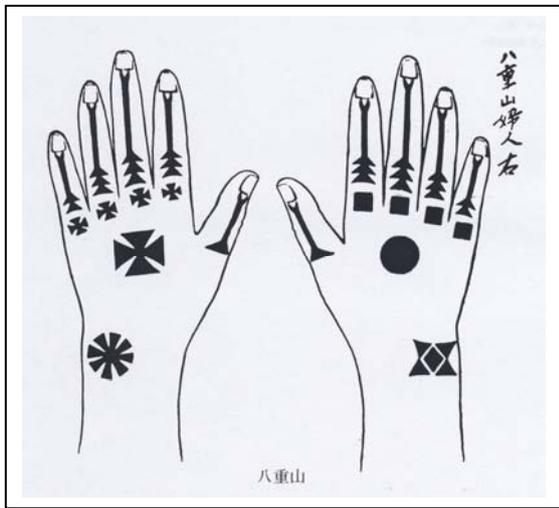
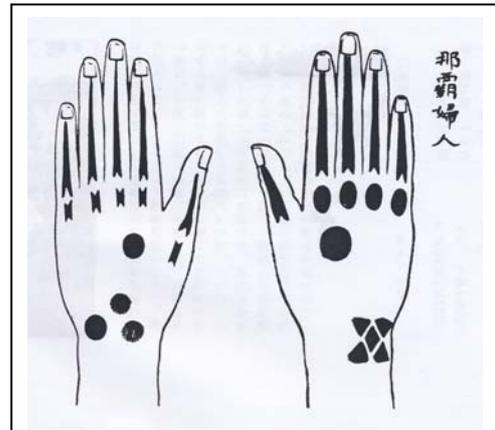
入れ墨は世界で古くから行われている習慣である。紀元前54年、イギリスを侵略したシーザーは原住民の入れ墨を観察している。琉球の女性は手の甲に入れ墨をしていたが、ニュージーランドの戦士は顔全身入れ墨であった。入れ墨を表すTattoo「タトゥー」という言葉はタヒチ語が起源。沖縄では入れ墨の模様は一定している。我々の観察したところでは、身分の上下を問わず、あらゆる階層の女性が入れ墨をしている。



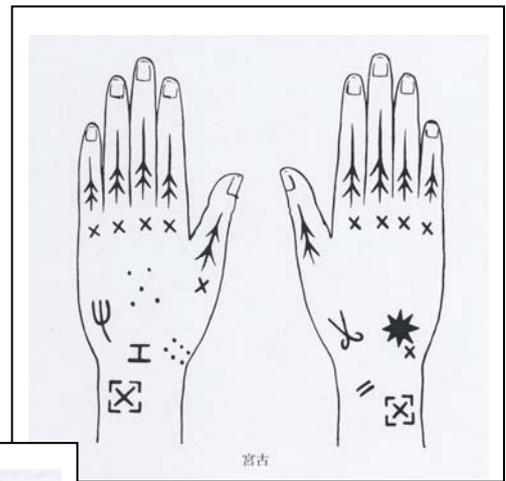
「青い目が見た入れ墨」 首里那覇少女



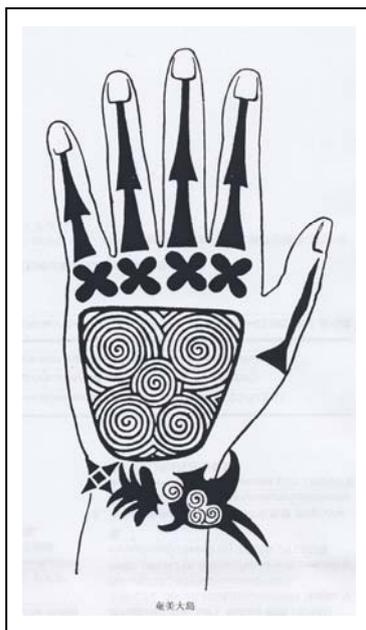
↑首里婦人 ↓那覇婦人



八重山諸島



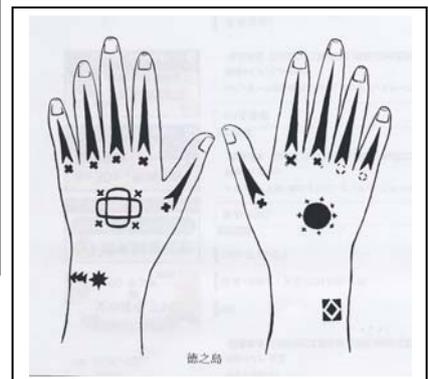
宮古島↑ 徳之島↓



奄美大島



奄美大島



アイヌの入れ墨



⑨ 『蝦夷島奇観』 ^{はたあねきまろ} 秦憶丸著(間宮林蔵の師) 国立国会図書館オンラインより



⑩・『蝦夷島奇観』 同上



⑪・「カラパイア」不思議と謎大冒険より

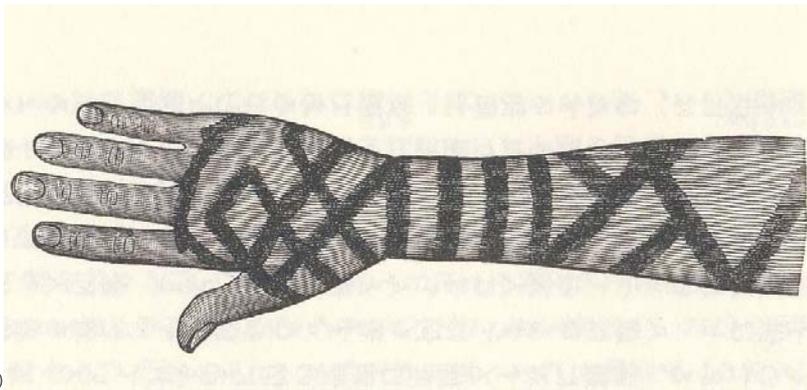
イザベラ・バードが見たアイヌの世界 『日本奥地紀行3 北海道・アイヌの世界』から、その紀行文「ひどい苦痛と装飾模様」を読んでみる。

《・・・女性はすべて、口の上下に幅広く帯状に入れ墨をするだけでなく、指関節の付け根にも帯状に入れ墨する。そして手の甲の凝った模様^こに続いた後、「手首から」肘

までは腕輪状の入れ墨になっている。美しさを損ねるこの処置(入墨)は5歳の時に始まるが、その被害者にはまだ乳離れしていないような少女もいる。私は今朝一人の愛らしく賢^{かしこ}そうな少女が入れ墨されるのをみた。一人の女が、手にした歯先の鋭い大きな小刀(マキリ)で上唇に数本の水平方向の傷を実にすばやくつけていったあと、とても愛らしい口許までその曲線に沿うような傷をつけた。そして、わずかの出血が止まらないうちに、囲炉裏^{いろり}の上に釣りさげられた簀^す(注1)に付いた真っ黒の煤^{すす}を少量、注意深くすりこんだ。2、3日たつと傷をつけられた唇を樹皮の煎じ汁(注2)で洗って模様を固定する。こうして多くの人が絵具を塗り付けたと見紛うような青い模様になっていく。昨日2回目の施術を受けた少女の唇はぞっとするほどはれ上がっていた。炎症を起こしていたのである。一番新しい被害者(今朝初めて入墨された少女)は、傷をつけられる間、両手をしっかりと握りしめて、泣くようなことはまったくなかった。



⑫



⑬

⑫アイヌ女性の刺青「カラパイア」より ⑬『日本奥地紀行3北海道』イザベラ・バード著より

両唇の回りの模様は結婚するまで毎年深く広くされていき、腕の腕輪状の模様も同じようにして広げられていく。男たちはこの習俗が一般化した理由^{わけ}を説明できず、古くからの習俗であり、信仰の一部をなし、入れ墨のない女は絶対に結婚できないと言う。アイヌは少女が5、6歳になる頃から腕の入れ墨を開始し、肘から下に向かって施していくのである。・・・(略)》

注1・囲炉裏の火棚にのせた簀^すを指している。しかし、一般的には火棚の釣(スワッ)に釣り下げられた鍋(す)の底(のすす)から採る。

注2・『アイヌ民族誌』には、谷地^{やち}だも(モクセイ科、落葉広葉樹)、青だもの樹皮と蓬^{よもぎ}が入れられたとある。 ※「入墨」「入れ墨」については、その論考者の通りとした。